

【作者】



海冬レイジ

かいとう れいじ

トイとかプラモとか大好き！

いまだに新人気分が抜けないキャリア7年目の職業作家。
札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

【イラストレーター】

るろお

冷凍庫の中には凍ったタオルが常時3枚。
エアコンが欲しいイラストレーター。

カバーイラスト／るろお 著／目黒廉ユウコ（ムシカコグラフィクス）



J

か08-06



機巧少女は傷つかない6

海冬レイジ

VI

580



9784840139731

ISBN978-4-8401-3973-1
C0193 ¥580E



1920193005806

定価：本体580円(税別)

メディアファクトリー



機巧少女は傷つかない6

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。夏休みも既に半ばが過ぎ、夜会を勝ち抜くため〈紅翼陣〉体得の修行に臨んでいた雷真は、硝子からとある人物の内情を命じられる。その人物とは、四年前の前日夜会の勝者である、〈迷宮の〉^{ミラージュ}魔主——グリゼルダ・ウェストン。学院から出られない夜々の代わりに、小紫とともにグリゼルダのもとに向かう雷真。すると、彼女は〈紅翼陣〉とそっくりな能力を持っていて……? 「俺を弟子にしてくれ」「と……遠まわしの求道?」「妙な自己完結をするな!」シンフォニック学園バトルアクション第6弾!

イラスト

海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない1 Facing "Cannibal Candy"

[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない2 Facing "Sword Angel"

[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない3 Facing "Elf Speeder"

[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kavalier"

[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない4 Facing "Rosen Kavalier"

CD (Side-A) 付き特装版

[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない5 Facing "King's Singer"

[イラスト るるお]

機巧少女は傷つかない6 Facing "Crimson Red"

[イラスト るるお]

マシノアール

機巧少女は傷つかない6
Facing "Crimson Red"

海冬レイジ



機巧少女は傷つかない6

海冬レイジ





6


Facing
"Grimson
Red"

機巧少女は

傷つかない

海冬レイコ

るるお

A purple dragon-like creature with large white wings is perched on the leg of a person whose legs are spread wide. The creature has a small horn and is looking down at the leg. The person is wearing orange shoes. The background is a soft, out-of-focus green and yellow.

胸囲こそ神に見放されているが、
その下はまさに芸術的だった。
宙真の視線に気づき、
シャルは急にもじもじした。

「な、何見てるのよ、変態」



それは、今から二年と少し前のこと——








「では、その……」

クリセルダは視線をさまよわせ、
ぐずぐずとためらってから、



少しは……女らしいかと
上目遣いで訊いた。

Unbreakable Machine-Doll

contents

Prologue	夏が終わる前にp11
Chapter 1	裸の魔術師p21
Chapter 2	愚か者が魔王に挑むp56
Chapter 3	居候日記p86
Chapter 4	変われば、変わるp122
Chapter 5	誇りと絆p156
Chapter 6	アリアドネの糸p194
Chapter 7	紅き王p227
Epilogue	そして、夏が終わり——p262



マシンドール
機巧少女は傷つかない6
Facing "Crimson Red"

海冬レイジ

MF文庫 

口絵・本文イラスト●るろお

編集●庄司智



Prologue

夏が終わる前に



「ふふ……可愛いです雷真。今度はかくれんぼがしたいんですか♡」

夜々が一步進むたび、黒い妖気が梢を揺らし、小鳥が逃げ惑う。

そこは魔術世界の最高学府（ヴァルブルギス王立機巧学院）の敷地内。青々とした葉が夏の日差しを遮り、木立ちの中は涼しい。

二か月の夏休みも既に半ば。半数近い学生が帰省しているが、学内がガランとしているかと言えばそうでもなく、むしろ普段より活気づいていた。

メインストリートには寝椅子やシートが並べられ、半裸の男女が日光を浴びている。芝のピッチでは男子学生たちがフットボールやクリケットを楽しみ、テニスコートには明るい笑い声が響いていた。

休暇の賑わいに背を向け、夜々が林の中をさまよっていると。

「あ、夜々さん。こんにちは」

「アンリエットさん——」

エプロンドレス姿の少女が、てくてくと歩いてきた。テニスボールが数十個も入った、大きなバスケットを提げている。

夜々は取調べ中の刑事みたいな目をして、アンリに詰め寄った。

「アンリエットさん、雷真を見かけませんでしたか？」

「え？ いいえ」

「夜々に嘘をついても無駄ですよ？　むしろ無謀です……ふふふ」

ひい、と怯えるアンリ。どうやら、本当に知らないようだ。

アンリをその場に残し、再び歩き出す夜々。アンリが呆然とそれを見送る——と、いきなり茂みから手が伸びてきて、アンリの口を塞いだ。

とつさのことで、悲鳴も出せない。アンリは茂みに引つ張り込まれた。

「むもっ？　むも？　むもむも!？」

「静かに。じつとしてろ。何もしない」

アンリを拘束していたのは雷真だった。上半身には何も着ていない。たくましい二の腕に抱かれ、アンリはたちまち赤面した。

雷真が手をゆるめると、アンリは自由になった口で、

「こ、こんなところで、私をめちゃくちゃにするんですか？」

「するかそんなこと——」

「そ、そんなこと——」

ガーン、とショックを受ける。アンリはいじけた様子でうつむいた。



「そうですよね……私なんか順番が回ってくるわけ……」

「男嫌いなのに、悪いな。少し我慢してくれ。夜々がいなくなるまで」

「どうかしたんですか？ 夜々さんとケンカでも？」

「いや、そういうわけじゃないんだが」

アンリに背を向け、夜々の方をうかがう。刹那、アンリが驚いたような声を出した。

「ライシンさん、その傷……」

そつと遠慮がちに、雷真の背中に触れる。

「これ、何の傷ですか？ サメに噛まれたみたい……」

「自分じゃよく見えねーんだ。そんなにひどいか？」

「はい……。これ、ロキさんに斬られた傷とも、こないだ縫った傷とも違いますね。痛いんですか？」

「たまに痛むし、突っ張る。だが、どうってことはない。……そんなことより、おまえ、どっか行く途中だったんじゃないか？ それ何だ？ 魔球のボール？」

アンリのバスケットを示す。中には古びたテニスボールが詰め込まれている。どういうわけか、ボールには番号が振ってあった。

「あ、あの、私、待ち合わせしてるんですつ。それじゃー」

アンリは急にあわてて、べこりと腰を折った。

逃げるように駆け出す——どうやら、何か秘密があるようだ。

(随すとは水臭いな。ま、俺が言えた義理じゃねえけどよ)

雷真も今、古傷のことをはぐらかした。

苦笑して、林の中に戻る。

雷真は自主トレーニングの最中だった。

両手で印を結び、精神を研ぎ澄ます。呪言を唱えつつ、印を組み、魔力の流れを念想。両手を突き出し、丹田で練り上げた魔力を解放する。

青白い魔力が噴き出す。——ただし、指ではなくて、のひらからだ。

全然、収斂していない。雷真は舌打ちした。何度やっても、このさまだ。

だが、雷真はあきらめない。むきになって魔力を高め、再び試みようとしたとき、突然、猛烈な冷気が横つ面を張った。

「貴方にはあきれます。雷真殿」

雷真の背後に、ひんやりと冷気をまとって立つ、たおやかな乙女がいた。

「いろり——」

「夜々の目を盗んで、また紅翼陣の鍛錬ですか？」

「……あいつが見てる前じゃ、やらせてもらえないからな」

「見ていなくても同じことです——ご無理をなさらないでくださいと、あれほど……いえ、

今日は小言を言いに来たわけではありません。小紫が、こちらにきているのではないかと思ひまして……」

「小紫？ いや、見かけてねーが」

「そうですか。では――」

「待った――」

いろりの肩をつかみ、くるりと回して、こちらを向かせる。

いろりの白い頬が、見る間に赤くなった。

「い、いけません雷真殿……このようなところで……と、鳥が見えます……」

「何をだ――」

「あの、こういつた場所では、着たままの方がよろしいのでしょうか？」

「おまえら、そんな話ばかりだな――何で俺のまわりにいるやつはみんな――それとも俺がおかしいのか？」

頭をかきむしり、吠える雷真。その首筋に強烈な殺気が当てられた。

「ら、い、し、ん~~~~~」

「げっ……」

地獄の底から響いてくるような声。もちろん、夜々の声だった。

夜々はわっと泣き出して、雷真の腰にしがみついていた。

「おかしいと思つたんですー 夜々を遠ざけて、こそこそとー」

「……仕方ねーだろ。言えば絶対止められるしな」

「よりにもよつて、いろいろ姉さまと逢引きだなんて……」

「そんな話か!? 真面目に修行してただけだ。いろいろはたまたま——」

「う・そ・で・すー だって雷真、もう説いてますー」

「暑いから説いでただけだー つか、いろいろは着てるだろー」

「つまり、姉さまが脱がした……!?」

いろいろは咳払いして、落ち着き払った声で言った。

「かか勘違いするな夜々。お、お、愚か者め。わたた、私がそのような破廉恥なふるまい

におおつ、及ぶはずがっ」

「何でももる!? 何で目が泳ぐ!? 誤解を招くだろー」

そのとき、あたりの木々から鳥が一斉に飛び立った。

雷真も、夜々も、いろいろも、そろつて林の奥を振り返った。

見通しの悪い木立ちの向こう。金属製のゴーレムが立っている。

強い魔力を感じる。そして、殺気のようなものも。

「……見覚えがあるな。(黒鉄結晶)アーバイン先輩だ」

ゴーレムの傍らに男子学生の姿がある。眼鏡をかけた、知性的な面立ちの青年。その手

を覆うのはシルクの手袋——彼も（手袋持ち）だ。

アーバインは瞑想（めいそう）しているようだ。目を閉じ、体内の魔力を整えている。次の瞬間、ゴーレムがぐにやりとゆがみ、針金のように延びた。あたりの梢（てふ）がかすかに揺れ——突然、大量の青葉が落ちてきた。

「姉さま、これは……!?」

「鋼線のようなものだ。金属を細く延ばして、精確に葉を狙（ねら）ったか……」

「あのボディ、ただの金属じゃありませんね。魔鉱（まこう）か何か、でしょうか」

姉妹が警戒の色を強める。雷真（らいしん）もまた、相手の力量に絶句した。

流体を収束させ、刃を作る。それだけでも大変だが、葉の一枚一枚を狙う技術は卓越している。ゴーレムの感覚と自分の感覚を同調させたのだろうか……。

「のぞき見とは感心しないな」

遠くでアーバインが言った。どうやら、こちらに気付いたようだ。

ゴーレムがゆがみ、蛇のように伸びて、こちらに飛んできた。

蛇は再びゴーレムの姿になる。いつの間にか、その肩にアーバインが乗っていた。

「言葉かわすのは初めてだね。（下（オカシ）から一番目）くん」

「悪いな、先輩。自習の邪魔をしちゃった」

「君が言うとは滑稽（こっけい）だね。常日頃（つねひこう）、学内を騒がしている君が」

冷やかな視線を夜々に向ける。事実、夜々と雷真は毎日ドタバタやっている。場所も時間もわきまえず……だ。雷真は恐縮した。

「何て言うか、その、正直すまん……」

「その調子で、ぜひ〈剣帝〉の邪魔もしてくれよ」

アーバインは小馬鹿にしたように笑って、背を向けた。

「君とは次の戦いで当たる。あとひと月、せいぜい魔術の腕を磨いてくれ」

「……わざわざども。〈黒鉄結晶〉先輩」

言うだけ言うと、アーバインは去って行った。

その背を見送り、いろりは不機嫌そうにつぶやいた。

「腕は確かなようですが、失礼な殿方ですね。雷真殿に上から目線で」

「姉さまが言わないでください」

「おまえが言うなよ夜々ー 二年前を思い出せー」

雷真がツツコミを入れると、夜々は先ほどの続きとばかり、

「今では下から目線ですー どんな特殊な性癖にも応えますー」

「下からの意味が違うー」

「わ、私とて、ひと通りのことはー」

「姉さま……またでしゃばって……」

「落ちて着けー」

二人にげんこつを落とす。頭を押さえてうずくまる姉妹をよそに、雷真はアーバインが去った方をにらんだ。心配した様子で、夜々がおずおずと訊いてくる。

「雷真、どうかしたんですか？」

「……さっきのを見たろ。あいつに比べりゃ、俺は三流もいいところだ」

「そんなことありません。雷真は夜々に相応しい、一流の人形使いです」

雷真は応えず、こぶしを握りしめた。自らの「ゆるみ」を戒めるように。

何度も死地をくぐり抜けるうちに、いつの間にか、自信のようなものが芽生えていた。

俺だってけっこうやれる——そんな誤解が。

学生たちは皆、子どもの頃から魔術の修練を積んできた。一方、雷真は基礎訓練も足りていない。圧倒的な経験の差を、一朝一夕には埋められない。

やはり、（紅翼陣）（こうよくじん）を体得するしか道はない。

雷真はざりつと奥歯を噛んで、きつく目を閉じた。

猶予期間は一か月。

どうやら、つらい一か月になりそうだ。



Chapter 1

裸の魔術師

1

チェスの手ほどきをしてくれたのは、家庭教師の先生だった。
あるとき、駒を盗めながら、無邪気にたずねたことがある。

「どうして私を弟子にしてくださいましたのですか？」

「弟子にした覚えはない。勉強を見てやると言っただけだ」

「同じことです。先生は魔王でいらっしやいます」

「……おまえの父親に」

いつになく歯切れが悪い。だが、ごまかさず、教えてくれる。

「昔、世話になったからだ」

「——初耳です。先生はあの町の出身なのですか？」

「チェックメイト」

いきなり詰まされる。負けず嫌いの私がふくれていると、先生は駒を取り上げ、盤面を



ひとつ前に戻しながら、いつになく優しい声で言った。

「チェスは奥深い。だが、単純だ。定跡も手筋も、すべてが理路整然としている。それでいて、勝負を決めるのは論理ではなく、心理の動きだ」

「心理……？」

「慢心、錯誤、焦燥、欺瞞……名手の指し合いですら、そうなる。魔術も同じだ。自分を殺し、神の視点に徹しろ。相手のキングを詰めるためならば——」

気がつくとき、ふたつの青い瞳が、まっすぐ私を見つめていた。

「躊躇せず、駒を捨てろ」

——怖いと思つた。けれど、私は先生に気に入られたい一心で、

「はい、先生」

素直にうなずき、微笑んだのだ。

2

「それで、小紫がどうしたって？」

沈んだ気分を強引に立て直し、雷真はいろりを振り向いた。

「主には口止めされているのですが……どうも、家出をしたようで」

「家出!」

夜々と雷真の聲が重なる。

「何だそりゃ……行方不明ってことか?」

「あ、いえ、それほど的大事ではないのですが。書き置きもありましたし。ただ……少し、ひとりになりたいようで」

「硝子しょう子さんは何て?」

「したいようにさせなさい、と。でも、私は……やはり、心配で」

「姉さま、書き置きには何て書いてあったんですか?」

いろりは帯に手を差し入れ、二つ折りの紙片を取り出した。

夜々と二人、紙片を聞いて読んでみる。

「姉さま、硝子へ。ちよつと街をぶらついてくるね」

雷真と夜々は、そろって半眼になった。

「……これを見る限り、ただの散歩のように思えるんだが」

「な、何をおっしゃるのですー 危険ですー もし買い食いなどしたら……」

「させてやれー そのくらいー」

「いけませんー それが非行の第一歩なのですー 買い食いをして気が大きくなり、つい背伸びをして酒など飲んで、小児性愛の男どもにからまれて、あれやこれやで自暴自棄に

なり……」

「いや……明らかに飛躍しすぎだからな？」

「やがて変な男に売り飛ばされて、変態どもの慰みものに……ああ、そんなことになったら、私は機巧都市を氷漬けにしてしまいます……！」

「落ち着けー 瞳孔を開くなー」

いろりはがくくと不穏な感じに震えていた。変なところで夜々に似ている。

「そんなに心配するな。夜には戻ってくるだろ——って言うかおまえ、小紫がいなかったのに、どうやって学院の敷地に入ったんだ？」

「なじみの氷屋が通りかかったので、馬車の荷台に潜り込みまして」

「不法侵入じゃねーか！ 罫りはどうする？」

あごに手を当て、考え込むいろり。どうやら、考えていなかったらしい。

いろりにしては珍しく滅茶苦茶だ。よほど小紫が心配なのか。奇行が目立つ夜々でさえ、睡然として眸を眺めていた。

「……仕方ない、キンバリー先生に相談してやるよ」

「それは妙案。そうします」

「ひとりで行くのか？ 俺も行った方が——」

「主が知遇をいただいておりますれば、雷真殿のお手をわずらわせずとも」

青みがかった銀髪をひるがえし、どこかはかなげに背を向ける。

「小紫を見かけましたら、早く戻るようにと伝えてください」

「わかった」

「夜々、おまえも。頼んだぞ」

「はい、姉さま」

いろりは肩を落とし、とほとほと歩いて行った。

「姉さま、少しやつれたような……」

「何て言うか、情が深いよな、いろりは」

「夜々だって深いですー それはもうバイカル湖のようにー」

「確かに世界一だなー 深けりゃいいってもんでもないけどなー」

「ひどいですー」

両手を振り上げて怒る。だが、夜々はすぐに元氣を失くし、すねたように言った。

「姉さまは、小紫には優しいんです」

「おまえのことも大事にしてるよ、いろりは」

「そんなことないです。いつも、お小言ばかり……」

反発しつつも、思い当たる節があるのだろうか。夜々は黙り込んだ。

それから、不意に、こんなことを言った。

「雷真。自動人形の寿命って、どのくらいだと思いますか？」

「寿命？ 何だ、やぶからぼうに……」

正直わけがわからなかったが、夜々が真剣だったので、真面目に答える。

「安物の耐用年数はせいぜい十年くらいだが——シグメントは一五〇年も生きてるって話だし、ルネサンス期のやつが現存してたりするしな。名器を大事に使えば、數百年くらいもつだろ。それがどうした？」

しかし、夜々はそれには答えず、

「……喉が渇きませんか？ 何か冷たいものをもらってきます！」

元氣よく駆けて行く。雷真はあつけに取られ、相棒の背中を見送った。

一体、今のはどういう意味だったのだろうか？

なぜだか、落ち着かない。それに、小紫のことも気になる。

「私、肝心なところで……役に立たない……」

ひと月前、小紫はそう言って泣いていた。

古傷を刺激されたような気がして、気持ちがざわめく。

「……こんな精神状態じゃ、満足な修行ができねーな」

雷真は苦笑して、歩き出した。学院の敷地内だけでも、小紫を探してみよう。

林を抜け、メインストリートに出たところで、さらびやかな金髪に出くわした。

「シャル……？」

友人のシャルが、広げたシートの上で横になっていた。その頭の横で、おともの仔竜こりゅうが猫のように丸くなっている。

こちらに気付き、身を起こすシャル。雷真はあわてて目を覆った。

「おま……何で脱いでんだ!?」

3

外気は三十℃を超えているのに、医学部の廊下はひんやりと涼しかった。

コツコツとヒールの音を響かせて、白衣の女教授——キンバリーが歩いている。やがて医務室の手前までくると、キンバリーはノックもなしにドアを開けた。

凍りつく時間。一瞬後、半裸の少女があわてて飛び出していった。

部屋の主、常勤医のクルーエルが、口笛を吹きながらカルテの整理を始める。

「おや、キンバリー教授。夏休みだったのに何の用だ？ 生理痛なら町医者に——」
ひゅんつ、と風を切り、何かがクルーエルの眼鏡めがねをかすめた。

石の壁に突き刺さり、びいびい……、と音を立てて震える万年筆。

「ご機嫌よう、ドクター。男子二人が退院した途端、お盛んなことだな？」

「ほっとけー俺にも『夢おっぱい』の夏休みがあつたっていいだろ!」

「せめて『夢いっぱい』と言いたまえ」

「同じことだー」

「その口をつぐむかね? それとも就職活動を始めたいかね?」

「れ……例のレポートはここにありますが、サー」

クルーエルはカクカクした動きで机を開け、中から封筒を取り出した。

重い。ぎっしりと紙が詰め込まれている。

「ずいぶんと書き殴ったな。代金に見合つた内容だろうね?」

「へっ。まともなラブレターも書けなかつたエイミーちゃんに、文章を偵踏みされる時代

がくるとはな——」

ハサミが空を切り、クルーエルの前髪を数本落として、壁に突き刺さつた。

「……失言でした、サー」

「君の見立てを聞こう」

「……生まれながらの化け物さ。約束された子どもと同等の魔力親和性がある」

クルーエルは椅子にふんぞり返り、背後の机にもたれかかった。

「おまえさんも知つてるだろうがね、そういう一族はいくつかある。中国の劉氏に、エジプトのファティマ、中東のアリー家、ギリシャのサイクロプス、インドのシャラダに東欧

のブラド——ロマ人もそうだな」

一部は既に力を失っているが、いずれも魔術の名門、神秘の血統だ。

「魔力に長けた一族、原種に近い個体ほど、特異な身体的特徴が出る。体の一部が異常に発達していたり、猫眼^{ネコメ}だったり、獣毛が生えてたり、半陰半陽だったりな。ほかにも色素や血液型が特殊だったり、独自の遺伝病を抱えていたりする。これは普通の変異^{フツソク}なんかとは違う、遺伝的に定着した形質だ」

「だが、アカバネの一族にはそうした変性がない……」

雷真^{ライマコ}は見たところ、どこにでもいる東洋人の少年だ。ロキやフレイのように、ひと目で〈魔力持ち〉とわかる見た目ではない。

クルーエルは皮肉っぽく笑って、うなずいた。

「あいつの筋力、五感、抵抗力に回復力——生命力は、いずれも人間としてトップレベルだ。健康優良児どころの騒ぎじゃないぜ。その安定度をたまちながら、魔力親和性が飛び抜けている……ってことは、だ」

「意図的にバランスを崩してやれば、もっと魔力を高めてやれる？」

「そう、改造の余地がたんまりあるってことだな。まあ、最高の素材だろうぜ。禁忌人形^{カシコイナガタ}の材料としても——神性機巧^{カミセイキコウ}の素材としても」

黒ぶちの眼鏡^{めがね}越しに、刺すような視線がキンバリーを射貫^{いぬ}く。

この男がそんな目をするのは、ずいぶん久しぶりのように思えた。

「そろそろ教えちゃくれないか、教授。おまえさんの背後には何がいる？」

「詮索はやめておけ。損な話だ」

「ときにおまえさん、魔術師協会の番犬なんだってな？」

去ろうとしていた足が止まる。

「……誰の流言だね？」

「あれだけ派手に動いてりゃ、誰でも耳に入るさ」

キンバリーの背後関係は、既に学院長周辺には筒抜けだ。だが、教授でも何でもない、雇われ医師の耳に入るようなことではない。

雷真やシャル、ロキが漏らすとも思えない。

では、独自のルートで探ったのか。やはり、この男は油断ならない。

「公言しない方が身のためだぞ。早死にしたくないなら——」

「何をやってんだ、おまえは——」

脅しの途中で怒鳴られて、キンバリーは鼻白んだ。

クルーエルは椅子を蹴倒し、ぶつかるとような勢いで顔を寄せてきた。

「あんなに魔術を怖れ、憎み、呪っていたのに——それが十五年経ってみりゃ、どうして学院の教授で、協会の戦士なんざやってんだ——」

「そういう君だって、今では学院のお抱え医師だ」

「俺は元の自分に立ち返っただけだ。やるべきことを思い出した。おまえさんはその道だ。逆方向へ全力疾走しやがって」

「……君と口論しても時間の無駄だ。レポートは確かに受け取った」

今度こそ立ち去ろうと、背を向ける。

その途端、いきなり背後から抱きすくめられた。

あまりに意外な行動だったので、キンバリーは驚き、されるがままになった。

「もうやめろ、エイミー。神性機巧マシンドロイドなんざくだらねえ」

「――」

「協会を抜けろ。そして、自分の幸せをつかめ」

「……私の幸せとは何だね？」

唇が不器用に動き、耳の後ろに吐息がかかる。

それを何度か繰り返して、クルーエルはようやく言った。

「俺の稼ぎなんざ正直タカが知れてるが、学院に雇われてるあいだは安泰だ。おまえさんが協会から持ってきた金もある。当たり前前の暮らしなら――」

ざくつ、と肉が裂ける音がして、クルーエルの右手から鮮血があふれた。

「痛っ!? 何コレ!? こいつマジで切りやがった!?」

右手を押さえ、のたうち回るクルーエル。

キンバリーの手にはダガーが握られていた。ダガーを振って血を払い、汚物を見るような目でクルーエルを見下ろす。

「五針くらいで済むのは僥倖（ようしやう）だぞ。先ほどまで少女にいたずらしていた手だと思うとな、汚らわしくて殺意がわいた」

「だからって切るか!? どつくどく出血してるじゃねーかー どうすんだこれ!？」

「医者なら自分で縫合したまえ」

「右手を切られて縫えるかー 助手も学生も出払ってんだぞー」

「知らん。パーシヴァル教授にでも頼め」

医務室を出て、叩たたきつけるようにドアを閉める。

「……十五年遅いんだよ、遅漏野郎」

いつになく口汚く罵ののしると、キンバリーは乱暴な足取りで医務室を離れた。

4

「そんな格好で何をやってんだ、おまえ……!」

雷真（かみし）は鼻血をこらえ、シャルの体を指差した。

シャルはシートの上に座って、不思議そうにこちらを見ていた。

「バカ帝国のバカ皇帝なの？ 日光浴に決まってるじゃない」

「いや、そりやわかるけどよ……」

「この国の夏は本気で短いのよ。ナメてたらひどい目を見るわよ。長い冬に備えて、貴方^{あなた}も日光くらい浴びておきなさい」

シャルは水着だった。好きな色なのか、いつもの帽子と同じ、マゼンダ寄りのブルー。うっすら浮いた肋骨^{うろこ}、締まったウエスト、丸みを帯びた下腹部がなまめかしい。

胸囲こそ神に見放されているが、その下はまさに芸術的だった。

雷真の視線に気付き、シャルは急にもじもじした。

「な、何見てるのよ、変態」

「……西洋人ってすげえな。そんな格好でよく往来をうろつけるよな」

「なっ——水着のどこがおかしいのよ——」

「裸と同じだろ、そんな薄布」

「違うわよ——それに、貴方には言われたくないわ。日本はハダカの文化だって聞いたわよ。海では平気で全裸になるし、みんなでお風呂^{ふろ}に入るんでしょ？」

「そりや、銭湯や温泉も普通にあるけどよ……」

こんがらがってきた。雷真はぐしゃぐしゃと髪をかき、思考を放棄した。

「水もないところで半裸になる方がおかしいだろ！」

「人前で全裸になる方がおかしいわー」

むむっ、とにらみ合う。不毛な文化摩擦だった。

「ともかく、その、あんまり見せるな！」

「あら……なあに？　いろいろ言ってるけど、要は照れちゃってるわけ？」

ふふん、と笑って、シャルはするりと立ち上がった。

モデルのような斜めのポーズを決め、わざわざ全身を見せつける。

もともとシャルは肩で風を切って歩くようなタイプだ。立ち居ふるまいが堂々としてい
る。その堂々とした立ち姿を水着でやられると……。

思わず目をそらす霞真。シャルはその前に回り込み、小悪魔っぽく言った。

「あきれた無礼者ね。人と話すときは目を見なさいよね」

「ぐ……」

「あら？　目を見ることもできないの？　日本の男はヘタレなの？」

「ぐぐ……っ」

「やだ、背中に虫が這^はってるような気がするわ。ちょっと見てくれない？」

「おまえ、面白がってるだろ！」

シャルはますます調子に乗って、くるっと回って背中を見せた。

水着のシワが寄ったりして、極めて屈情的な臀部。あわてて視線を上にもたらすと、その動きを察したかのように、シャルはするすると髪を持ち上げ、背中を露出した。

背中から腰にかけてのS字曲線は、ため息が出るほど美しかった。

髪はさらに持ち上げられ、ついに首筋があらわになる。うなじに反応してしまうあたり、雷真も日本人だ。カッと頭に血がのほり、あわや出血——というところで。

「……何をしてるんですか、二人とも」

不意に第三者の声が聞こえて、シャルも雷真も飛び上がった。

二人の背後に悪鬼羅刹——もとい、夜々が立っていた。

「いい度胸ですねシャルロットさん。そんな貧相な胸で雷真を誘惑するなんて」

「なっ……度胸なんていらないわよっ」

シャルは猛然と怒り出した。……ちよつと涙目になっていた。

「大体、他人のことを言えた義理？ 貴女だって似たようなものじゃないー」

「夜々は大和撫子だからいいんです」

「いやおまえは痴女だからな？ 大和撫子は清楚なものだからな？」

「ひ……ひどいです雷真ー」

「そうよー 女の子に向かって言うことじゃないわー」

「何でおまえまで怒るの!?」

「もうこうなったら、夜々も脱ぎます！」

「またかー やめろー」

「そうよ、無駄よー」

「む、無駄……!?」

シャルは勝ち誇ったように胸をそらし、自信たっぷりに言った。

「考えてもみなさいよ。いっつも脱いでる貴女には反応しないのに、こいつったら今の私の肌にメロメロなのよ」

「違うー」

「つまり刺激よ。見慣れると飽きるのよ、きつと」

「そ、そんな……そん・な！」

夜々はふらふらとさまよい、立ち木に頭をぶつけ、ずるずるとへたり込んだ。幹にひたいをおしつけたまま、ふふ……、と暗い笑い声を漏らす。

嫌な予感しかない。後ずさる雷真の前で、夜々はゆっくり振り向いた。

「簡単なことです……だったら、もっと強烈な刺激を与えます……っ」

「やめろーっ」

日光浴中の学生たちが騒ぎに気付き、巻き添えを恐れて逃げ出した。シグムントも迷惑そうに、しつぽで顔を隠す。

夜々が雷真の首に飛びつき、肩車だか何だかわからない体勢にもつていこうとしたとき、すとなつ、と誰かが雷真の前に着地した。

「……何て言うか、相変わらずだね」

「小紫」

雷真は夜々を振り払い、小紫に駆け寄った。

「おまえ、どこ行ってたんだ？　いろりが探してたぞ」

「いろり姉さまは、心配しすぎなの」

ちろ、と舌を出す。その表情はさみしげで、元氣印の小紫には似合わない。

「あのね、雷真はこれから、私と旅行に行くの」

「氣晴らしに付き合え——って感じじゃないな。命令か」

「そうよ、坊や」

通りの向こうから、別の誰かの声がした。

風に乗って、ほのかにクチナシの香りが漂ってくる。からん、からん、と下駄の音が響

き、霧の中から現れるように、ひとりの美女が姿を見せた。

日本が誇る稀代の名工（花柳齋）硝子。

暑さがこたえているらしく、若干だれた空気をまとっている。

夜々があわてて着物を直し、シャルも長袖したように背筋を伸ばした。

「精が出るわね、坊や。この暑いのに、昼日中から女遊び？」

「そんなことはしていない！」

「無粋な子。朴念仁は女に酷よ。そちらのお嬢さんは、ずいぶん熱心だったのに」

一部始終を見られていた！

雷真の顔から火が出る。それはシャルも同じだった。シャルは可哀相なくらい赤面して、シャツの上で小さくなった。無意識に胸を隠す姿がいじらしい。

「そ、それより任務の話だ。旅行って、どういうことだ？」

「ここは暑いわ。ゆっくり話せるところに行きましょう」

一方的にそう言って、硝子はもう歩き出していた。

「こんなときに、いろりは何を道草食ってるのかしら……」

珍しく、愚痴っぽく言う。いろりの魔術が炎でも雷でもなく氷なのは、硝子の夏嫌いが原因かも知れない。そう考えると、雷真は少し可笑しくなった。

背後で、シャルと夜々が思いつきりふくれたことには、気付かなかった。

5

「坊やが行くのはシェフィールド近郊の田舎町、期間は一か月よ」

ひと気の少ない中央講堂に、硝子の声が響く。

講堂には雷真と硝子、夜々、小紫の四人しかいない。講堂は石造りで、窓がなく、地下室のような作りだ。だだっ広い空間にこの人数だと、かなり涼しい。

「シェフィールドって、どこだ？ 英吉利国内か？」

「マンチエスターのさらに向こう、東へ半日つてところね。目的の町はその手前。任務には小紫をつけるわ。夜々はお留守番」

花がしおれるように、夜々は見える間に落ち込んだ。雷真は気の毒に思いながら、

「で、俺はそこで何をすればいい？」

「とある人物の内偵よ。標的は――」

硝子は煙管に火をつけ、一服した。

ゆっくりと紫煙をくゆらせ、意味深な問を取る。小紫は既に承知しているのか、反応がない。だが、雷真と夜々は張り詰めて続きを待った。

硝子は煙管の灰を落とし、眼帯のレンズ越しに雷真を見た。

「（迷宮の）魔王、グリゼルダ・ウエストン」

かくん、とあごが落ちる。

呆けてしまった一瞬後、しびれるくらいの緊張が襲ってきた。

キンバリーや学院長でさえ、魔王ではない。

だが、魔王ワイルスマンは実在する。四年前にも一人、この学院から輩出されている。

存命しているのは二十人に満たないだろう。そのうちの一人を調査する……？」

「……魔王ワイルスマンが相手じゃ、十中八九、死ぬぞ？」

魔王ワイルスマンの実力はマグナスに匹敵するはずだ。いや、何年も前に魔王ワイルスマンになったのなら、さらに力をつけているだろう。スパイ活動がバレたら、殺されてもおかしくない。

「内偵の方法は聞かない。せいぜい死なないようになさい」

「俺オレはやれと言われりややるだけだ。……が、さすがに漠然としすぎてる。俺は何を探ればいいんだ？ 軍はそいつの研究を狙ねらっているのか？」

「彼女は何も研究してはいないわ。地代収入で生計を立てているそうよ」

「地代……って地主か？ 魔王ワイルスマンともなりや、引く手あまただろ」

「ウェストン家は中世以来の軍人家系。英國軍はかなり強硬に迫ったようだけど、本人は軍隊務めを頑なに拒否している」

「……何も研究してないってのは？」

「言葉通りの意味よ。論文を出すでもなく、所領に引きこもってるの」

「田舎で隠遁いんとうかよ。魔王ワイルスマンにもなって、それは何か、もったいねーな」

同時代で「もっとも優れた才能」と認められた存在、それが魔王ワイルスマンだ。その才能を伸ばし、魔術界を発展させるために、魔術師協会は魔王ワイルスマンに「探究の自由」を

与えている。通常は（禁忌）とされる研究分野にも、魔王^{ワイルドマン}ならば制限なく踏み込むことができるのだ。それが軍務にも就かず、何の研究もしていないのでは、夜会で破れた連中はもちろん、英国政府も収まらないだろう。

「彼女の身边にキナクさい動きがある。よからぬ連中がうろついているのよ」

「よからぬ連中？」

「詳しいことは教えない。そしてそれが、坊やの身を護^{まも}ることになる」

いよいよキナクさい。雷真^{らいしん}は閉口した。下手^{へた}をすれば自分の目的——復讐^{たぐしやう}を果たすこともできないまま、この英国で大死にだ。

「そんなに構えないで。坊やは一か月、ウェストンの周りをウロチヨロしていればいいわ。そして、できれば氣に入られなさい。それが帝国の利益にもなる」

「……って言われてもな」

「得意でしょう？ 女をたぶらかすのは」

「そんな技は持ち合わせてない」

夜々^{やや}の眼^めからハイライトが消える。雷真は震え上がった。

「とにかくわかった！—— すぐに出発する！」

何をすればいいのか全然わからないが、こういう命令は慣れっこだ。雷真を動かすことで、誰か^{だれか}が利益を得るのだろう。硝子^{しょうし}の言葉にはいつも裏を感じるが、その裏が理解でき

るのは、いつも「事が終わる」直前だった。

雷真（かみまこと）の返事に満足したのか、硝子（しょうこ）はうなずき、袖（そで）から巻物を取り出した。

「小紫の（仕様書）よ。わかっているとは思うけど――」

「失くすくらいなら燃やせてんだろ。わかっている、夜々（やや）のときと一緒だ」

「ならいいわ。寮に戻って、旅の支度をなさい」

「硝子さんは？」

「いろりを拾って、涼むとしましょう」

ふう、とだるそうにため息をつく。東京の夏に比べれば、はるかに過ごしやすいのだが、硝子は本当に夏が苦手らしい。

「じゃあ、まずは荷造りだな。手伝ってくれ、夜々、小紫」

「はい……」「うん」

どこか元氣のない姉妹を連れて、雷真は講堂を後にした。

ほんの小一時間で、出発の準備を整える。

持っていくのは着替えが数着。いつも持ち歩いているナイフや照明、爆薬などの小道具、簡単な糧食を入れても、トランクひとつで間に合った。

すぐに学院のゲートへ向かい、夜々の見送りを受ける。

要塞（ようさい）のそれを思わせる門の上で、警備員たちの目が光っている。小紫は雷真の私物では

ないが、夜々は「相棒」としてきっちり登録されている。夜々が一步でも門から出れば、破壊される決まりだ。

だが、夜々は警備の視線などおかまいなしで、雷真だけを見つめていた。

「行くんですね、雷真。修行の途中なのに……」

「おまえ、全然やらせてくれなかったじゃねーか」

「だから心配なんです。夜々の見ていないところで、雷真が無茶をしたら……」

ぐすつ、と涙ぐむ。それから、たまらなくなったように顔を覆った。

「それに、一か月も離れ離れなんて……」

しくしくと泣く。暴走しがちで手に負えない夜々だが、雷真になついているのは本当だ。

昔飼っていた犬を思い出し、雷真は切ない気持ちになった。

夜々の頭に手を乗せ、精一杯、優しくささやきかける。

「そんなに泣くな。一か月なんてすぐだよ」

「一か月も夜々がいなくて、夜のお世話は誰がするんですか……？」

「おまえにもしてもらったことはないからな!?」

「それに、危険です……相手が魔王ワイルドキングだなんて……」

「大丈夫だ。小紫も一緒だ」

となり目をする。視線を向けられ、小紫はあわてて微笑んだ。

「心配しないで、夜々姉さま。私、雷真もじしよといっぱい修行してくるから！ 雷真を立派な男にしてくるからね♡」

びしっ、と夜々の表情が砕け散った。

「やっぱりだめですー 一か月も小紫こむらさきと一緒にだなんてー」

「姉さまだって二年前、雷真と修行したじゃない。軍の施設で三か月もさー」

「ま、ますますダメですー」

「ますますって何だ夜々!? 何もなかっただろ!?」

「考え直してください雷真……一か月もあれば子どもが産めます……」

「ねずみの繁殖かー」

「うっ、うっ……。もういいです……夜々は聞き分けが いい子なので……」

「嘘うそつくな」

「くれぐれも気をつけてください……世界が減ばないように……」

「減ばすなよ!?」

などと言い合っているところに、横から冷ややかな声が飛んできた。

「まったく、札幌知らずにもほどがあるわ。このシャルロット・ブリューにひと言の挨拶あいさつもなく、旅行に行こうだなんて」

くさくさした調子で、木陰からシャルが現れる。

先ほどの水着の上に、白いパーカーを羽織っている。フードのところには、シグムントがすっぽりと収まっていた。

「何だ、シャル。見送りにきてくれたのか？」

「なっ……心底おめでたい男ねー 何で私がそんなこと——」

「シャルは三十分も前から、ここに張り込んでいたのだ」

「ただ黙りなさいシグムントー お昼のチキンをくず肉にするわよー」

シグムントがフードに引つ込む。どうやら、苦笑しているようだ。

「ふん……どうせまた危ないことをするんでしょう？ 貴方あなたのバカ面も見納めになるかも

知れないものね」

シャルは腕組みをして憎まれ口を叩いた。バカにしたような口ぶりだが、細い眉まゆが不安げにゆがめられている。彼女なりに心配しているらしい。

「……私があげた防衛印ディフェンシブ・シール、ちゃんと持った？」

わかりやすいくらいわかりやすく、雷真はぎくつとした。

「……どうしたの？ まさか、失くしたんじゃないでしょうね？」

思いつきり、失くしていた。と言うか、壊した。

聞いたところでは、(紅翼陣)を失敗したとき、砕け散ったらしいのだが……。

答えないのを肯定と受け取って、シャルは傷ついたような顔をした。

「何よそれ……信じられない！ 変態！ 無礼者！」

ばちーん、と小気味のいい音を立てて、雷真の頬が鳴る。

シャルは金髪をなびかせ、サンダルをばたばた言わせて、走り去った。

反射的に迫いかけようとして——やめる。

夜々がおずおずと、遠慮がちにつぶやいた。

「いいんですか雷真。シャルロットさんを追いかけて」

「ああ。戻ってから、話すよ」

それは、必ず戻ってくるという宣言だ。

「……わかりました。道中、お氣をつけてー」

「おまえもな。行くぞ、小紫」

「うん！」

雷真は夜々と別れ、〈ゲート〉をくぐって市街に出た。

徒歩で駅へと向かう。百メートルほど進んでから振り返くと、夜々はまだ〈ゲート〉の向こうに突っ立って、じっとこちらを見つめていた。

（必ず戻ってこないとな。シャルだけじゃなくて、夜々のためにも）

気合が入る。雷真は制服の腕をまくって、決意も新たに歩き出した。

その行く手には、最強の魔術師と、得体の知れない任務が待っている。

鉄道に揺られて、半日。

出発を急いだ甲斐^{かい}あつて、日没前に目的の街に到着した。

太陽はもう山の稜線^{りやうせん}にかかっている。日本なら日が落ちている時間だ。

ホームに降り立った雷真は、体をほぐしながら市街地に目をやった。駅前の通りは石畳で舗装され、三階建てのゴシック建築が並んでいる。機巧都市のような都会ではないが、思っていたほど田舎でもない。

「さて、今夜の寝床を探すか。……どうした、小紫？ 疲れたか？」

「——そんなことないよ。汽車、楽しかったよ！」

明らかに強がっている。そんな姿は、どこか妹に似ていた。

雷真はくしゃくしゃっと小紫の頭を撫で回した。

「ちよ……やーだ、雷真！」

屈託なく笑って、雷真の手から逃れる小紫。雷真は少しほっとして、トランクを抱え、駅舎を出た。駅前にはホテルや銀行、商店が立ち並んでいる。雷真は目についたホテルに近付き、ガラス越しに中の様子をうかがった。

内装は古いが、清潔だ。ガラスもよく磨かれている。

快適そうだと判断して、観音開きの戸を開け、フロントに向かう。

「いらつしやい、学生さん。今夜の宿をお探しかしら？」

フロントの女性が気さくな調子で言つた。宿の女主人らしい。

東洋人を怪しむどころか、友好的な笑顔で迎えてくれる。王立機巧学院の制服は絶大な効果を發揮した。学院の權威を借りる作戦は、どうやら正解だったようだ。

「学生さん、中国から？」

「似たようなもんだ」

「お連れのお嬢さんは人並み外れて綺麗だけど、まさか自動人形——なんてね？」

「そうだ」

「え、本当？」

女主人は驚き、小紫を凝視した。少しばかり不慣れた視線だが、小紫は慣れっこなのか、にこにこ笑つて愛想を振りまく。

「こんなに立派な自動人形、近頃は全然見かけないわね。せいぜい、ミス・ウェストンのところのイブシロンくらいかしら」

「ミス・ウェストン——《迷宮》の魔王さまか？」

「さすが、アカデミーの学生さんはご存知ね。あ、ひょっとして……」

「ああ。偉大な先輩に教えを請いにきたんだ」

「あらあらまあまあ。そういうことなら、一番いい部屋を用意しなくちゃねー」

「やっぱ、魔王^{ワイルドマン}さまは有名人なんだな」

「よくしてくれるからね」

宿帳に記録を続けながら、女主人は誇らしげに語った。

「ミス・ウェストンの土地は西の丘陵一帯なんだけど、ときどき町の方にも出ていらして。だらしないう警察に代わって、無法者や家畜泥棒を退治してくださるの」

「へえ……」

「この町で盗みや殺しを働いて、逃げ延びた奴はいないわよ。おかげで、警官はますますだらしなくなるって寸法——ほい、部屋の鍵——」

鍵を受け取りながら、雷真^{ライジン}は意外の念に打たれていた。ポランティアで悪党退治とは。魔王^{ワイルドマン}というのは、もっと利己的な存在だと思っていたのだが。

ふと、小紫が雷真の袖^{そで}を引っ張った。

「雷真……後ろ」

声に緊張感がある。そつと振り向くと、窓ガラスの向こうに黒い影が見えた。

男が二人、何かを——誰か^{だれ}かを——探すように歩いている。

真夏だというのに、かっちりとしたダークスーツ。彼らの後ろには、無数のシリンドー

に装甲板をかぶせたような、無骨な自動人形オートマトンが二体。

男たちがこちらに顔を向ける。その表情に殺氣を読み取り、雷真かみまことは叫んだ。

「伏せろー」

「えっ？」

カウンターを乗り越え、女主人を床に押し倒す。と同時に、ガラスが弾け飛び、何かが頭上を吹き抜けた。

赤熱した鉄棒が壁に刺さる。鉄棒はどろりと溶けて、石壁に穴をうがつた。

あぶつた鉄棒——簡素な（熱）の魔術と発射装置を組み合わせた魔術兵器だ。弾数に制限がある半面、少ない魔力でファイアボールなみの殺傷力を発揮できる。

状況を理解する前に、雷真はもう動いていた。カウンターから転がり出て、魔力を練る——が、残念ながら、ここには相棒の夜々よよがいない！

「雷真——」

小案こあんの警告よりコンマ数秒早く、敵の人形使いがロビーに飛び込んできた。

自動人形オートマトンが左右に跳んで、雷真を包囲する。手首の付け根から鉄棒が飛び出し、雷真に素早く狙いをつけた。

（こいつら……できる！）

日常的に魔術を使い慣れている様子だ。おまけに落ち着いている。

女主人の悲鳴を背後に聞きながら、雷真は腦みそをフル回転させた。

戦うしかない。だが、小紫でどう戦えばいい？

小紫で格闘をしかけるか。だが、小紫には夜々のような防衛力がない。あの鉄棒を食らえば無事ではすまないだろう。魔術を使おうにも、（八重^{やぶ}重^{じゆう}置^ち）は発動までに時間がかかるし、この狭い空間では位置を容易に特定される。

悩んでいるうちに、敵の攻撃準備が整った。

焼けた鉄棒が雷真の顔面めがけて撃ち出される——寸前。

からん、と場違いなくらい軽やかな音がして、観音開きのドアが開いた。

雷真も、小紫も、敵の人形使いも、思わずそちらに目を向けた。

最初に目についたのは、人形のように整った、無表情の顔だった。

一九世紀に流行ったようなベストを着て、シャツの襟を立てている。ダンディズムがもてはやされた時代の、成年男性の服装だった。

服装から男かと思ったが——違う。

胸元はわずかに膨らみ、くびれたウエストが女を主張している。後頭部で無造作に結んだ黒髪が、バビヨン犬のしっぽみたいで愛らしい。

長い前髪が顔の左半分を隠している。まるで化粧っ気がない……が、肌のキメは細かく、若々しい。年齢は二十かそこらだ。

彼女の腰には長剣が吊るされていた。かなり大ぶりの剣で、幅が広く、柄が長い。

女性はドアを両手で押し開け、すたすたとロビーに入ってきた。

どう見ても人形使いが戦闘中なのに、足取りに躊躇はない。まるで無警戒だ。

はっと我に返り、雷真は怒鳴った。

「危ねえー 逃げ——」

言い終わる前に、敵が反応した。

自動人形の片方が、素早く向きを変え、女性に狙いを変更する。ただし鉄棒は発射せず、

こぶしで女性に殴りかかった。

女性はかわそうともしなかった。

だが、当たらない。鉄拳は女性の真横をすり抜けた。女性に触れられてもいないのに、

自動人形がひとりでに転倒する。

（狙いを外したー あんな至近距離で？）

その理由はすぐにわかった。

（何だ、あれは……!?）

女性の人差し指から青白い魔力の糸が伸びていた。肉眼で見えるくらい、はつきりと。

ピアノ線のように細いそれは、並みの人形使いが放出するものよりはるかに出力が大きく、

その上、数千倍に濃縮されている。

その（糸）を当てられて、自動人形の支配権が揺らいだのだ。

一か月前に機巧都市を襲った、あの事件を思い出す。

他人の自動人形を支配するイオネラの機巧——それは規格外の増幅装置と、高度なプログラムがなせる業だった。

だが、この女性は自動人形を連れていない。自分の魔力だけで、イオネラの機巧と似たようなことをやっている！

そんなことが人間に可能なのか？ 驚愕する雷真の前で、もう一体の自動人形が女性に

突進した——否、突進しようとした。

女性は自ら、稲妻のような速さで踏み込んだ。

いつの間にか剣を振りかぶっていて、左手を添えて、振り下ろす。

一撃で自動人形は吹き飛んだ。本当に、「吹き飛んだ」。

切り飛ばされた上半身が、壁に激突してバラバラになる。

人形使いが最初の自動人形を立ち直らせる。女性の背中に鉄棒を叩き込もうと、狙いをつけたとき、女性の右眼が紅い光を放った。

（あの眼——赤羽の——）

子どもの頃、何度も見た。つい最近も、マグナスの仮面の下に……。

女性が左の人差し指を自動人形に突きつける。その先端から魔力の（糸）が伸び、背中

から反動のように赤い煙が飛んだ。

再び自動人形が動きを止める。木偶と化した人形に、女性は容赦なく斬りつけた。ばこんつ、と爆発音がして、自動人形が吹っ飛んでいく。

自動人形を始末すると、女性は無表情のまま、人形使い二人を一瞥した。苦しきまじれか、人形使いは二人そろって銃を抜いた。

だが、引き金を引く間もない。女性が指を突きつけると、二人は銃を取り落とし、首を押さえて悶え始めた。そのまま口から泡を噴き、自目を向いて、昏倒する。

女性は剣を鞘に収め、淡々とした声で言った。

「怪我はないか、ミセス・ロビンソン。そして、旅の学生よ」

雷真はもう確信していた。

この女性の戦闘能力は騎兵一個中隊に匹敵する。自動人形を使わない、魔術師としては丸裸も同然の状態で。こんな魔術師が実在するならば――

「グリゼルダ・ウェストン……」

確かに、魔王と呼ぶに相応しい。





Chapter 2 愚か者が魔王に挑む

1

夕刻、ロキはケルビムを従え、キンバリーの研究室を訪れた。

西向きの窓から夕陽が差し込み、濃い陰影ができている。ソファの上には何かの書類が放り出され、読みかけの本が何冊も積み上げてあった。

そして、床に並べられた、金属製のブーツ群。

金色に輝くプレートや、漆黒の骨組み、割れた歯車に折れたシリンダー。中身がぎっしり詰まった箱型装置に、特徴的なブレード。キンバリーの専門は機巧物理学——魔術回路ならまだしも、ブーツや装甲材が転がっているのは不自然だ。

部屋の主は窓枠にもたれ、カップの紅茶を飲んでいた。

「よくきたな、〈剣帝〉。足はもういいのかね？」

「……約束の物を持ってきた」

ロキは抱えていたトランクを置き、フタを開けた。



さすがのキンバリーも驚いた様子で、カップを置いて近付いてきた。

「デ・オルガナムの複写——いくら何でも早すぎる——」

粗を探るように、大量の紙をめくる。だが、整然と並んだ文字は美しい。かすれや汚れもない。ロキの性格を反映した、活字のように美しい仕上がりのだった。

「見事なものだ。だが、ミスが見つければ、ページごとやり直しだぞ？」

「オレがそんなミスをするか。誤字も脱字も存在しない」

「ないと思っても出てくるのが、本ってやつの不気味なところさ」

そつと箱にフタをして、キンバリーは満足げにうなずいた。

「ご苦労だったな。報酬は後日、君の口座に振り込んでおく。もう戻っていいぞ」

にやつと笑う。実に白々しい。ロキは屈辱に震えながら、うめくように言った。

「……その、それを、もらい受けない」

床の上、パーツの山を示す。

「そのガラクタをご所望かね？ 工学検証の大事な試料なんだが」

「とつくに解析は済んでるはずだ。そんなジャンクに、もう用はないだろう」

「材質に価値があるんだよ。銀やアルミを含有する、貴重な魔術合金だ」

「それがあんたに必要なのか!?」

「いいや。だからこうして、取り引きの材料になるわけさ」

取り引き。最初からそのつもりだったのだ。ロキは憎々しげに舌打ちした。

キンバリーはケルビムに目をやり、研究者らしい目つきで観察した。

夜会の初日に比べると、ずいぶんみすばらしい姿だ。首のフレームがゆがんでいるし、あちこちエッジが欠け、無理やり溶接した痕跡もある。ボディは魔術回路（熱風操作）の熱に負け、オレンジ色に焼けていた。

「ふむ、どのみちオーバーホールは必要だな。Dワークスの支援がなくなった上、酷使が続いて傷んできている」

「あの疫病神バカに関わると、ロクなことがない」

吐き捨てるように言う。キンバリーはぶつと噴き出した。ロキはむつとして、

「何がおかしい！」

「いやいや。それで、（剣）の修繕はどうする？　もう君の手には余るだろう？」

「信頼できる人形師が出向いてくれる。設備は不十分だが、ひと月もあれば……」

「なら好きにするがいい。ただし、見届け人をつけさせてもらうぞ」

見届け人。聞きなれない単語に、ロキは眉をひそめた。

「そんな願をするな。押収した証拠品を流出させる以上、管理を徹底しなければならない。表向きの理由は、夜会の規約に違反しないよう監視するためさ」

「裏の理由は？」

「Dワークスの創意工夫を、そっくりいただこうと思ってね」

ルシファアは夜々の攻撃で中樞を碎かれ、重要な部分を失っていた。だが、設計理念はケルビムと共通——両者を見比べれば、Dワークスの技術を復元できる。

研究成果を横取りしようというわけか。汚い話だ。だが、それくらいのメリットがなければ、ルシファアのパーツを流してくれるはずもない。

「……工房の秘密を守ってやる義理はない。勝手につけてくれ」

「交渉成立だな。ああ、設備のことなら心配するな。学院の工房も夏休みで空きがある。貸してもらえよう、技術科に話をつけておく」

「——それは、その、すまない」

先ほどとは別の意味で、ちよつと驚く。

こんなふうには、キンバリーはときどき面倒見がいい。正直、気味が悪い。

「おや？ 美人で優しい先生に向かって、何か失礼なことを考えたな？」

「……言いがかりだ。で、これはもう運び出しているのか？」

「いや、先に渡すと面倒なことになる。技術科まではこちらで運ぼう」

「あんたが運んでくれるのか？」

「見届け人にやらせるさ」

ああ、それでこそキンバリーだ。人使いが荒い。

ロキは見届け人とやらに同情しつつ、きびすを返した。

「大好きなお姉ちゃんを探しに行くのかね？」

「ふざけるな！」

「むきになるな、冗談だ。ちなみにフレイは毎日、そこで鍛錬しているぞ」

窓の外を示す。理学部校舎の裏手は——確か、ほぼ手つかずの原生林だ。

「私のメイドがかかりきりでね。おかげで研究室が片付かない」

あんたがだらしなだけだろう、と思ったが、もちろん口には出さない。

「なかなか面白い試みだと思うがね。見て行つてはどうだ？」

「……オレにはオレの訓練がある」

「ほう？ マグナスの対抗馬とまで言われ、あのグレンダン中将を倒した君が、まだ強くなりたいたいと？」

「オレは強くない」

言い捨てて、部屋を出る。蘭車ランクルマを軋こませながら、ケルビムも主あそびの後に続いた。

2

気絶した人形使い二人を、駆けつけた警官たちが拘束した。

魔封じの手錠をかけ、魔力を減衰させる破魔縄で縛る。

沈んだ様子の小紫と並んで、雷真は警官たちの仕事ぶりを見守った。

敵は一体、何者だったのか。訓練された戦いぶりから言って、兵隊崩れか何かだと思いが……このホテルを襲った理由がわからない。

（ま、それは警察の仕事か）

推理をあきらめ、割れたガラスから外を見る。悪漢どもを一人で退治した英雄は、表のストリートで市民たちの喝采を浴びていた。

「ミス・ウェストン万歳ー」「私たちの領主さまー」「魔王さまー」

この町全体がウェストンの土地というわけではない。それなのに、彼らはしきりに「私たちの」というフレーズを使う。それだけ慕われているということか。いや、そんなことはどうでもいい。雷真が気になっているのは……。

（あれを使える奴が、地球の反対側にもいたとはな）

グリゼルダの（糸）は、厳密に言えば、（紅翼陣）とは微妙に違った。

彼女の場合、魔力の（糸）は一本だった。それに、持続時間が短い。せいぜい数秒間の発現に留まる。（紅翼陣）のように垂れ流しではない。

だが、原理は似ている。そっくりと言っている。

任務で指定された調査対象が、今まさに雷真が求めるものを持っている。

できすぎた符合。これは果たして偶然だろうか？

いや、硝子しょうこに限って偶然ということは無いだろう。だとすると……。

「ごめんね、雷真かみまこと」

小紫のか細い声で、雷真は我に返った。

「何で謝る？ おまえは何も悪くないだろ？」

「だって私が……私じゃなくて、姉さまだったら……」

かなりヘコんでいる。下手な慰めは逆効果だ。仕方なく、雷真は話をそらした。

「それより、あいつを見ろよ」

「……魔王マフィアマンさん？」

「俺おれはあいつの弟子になる」

「弟子でしっ？ 調査対象の？」

「内偵の方法は聞わない——硝子さんが言ってたろ？」

小紫は納得いかない様子で、首をひねった。

「でも、どうして急に弟子なんて——あつ、雷真は年上が好みだもんね——」

「おまえら姉妹はそればかりだな——」

べちっとデコピンをかます。小紫はひたいを押さえて、しばし悶もたえた。

「さっきの見たろ。あいつ、紅翼陣こうよくじんと同じことができるんだ」

「ほんとっ？ あれって、赤羽さんちの子じゃなくてもできるの？」

「まずは、そいつを確かめよう」

雷真はトランクを抱え上げ、あてがわれた部屋に向かった。

市民たちが解散するのを待って、雷真はホテルを出た。

帰宅する市民たちにまぎれて、グリゼルダの姿を探す。

……いた。百メートルほど先を、すたすたと自然体で歩いている。

距離を保ちつつ、尾行を開始。こちらは学院生と和装の少女——はっきり目立つ風体だが、相手の視界に入らなければならない。

グリゼルダは郵便局に用があつたらしい。ポストに手紙を投函すると、西の方角へ向きを変えた。西の丘陵が所有地らしいから、家に帰るのだろう。

思った通り、グリゼルダはまっすぐ町外れに向かった。簡素な木の門をくぐって、街道を歩き出す。舗装されているが、民家も見えない、寂しい道だ。

既に太陽は沈み、地平に残照が見えるだけだ。まばらな街灯がグリゼルダの姿を照らし、鞘の金具がキラキラと光った。

頃合いだ。雷真は足を速め、背後から声をかけた。

「待ってくれ、ミス・ウェストン！」

「——意外だな。てっきり、不意打ちでくるものと思ったが」

さすが、と言うべきか。尾行には気付いていたらしい。

グリゼルダはゆっくりと振り向いた。いつの間にか、剣の柄に手がかかっている。

「こんな野っ原で女を襲うなど、屋外マニアの変態だな」

「そっちの『襲う』かよー つか、その理屈なら町中で襲う方が変態だろー」

「む……上手いことを言うやつだ」

「全然上手くねえからな？ あんた本当に〈迷宮〉の魔王さまなんだろうな？」

「……うんざりする呼び名だ。気をつけろ、今度それを言ったら死ぬぞ？」

じろり、と雷真をにらむ。視線に殺気が宿っていた。

「で、私に何の用だ？」

「あんたを〈迷宮〉の魔王さまと見込んで頼みがっ！」

声が裏返る。とっさにしやがみ込む雷真の頭上を、凄まじい斬撃が吹き抜けた。衝撃で

小葉が尻もちをつき、「きゃっ」と可愛い悲鳴をあげた。

どっと冷や汗をかきながら、雷真は抗議した。

「いきなり何しやがるー」

「私の忠告を無視するからだ」

むすっ、として顔を背けるグリゼルダ。そんな仕草はちよっと可愛らしかったが、危険

人物であることに代わりはない。

しかし、危険人物であつても、腕は確かなのだ。雷真は強引に気を取り直し、「俺を弟子にしてくれ」

まっすぐ相手の目を見て、頼み込んだ。

グリゼルダは無表情のまま、ぼけーつと雷真を見つめた。

それから、はっとした様子で口を押さえた。

「そ、それはつまりアレか。と……遠まわしの求婚？」

「妙な自己完結をするな！ 言葉通りの意味だ！」

「よく見れば、その制服——王立機巧学院の学生だな」

やつと雷真の服装に目を留める。グリゼルダはちよつと横かしそうに、

「学院は今時分、夏休みだったか。……ん、待てよ？ 今年は魔蝕の年だな。ということ

は、もしや貴様……そのバカ面で〈手袋持ち〉なのか？」

「おかげさまでな。つか、バカ面は余計だ」

「順位は？」

「第百位だ」

バカにされるかと思つたが、グリゼルダはそこには無反応だった。

「なるほど……確かに私は四年前、夜会の頂点に立った。先達の指導を受けるといふのは、

実に魔術師らしい、合理的な考え方だ」

うんうんとうなずきながら、感心したように言う。

「ここ数年、さまざまな組織だの機関だの結社だのが、私を引き入れようとやってきた。私を利用したい連中は腐るほどいるんでね」

心底から、うんざりしたような口調。よほどうるさく迫られたらしい。

「だが、ストレートに弟子入りを願ひ出た者は、思えば貴様が初めてだ」

「……そうなのか？ 何つーか、それは意外だな」

「たとえ漁色の下心が丸出しだとしても、な」

「出してねえー つか、存在しねえー」

グリゼルダはあごに指を当てて、考え込むような素振りを見せた。

「……ふむ、そうだな。気まぐれもまた一興か」

「弟子にしてくれるのか？」

食いつく雷真。その眼前に、剣の切っ先が突きつけられた。

「雷真！ 気をつけてー」

小紫が警告を発する。言われるまでもなく、雷真も脅威を肌で感じていた。

剣を学んでいたから、わかる。グリゼルダから圧倒的な剣気が放たれている。

殺気は殺意の発露だが、剣気は「死の予感」のようなものだ。危険な猛獣と向き合った

ときに感じる、本能的な恐怖に近い。相手の技量が高いほど、それは強くなる。

やはり、相当な使い手だ。

グリゼルダは左手をポケットに差し入れ、懐中時計を取り出した。針を確認して、

「一分間、だ」

「……一分？」

「一分間、生き延びることができたら——考えてやろう」

言い終わると同時に、剣を振りかぶった。

3

きゆるきゆる、きいきい、ぎちぎち、とケルビムの部品が軋みをあげる。

ロキはため息をつきながら、林の中を歩いていた。

一直線に伸びた自分の影が、一か月前に見た夜々の〈技〉に重なる。

ダイダロスにとどめを刺した、閃光のような一撃。奇しくもそれは、ルシファーを破壊したのと同じ技だった。

あのとき、雷真はエヴァンジェリンの支配を打ち破り、魔術を使ったのだ。

「あの瞬間、あいつの力は、オレを凌駕していた……」

同じことができるかと言われれば、不可能だ。(絶対王権^{ヤマトコングョウケン})の効果範囲内では、ロキはケルビムを歩かせることすら難しかった。

単純に魔力の放出量だけなら、ロキの方がずいぶん上回っている。だが、雷真^{ライシン}はそれを六、七本の(糸^{イト})に収斂^{シュウケン}させていた。

経路を狭めたことで、圧力が途方もないレベルにまで高まった。一点に収束させた光が石や鉄をも融かすように、魔力も集中させれば大きな力を生む。雷真は魔具も機巧も用いずに、それをやつてのけたのだ。

これまでの、雷真との戦いを思い返す。最初はロキが雷真を圧倒し、二度目はフレイの暴走でうやむやになった。だが、あれを引き分けと考えるなら――

三度目には、こちらがやられるかもしれない。

はつきり、あせりを感じた。雷真は短期間で急速に力をつけた。いや、持っていた才能が開花しているのか。度重なる実戦が、彼をどんどん成長させている。

「……くそつたれ！」

自剃できず、立ち本を殴る。

このままで、いいはずがない。

ロキは顔を上げ、再び歩き出した。

少し行くと、林の中から、少女の声が聞こえてきた。

「二ー 十二ー 七ー」

少し弱々しい声。聞き覚えがある。確か、（トレンツクス）《暴竜》の妹だ。

思った通り、木々のあいだに、アンリのエプロンドレスが見えた。

そして、フレイの姿も。汗だくになって、必死に魔力を練っている。傍らには装甲つきの犬——ガルムたちがねそべり、退屈そうにあくびをしていた。

「十一ー」

アンリの言葉が飛んだ途端、フレイの前でテニスボールが跳ねた。

「五ー 二十ー 六ー 十八ー 三ー」

フレイの前には二十個ほどのボールが落ちている。アンリがコールするたび、フレイは指示に合わせて、ボールを次々と跳ねさせた。——《念動》の訓練か。

「八ー」

びよこん、と「九」が持ち上がった。惜しい。外れだ。

「十三ー」

直前の失敗で動揺したのだろう。「十三」だけでなく、周辺のボールが一斉に揺れた。そのぶん魔力が分散し、ボールを跳ねさせることができない。

（……キンバリーが言っていたのは、そういう意味か）

ロキは即座にフレイの意図を理解した。この訓練は、あのためだ。

「あ、ロキ……」

フレイがこちらに気付き、悪戯いたづらの現場を押さえられたような顔をした。

あごを伝った汗が、開いた胸元からきつそうな谷間に落ちる。ブラウスが肌に貼りついて、うっすら肌色に透けていた。

ロキは何となく目をそらし——アンリと目が合った。

びくつと頬を引きつらせるアンリ。ちよつと青ざめ、緊張している。

（こいつは男嫌いだつたな……）

挨拶か、ねぎらいか、姉につき合ってくれた札か。とにかく何か言うべきだと思ったが、考えているうちに面倒になって、ロキはアンリの前を素通りした。

「無茶をするな、バカ姉貴。心臓がざわめいている」

「でも……このままじゃ、だめだから」

それはロキも同じ意見だった。

ロキは念動でボールを浮かせ、空中で番号順に並び替えて、びたりと静止させた。

フレイも、アンリも、目をまん丸にして、ロキの曲芸に見入った。

重力と念動が完全に釣り合わなければ、ボールはふよふよと上下することになる。微動だにしないのは、ロキの精確なコントロールの表れだ。

「なかなか面白い訓練だが、今のあんたには荷が勝ちすぎるようだ。ほどほどにしなければ



ば、また暴走する危険がある」

しよぼん、とうなだれるフレイ。ロキは少しあわてて、

「いや、この訓練は続ける。基礎訓練は必ず力になる。だが、切り札を持つておくことも、決して悪いことじゃない」

「う……切り札？」

「オレたちの切り札と言えば、決まっている」

ロキは自分の胸を親指で示し、決意のこもった声で宣言した。

「この忌ま忌ましい心臓を、活用させてもらう」

「――」

フレイの顔色が変わった。事情を知っているのか、アンリも両手で口を覆った。

それこそ、危険な発想だった。

ひとたび暴走すれば、血液を無制限に魔力へと変換する、（ウツ）呪われた心臓。

「ロキ、だめ！」

「大丈夫だ。臓器について研究していて、面白いことがわかった」

キンバリーが見せてくれた禁書は、肝心の「臓器製造」とは違うところで、ロキに重大なヒントをくれたのだ。

「オレたちはそれぞれ、一度ずつ暴走を経験しているだろう？」

「う……うん」

「あのときオレたちを襲った現象——鍵はそこにある」

追い上げてくる雷真を突き放し、マダナスを超えるための、その鍵が。

4

最初の一撃をかわせたのは、ほとんど本能のなせる業だった。

グリゼルダの踏み込みは鋭く、剣の師匠——武芸者のそれに匹敵していた。

予備動作がほとんどなく、踏み出すタイミングも読めなかった。「跳べ！」という本能の叫びに従っていなければ、真つ二つにされていただろう。

空振りした一撃が石畳を砕く。

石の破片が水しぶきのように打ち上がり、二メートル超の亀裂が走った。

（人間の力じゃねえ！）

戦慄しながら、雷真と小紫はそろって飛び退き、グリゼルダから距離を取った。

グリゼルダはゆっくり剣を引き戻し、感心したように言った。

「思った通り、いい動きをする」

「……俺が普通の学院生で、いいとこのお坊ちゃまだったら、死んでたぞ？」

「安心しろ。どう取り繕っても、お坊ちゃまには見えん」

雷真の風采を馬鹿にしているのではない。雷真の筋肉のつき方、姿勢、身のこなしから、運動能力を測ったのだろう。優れた眼力だ。

「さあ、腕前のほどを見せてみる」

雷真は躊躇した。グリゼルダの言葉を信じるなら、時計の秒針が一周するまで逃げ回ればいい。もしくは、ひと当て、ふた当てして、お茶を濁せば――

いや、それは無理だ。グリゼルダには隙がまったく感じられない。次の瞬間に、雷真がどの方向に踏み出しても、グリゼルダは確実に反応するだろう。

逃げ回るなど不可能――たとえ十秒足らずでも。

まさか本当に殺されはしない……はずだ。先刻、グリゼルダは人形使いを殺さなかった。暴漢を殺さなかったのに、弟子入り志願者を殺すだろうか？

だが、理屈でそう考えてみても、背筋が凍るのを止められない。

「どうした、かかってこい。それとも、私から行くか？」

「……仕方ねえ。行くぞ、小紫――」

逃げて徹しては狩られるだけだ。攻撃して時間を稼ぐしかない。

雷真は魔力を練って、小紫に流し込んだ。小紫には夜々ほどの剛力はないが、人間よりは俊敏だ。雷真の魔力を受ければ、さらに大きな力が出せる。

そして、小紫には強力な武器もある。

グリゼルダが「ほう……」と感嘆の息を漏らした。

小紫と雷真の姿が、彼女の視界から消えたのだ。

雷真は石畳を蹴り、グリゼルダの側面に回り込んだ。派手に動いても、彼女は目で追わない。小紫の（八重霞）が効果を發揮して、こちらの気配を隠していた。

「知覚操作系か。これほどの精度、即効性、ステルス性能を持つものは初めてだ」
すぐに能力を見抜かれる。だが、魔術はまだ破られていない。

「ふむ……見えもせず、音も聞こえず、匂いもしない。逃げられてもわからない」
誰が逃げるか！

雷真は小紫に魔力を飛ばし、攻撃を指示した。

「やれ、小紫。体当たりでいい。肩からぶつかれ！」

「——わかった！」

受け取った魔力を筋力に変え、小紫が駆ける。さすがの瞬発力。衝撃は速度の二乗、体が軽い小紫でも、人間ひとりくらい、たやすく吹っ飛ばせる。

グリゼルダは耐えてくるだろう、と雷真は読んだ。

こちらを知覚できていなくても、命中の瞬間に荷重方向をそらす——そのくらいの芸当はやってのける相手だ。

だが、その一瞬に隙が生じるはず。そこを突けば、勝機がある。

小紫がグリゼルダに肉迫する。山猫のように素早いタツクル。きゅっと丸めた肩がグリゼルダに命中した瞬間、小紫の天地が引っくり返った。

何が起こったのかわからない、という顔で、小紫が宙を一回転する。

そのまま、小紫は背中から石畳に叩きつけられた。夜々とは違って、小紫には受け身も教えていない。ほとんど真横から、嫌な角度で腰を強打する。

（嫌をつかんで投げた！）

雷真は瞠目した。あの一瞬で小紫の着物をつかんでいたらしい。何という早業！ どうやって小紫の正確な位置を把握したのか、まるでわからない。

「まいったー もうやめてくれ——」

グリゼルダが剣を振りかぶる。考えるより先に体が動いて、雷真は小紫の上に覆いかぶさった。だが、グリゼルダの剣は止まらない。ぶおんっ、とうなりをあげる一撃が、榴弾のような破壊力をとまって、石畳を叩き割った。

噴水のように弾ける土砂。雷真も、小紫も、土砂と一緒に飛ばされる。

直撃はしていない。外してくれたようだ。ただし、衝撃で魔力が途切れ、（八重葎）の効果は切れてしまった。

「人形を惜しむか。覚悟のない奴だ」

グリゼルダは落胆した声で言った。剣を鞘に収め、無情に告げる。

「話にならん。学院に帰れ」

「……そうはいかない」

「貴様は私の指導を受けるレベルにない。時間の無駄だ」

グリゼルダが背を向ける。雷真は駆け出し、彼女の前に回り込んだ。

「そこを何とか、頼むー俺には、あんたの（糸）が必要なんだー」

「……（アリアドネの糸）か」

ふう、とグリゼルダはため息をついた。

直後、出し抜けに、グリゼルダの剣が閃いた。

雷真は真後ろに転がり、きわどいところで刃をかわした。

はーっ、はーっ、と恐怖で息を切らす。

そんな雷真を半眼で見下ろし、グリゼルダは冷ややかに訊いた。

「貴様、死にたいのか？」

「先に訊けよーマジで死んでたぞ今ー」

「（アリアドネの糸）は我がウエストン家に代々伝わる秘術中の秘術。おいそれと他人に

漏らせるようなものではない。それとも、今のはまさか……求婚の暗喩？」

「違うー何でそんなに求婚されたがるんだー」

そのとき、どおん……、と低い響きが大気を掃きぶった。

爆音だ。小紫も、雷真も、グリゼルダも、そろって町の方を振り返った。ほんの数秒で、黒煙が立ちのぼった。

場所が駅前。先ほどの、ホテルがあったあたり――

「雷真――誰かが魔術を使ってる！　たくさんいるよー」
痛そうに腰を押さえながら、小紫が叫ぶ。

真っ先に、グリゼルダが駆け出した。

「あ、おい――」

振り向きもしない。町に向かって、疾風のように駆けていく。

「つくそー！　この大事なときに……」

余計な邪魔が入った。だが、雷真も弟子入りをあきらめるわけにはいかない。グリゼルダはあの強さだ。相手が誰だろうと、簡単にはやられまい。

だが、小紫は敵が複数だと言った。そして、グリゼルダには自動人形がない。

「万一つてこともある……か。選択の余地なしだー」

雷真は小紫に手を貸して立たせ、グリゼルダの後を追った。

町に飛び込み、警察署の前を通り過ぎたとき、雷真は状況を理解した。

石造りの警察署は半壊していた。壁に大穴があき、門扉はゆがみ、扉は崩れ落ちている。内部から火の手が上がり、あちこちに赤熱した鉄棒が刺さっていた。

どうやったのかは知らないが、先ほどの人形使いたちは拘置所から脱走したらしい。警官隊が飛び出してきた、グリゼルダに気付き、敬礼した。

「すみません、ミスー 感謝しますー」

「礼はいい。状況は？」

「先ほどの連中が、その、署に複数、あの、襲撃されました」

「落ち着けー 死ぬぞー」

「イエス、マイロードー」

雷真はぐっとつんのめった。

警官までもが、グリゼルダの私兵みたいになっている。

「女子どもは家から出るなー 警官隊は私に続けー」

よく通る声だ。訓練したのかもしれない。おまけに、場慣れしている。

グリゼルダの勇ましい声に呼応するかのように、警官たちが奮い立った。のみならず、騒ぎを聞きつけ、市民たちが続々と集まってくる。

全員が緑色の鳥打帽をかぶり、長銃で武装している。これではまるで民兵だ。

グリゼルダが駆け出すと、彼らは一斉についてきた。

闇雲（クモクモ）に突っ走るのではなく、四、五人単位のグループにまとめ、間隔を維持して疾走

する。男たちは見る間に数を増やし、五十人にもなった。

走りながら、グリゼルダは先ほどの警官に問いかけた。

「つまり、先の連中の——仲間が襲ってきたのだな？」

「はい。自動人形（オートマトン）を連れていました」

「数は？」

「魔術師が五、六人です」

かなりの戦力だ。警察署が受けた被害から見て、攻撃能力は大砲五、六門なみ。連射が利くぶん、大砲よりも厄介な相手だ。

だが、併走する男たちは怯むどころか——

「……………」「……………」「……………」

怖いくらいに気合十分。軍隊のように統率されている。

不気味に思っていると、どんつと爆発音がして、路地から煙が噴き出した。

木箱の破片が飛び散る中、ダークスーツの男たちが飛び出してくる。

夜目が利く雷真は、すぐに彼らの正体を見抜いた。

「さっきの連中だー 自動人形を新調してるー」

こちらに気付くと、彼らはぎょっとした様子で逃げ出した。

逃げながら鉄棒を撃ってくるので、自然、こちらの足は止まりがちになる。

「路地に隠れろー 命を粗末にするなー」

グリゼルダは素早く指示を出し、男たちを下がらせた。ただし、自分は通りのど真ん中で仁王立ちになったままだ。

「ミスター・コーウエン、いるか？」

「ここにー」

「隊を二つに分ける。貴様は鉄道沿いを走り、連中の側面に回り込めー」

「イエス、マイロードー」

「警官隊は私とともに正面から叩くー」

了解の声が上がり、彼らは即、行動を開始した。

（何だよ、これは……？）

雷真とそう変わらない年齢のグリゼルダが、大勢の人間を動かしている。そのことに、戦闘能力に感じたのとは別の畏怖が込み上げていた。

グリゼルダが追撃を再開する。

飛んでくる鉄杭を、例の（糸）——（アリアドネの糸）とやらで事前にとらふ。彼女が技を使うたびに、赤い煙が後ろに散って、真後ろの雷真を包み込んだ。

間もなく、逃走中の敵に追いついた。

人形使い二人は、路地を曲がったところで立ち往生していた。

路地の奥に木箱やら土囊やらが積み上げられ、退路を封じている。即席のバリケード。

市民が連携して作ったらしい。驚くほどに手際がいい。

人形使いがこちらに気付き、自動人形に攻撃を命じた——が、遅い——

既にグリゼルダが飛び込んでいる。剣のひと振り、手前の一体がスクラップ。返す刃で、もう一体がガラクタになった。

グリゼルダは止まらない。人形使いには目もくれず、町の中心部へと駆けた。

戦闘音はさらに向こう、駅の方から響いてくる。

突然、雷真の五感が違和感を訴えた。

静かな殺気を感じる。誰かがこちらを……グリゼルダを見ている——

「上だ、（迷宮）の魔王——」

「その名で呼ぶな——」

怒鳴りつつ、グリゼルダは敵の襲撃に反応した。

真つ赤な鉄棒が飛んでくる。精確に二発。胸と眉間を狙ったそれを、グリゼルダはギリギリかわした。体勢が乱れたところに、黒い影が降ってくる。

影は空中で剣を抜き放ち、グリゼルダに斬りかかった。

剣と剣とがぶつかり合い、ざいんつ、と甲高い音が鼓膜を打つ。

はんやり眺めている余裕はない。雷真の方にも鉄棒がきた。

三連射。進路をふさがれ、やむを得ず、小策を抱えて後方に飛ぶ。そのあいだに、影は華麗な足さばきで、二撃、三撃と、グリゼルダに剣をふるった。

（手練れだ！ グリゼルダに負けてねえ！）

雷真とグリゼルダ、一度に二つの標的を狙ってくる。明らかに、周囲の人形使いとは格が違う。顔はフードで隠れているが、金色の前髪がのぞいていた。

影の一撃は重い。グリゼルダは次第に押され、壁際に追い詰められた。

その隙を見逃す相手ではない。強烈な斬撃がグリゼルダを襲った。

たまらず、剣で受け止める。こぼれた刃が飛び、グリゼルダの頬を切った。

グリゼルダは銅迫り合いをさけようとしたが、相手がそうさせない。巧みに体重を移動して、剣を押しつけてくる。無理に剣を引けば、即座に斬り捨てられるだろう。

雷真の直感が、うるさいくらいに警告を発する。とっさに見上げると、建物の屋上に、自動人形のシルエットが見えた。

腕を真下のグリゼルダに向けている。既に発射態勢だ！

雷真は反射的に飛び出した。その横を、雷真より速い小紫が追い越して行く。だが、それでも間に合わない。敵との距離が遠すぎる。

小紫には悪いが——夜々かいろりがいてくれたら、と思つてしまふ。今、雷真にできることは。

（もう、これしかねえ！）

雷真は折るような気持ちで、印を結んだ。ありったけの魔力を集中。丹田で爆発させ、両手を小紫に突き出す。その途端、両手の指から魔力が飛んだ。

（できた……!?）

いや、完全な（紅翼陣）ではない。（糸）はわずかに五本だけ。それでも、出るには出た。前回同様、実戦の土壇場ではやれるのか。自分の勝負強さに自分で驚く。

小紫に行き渡った魔力は、一瞬で力になった。

強制支配して走らせる。小紫は驚いたようだが、素直に操作を任せてくれた。普段の夜々に匹敵する脚力を発揮し、石畳を蹴つて斜め上に跳躍する。そこらの自動人形なら負荷に耐えられなかっただろうが、小紫も夜々と同じ特別製。一瞬で四階の高さに到達し、敵の自動人形を蹴飛ばした。

自動人形の頭部が砕け、鉄棒はあらぬ方向へすっ飛んで行く。

状況を察したのだろう。グリゼルダが剣を払い、影を押し返した。影はそのまま宙をすべり、闇に溶け込むように、見えなくなった。

「ふん、味方の撤退を優先したか。私を消すつもりはなかったようだな……」
忌ま忌ましげにグリゼルダがつぶやく。だが、雷真はもう聞いていない。

どつと疲労が押し寄せ、強烈な睡魔が襲ってくる。脳髓がしびれ、思考がまともに機能しない。魔力の塊がぐるぐると、体内を滅茶苦茶に暴れ回っていた。

ふらふらと酩酊したような雷真を、グリゼルダがにらんだ。

「おい、貴様。先ほどのあれは、まさか——」

グリゼルダが言い終わる前に、雷真の背中から血しぶきが飛んだ。

立っているのか、倒れているのか、それさえわからない。

気がつくとき、雷真は石畳に突っ伏していた。

「雷真っ!? 雷真っ!」

抱き起こされる。小紫が雷真を抱え、ぼろぼろ泣いていた。

（そういや……あのときも。そんなふうに……夜々を泣かせちゃったな……）
そんなことを考えながら、雷真は気を失った。



Chapter 3 居候日記

1

それは、今から二年と少し前のこと――

ちらちらと雪が舞うあの日、硝子に拾われた雷真は、そのまま気を失った。

次に目を覚ましたときには、あたたかい布団の中にいた。

十八畳ほどの畳の間。火鉢のぬくもりが室内を満たし、障子越しに月明かりが見える。

雷真はのっそりと起き出して、障子の戸を開けてみた。

音もなく開いた障子の向こう、縁側のガラス戸越しに、和風の庭園が見えた。庭木や石灯籠に雪が積もり、幽玄のおもむきがある。

月明かりに映して見ると、雷真は新しい着物を着ていた。

夢の中にいるような気持ちで、ふらふらと縁側を歩き出す。

人の気配がする方に向かう。ほどなく、あかりのともった部屋を見つけた。クチナシと煙草のにおいが漂ってくる。その香りをかいた瞬間、雷真は覚醒した。



衝動に駆られるまま、両手で障子を開け放つ。

広間だった。五十畳をゆうに超えている。奥は一段高くなっていて、御簾みすがかけられ、あたかも貴人の御所のようだ。

壇に座すのはもちろん硝子。喘息ぜん息にひじを置き、足を斜めに崩している。

そしてその周囲に、三人の乙女が控えていた。

硝子のすぐ傍らには、青みがかった銀髪の乙女。

壇の下には黒髪の乙女と、紅葉色の髪の乙女。

雰囲気と体の大きさに違いがあるが、顔立ちは似通っていて、姉妹であることがうかがわれる。それぞれコンセプトの違う着物に、よく似た柄があしらわれていた。

四人ぶんの視線を浴びせられ、雷真は勢いを殺がれ、棒立ちになった。

最初に口を開いたのは、硝子だった。

「無料よ、坊や。女の部屋に押し入るなんて」

「——あの約束は、本当なのか？」

かすれ声でたずねる。

硝子は雷真をたしなめるでもなく、しつとりと微笑ほほえみみ、うなずいた。

「本當よ。坊やは私と契約した」

「なら、今すぐ人形を貸してくれ！」

「そして、どこへ行こうと言うの？」

うっ、と雷真は詰まった。

「——時が惜しい！——すぐに修行を始める！」

「落ち着きなさい、坊や。あせった男は粗相をするものよ。凍傷に肉体疲労、臓器の傷みで坊やはほろほろ。まずは体を治しなさい」

「じつとなんかしていられるか！俺は一秒でも早く、あいつを殺して——」

心に憎しみの炎が燃え上がった。激情が命じるまま、ずかずかと広間に突入する。乱暴な足取りで硝子に迫ろうとしたとき——

ゴッ、と鈍い音がして、ひたいが何かにぶつかった。

「わ……痛そ……」

同情のこもった声で、一番小さな乙女がつぶやく。

たまらず転倒した雷真が、ひたいを押さえながら首を起こすと、眼前に、きらめく格子戸ができていた。

氷の格子！氷は固く結まり、鉄のような強度だ。

硝子のとおり、銀髪の乙女が冷淡な目を向けていた。

「お控えください、雷真殿。主に無礼は許しません」

その口ぶりから言って、彼女が魔術を使ったようだ。学の浅い雷真でも、さすがに相手

の力がわかる。人形使いの魔力も受けず、これほどの魔術を発動させるとは……。

恐るべき自動人形だ。そして同時に、己の無力も悟る。

今の雷真はただの素人にすぎず、彼女たちは皆、雲の上の存在だった。

「少しは頭が冷えたようね」

くすくすと笑いながら、硝子は穏やかに、しかし厳しく言った。

「吠えて犬死にすることが、果たしてあの子のためかしら？　まあ、坊やはそれで気持ちよく死ぬるでしょうけど」

ぐうの音も出なかった。

雷真は身を起こし、大人しく、その場にあぐらをかいた。

「ふふ……いい子ね」

「子ども扱いはやめてくれ。それで、俺に貸してくれる人形はどれなんだ。そのくらいは教えてくれないだろうか」

一刻も早く魔術回路を把握して、戦術を研究したい。

硝子は煙管を吸い、間を取った。

「そうね……赤羽一門の『天童』が相手となると」

「あいつは赤羽じゃない！」

「そうだったわね。赤羽の名を背負う者は、今や坊やただひとり」

ただひとり——わかつていたのに、その言葉は雷真の胸を深くえぐった。
父も、母も、撫子も死んだ。

叔父も、伯母も、従兄弟たちも皆。

涙が込み上げそうになり、雷真はあわてて奥歯を噛んだ。

硝子は見透かしたような目をしたが、そこには触れず、話を進めた。

「この屋敷に彼を倒せる人形があるとすれば、《雪月花》をおいてほかにない。そして、その役目にもっとも相応しいのは——」

乙女たちを順に見回し、そして、黒髪の乙女に告げる。

「夜々、おまえが坊やに仕えなさい」

それは先刻、硝子と一緒に雷真を迎えにきた乙女だった。黒い着物には金糸で三日月が描かれている。察するに、《雪月花》の《月》か。

乙女は小さな唇を開き、

「嫌です」

と応えた。即答だった。

「たとえ硝子の命令でも、夜々は嫌です。夜々は至高のお人形——その価値を理解もできない、こんな子どもに使われるのでは、雪月花の名が泣きます」

実に、はつきりと言う。雷真は怒るのを通り越して、可笑しくなった。

そうだ。こいつの言うことは、もつともだ。

雪月花がどれほどのものか、雷真はまだ理解していない。

そして、雷真の《傀儡の術》は極めて拙い。ふたつ下の妹より、はるかに才がなかった。だから逃げたのだ。傀儡師の家から。

天下の花柳堂人形にはとても吊り合わない。まさしく月とすっぱんだ。

「夜々ー わがままを申すなー」

銀髪の乙女が眉を吊り上げ、厳しく叱った。

「おまえというやつは、どうしていつもいつも、そうわがままばかり——」

「いろり姉さまは意地悪だから嫌いです」

つん、とそっぱを向く。嫌いと言われて、銀髪の乙女は衝撃を受けたようだ。若干涙目になりながら、硝子の前に膝を進める。

「申し訳ありません、主。夜々の代わりに、私が雷真殿の側仕えを」

「この花柳斎が決めたことよ」

硝子の声は穏やかだったが、反論を許さない凄みがあった。

黒髪の乙女——夜々が、びくつと身をすくませ、こちらに視線を超越す。

古井戸のような眼。冷たい恐怖を感じる。これが「殺気」というやつか？

雷真は下っ腹に力を入れて、負けじとにらみ返した。

「さあ、気が済んだのなら、坊やは布団に戻りなさい」

硝子に広間を追い出され、雷真は先ほどの部屋に戻った。

布団に潜ってはみたものの、気が昂ぶっていて、眠りは浅かった。

明け方、そつとガラス戸を開け、庭園に下りてみる。

雪の冷たさが裸足に響いたが、無視して中央へ。印を結び、魔力を高め——手始めに、近くの小枝に念を送った。

だが、小枝はびくりと揺れただけで、立ち上がりもしなかった。

雷真は飛び石を殴りつけ、血のにじんだこぶしで、なおも印を結んだ。

「まったく、野良犬のような男ですね」

ふと、あきれたような声が上がから聞こえた。屋根を振り仰ぐと、白々と明ける空の下、残月のように朧に、夜々が座っていた。

「せつかく硝子が休めと言ってくれたのに。大だつて恩と礼儀は理解します」

「……何の用だ」

「貴方に用などありません。ただ、硝子のふしどに潜り込もうなんて不埒な考えの男なら、掘りつぶしてやろうかと」

「どこをだ——つか、そんなことするか——」

「……ちっ」

「何で舌打ちした!? つぶしたいのか!」

夜々は袖で顔を隠し、芝居がかった身ぶりで、自らの境遇を嘆いた。

「ああ、嘆かわしいです。この屋敷に男が……それも、こんな下品な男がいるなんて」
「下品で悪かったな。だが、その下品な男に使われてもらうぞ」

バチッと火花が散って、再び、にらみ合いになる。

「……使い手が死ねば、夜々が使われることもない……なんて、思いませんか?」
きゆう、と夜々の瞳孔が不自然に開いた。

「せいせい……気をつけてください」

呪わしげにつぶやき、ぴょんと飛んで屋根の向こうに消える。彼女の運動能力は雷真を
——否、人間の限界をはるかに超えている。

「危ない奴だな……」

明け方の冷氣にもかかわらず、雷真のあごに冷や汗が伝った。

2

空気が生ぬるい。

いや、むしろ暑い。たった今まで、冬の冷氣を感じていたはずなのに……。

不審に思つて目を開けると、乙女の泣き顔が飛び込んできた。

「雷真かみまこと」

夜々ややではない。頭の横で髪を結った、この幼い顔は……小紫こむらさきだ。

「よかった……雷真……よかった！」

雷真に抱きついて、声を殺して泣く。

胸に当たる重みで、ようやく、雷真の意識も夢の世界から帰ってきた。

そうだった。雷真はまた（紅翼陣こうよくじん）に失敗し、倒れたのだ。

ベッドに寝かされている。部屋の石壁は古い。中世の城のようだ。

雷真は痺れた右腕で、しゃくり上げる小紫を撫でてやった。

「もう泣くな。悪かった。心配かけたな」

「雷真の馬鹿……死んじやうかと思つたよ……」

「死なねえよ。俺おれに何かあつたら、おまえ、ますますへこんじまうもんな」

「そうだよー ひどいよー」

うわーん、と声をあげて泣く。その泣き声を聞きつけたか、重厚な扉が開き、ひよこつとグリゼルダが顔を出した。

「もう気がついたのか。あきれたしぶとさだな」

「俺の一族は、命根性まで汚い連中でね」

雷真は自虐的に笑って、軽い口調で答えた。

「千年、血なまぐさいことをやってきた。おかげで、怪我には強いんだ」

「因業が積み重なって物の怪と化したか。……まあ、他人のことは言えんがな」
どういう意味かと気になったが、それよりも先に、言っておくことがある。

「あんたが助けてくれたのか。すまない、助かった」

「ここは我がウェストンの邸だ。かつては皆だったもので、いささか殺風景ではあるが——
遠慮せず、くつろぐがいい」

「……俺の体はどんな感じだ？」

「出血したが、縫うほどでない。医者の看立てでは、完治にひと月だそうだ」

前回よりもはるかに軽傷だ。雷真は自分の悪運に感謝した。旅先で前回と同じ傷を負えば、もう助からなかっただろう。

「……で、そのことだ」

グリゼルダの声が低くなる。

「戦いのさなか、貴様が見せた魔力運用法——あれは何だ？ まさか、我がウェストン家に代々伝わる秘術と同じ……」

「ああ、実は俺もそれが気になって——」

「そ、そうか！ 父上の隠し子！ 母上というものがありながら、東洋の女を孕ませるな

と不潔！」

いきなり抜剣。次の瞬間、ベッドが吹っ飛んだ。

飛び起きていなければ、今頃、雷真も真つ二つだ。

「何しやがる！」

「許せ、腹違いの弟よ！ 一族の恥を抹消するのだ！」

「自己完結して殺そうとするな！ あんたと血のつながりなんかない！」

「そうだよ！ 雷真は赤羽一門っていう、人形使い一族の生まれなんだよ！」

小紫が雷真をかばい、両手を広げて主張する。グリゼルダは怪訝そうに、

「アカバネ……？ その名は記憶にある……む、そうか、極東の」

「知ってるのか？」

「私が学院の学生だった頃、清国からの留学生がそんな話をしてくれた。極東には、血の

羽衣をまとい、妖しの傀儡を使う一族がいると」

雷真は目を見張った。清国にまで聞こえていたのか、赤羽の名前は。

「当時は、なぜ私にそんな話をするのかと訝ったものだが……よもや、（糸）を援う一族

だったとはな」

グリゼルダの眼光が鋭くなる。観しみを抱いてくれた様子ではない。

「それで貴様、（しるし）はどこにある？」

「——しるし？」

本気で意味がわからず、雷真は間の抜けた声を出した。

グリゼルダは目を見開き、何事かつぶやきかけたが——のみ込んだ。

会話が途切れる。雷真は今がチャンスとばかり、畳みかけるように言った。

「とにかく、俺も似たような血を引いてて、（糸）が使えるはずなんだ。だから頼む。俺を弟子にしてくれ」

床の上に手をついて、頭を下げる。グリゼルダは露骨に嫌そうな顔をして、

「……断る、と言ったら？」

「してくれるまで、帰らない」

「貴様」とき、追い出すことはたやすい」

「またくるさ。何度でも。あんたがOKしてくれるまで」

熱意が伝わると念じながら、まっすぐ見上げる。

さっ、とグリゼルダの頬が朱に染まった。

「こ……こんな熱烈なアプローチを受けたのは初めてだ……」

「いや、アプローチには違いないが、そういうアプローチじゃないからな？」

「年下というのは、なかなかいいものらしいなっ」

「そういうんじゃないからな!」

おはん、と咳払いをして、グリゼルダはしかつめらしい顔になった。

「まあ、貴様も私も若いことだし、将来のことはいずれ目を改めるとして」

「改めて何も変わらねえぞ……?」

「後達の育成に努めるのも魔王の責務だ。……かく言う私も、先達の厚意を賜った身の上だしな。無下に断る道理はない」

「じゃあ、弟子にしてくれるのか!?」

「だが、魔術師の指導は対価なしに受けられるものではない。これも道理だ」

「……条件があるってことだな? 何だ?」

グリゼルダはびしつ、と雷真を指差した。

「私の下僕になれっ——いや、間違った! この邸の執事になれ!」

「それは間違いいじゃねえ! 思惑がダダ漏れたんだ!」

小案があっけに取られたように見守る中——

かくて雷真は弟子入りを許され、ウェストン邸に住み込むことになった。

3

「モタモタしないで、ちゃつちやとやれですう!」

住み込み三日目。だだっ広い邸内を、根気強くモップがけしていた雷真に、そんな言葉が浴びせられた。

えへん、と偉そうにふんぞり返っているのは、金髪碧眼の少女。

背丈は雷真の胸くらい。髪は兎のようにふわふわで、小動物的に愛らしい容姿だが、兎や剣、胸当てなどで武装している。

グリゼルダの自動人形イブシロン。見た目は人間の少女にそっくりだ。決して安物ではないが、魔王の持ち物にしては、いささか貧相だった。

二年前とは違って、雷真にも自動人形を見る目が備わってきている。優れた自動人形は、存在自体に凄みがあるものだ。普段は仔電の姿でとぼけているシグムントも、秘めた性能や、恐るべき魔性は隠しようがない。

比べると、イブシロンは構造的にも貧弱そうで、魔力の流れも精密ではない。この人形で夜会を勝ち抜くのは不可能に思えた。

——という雷真の失礼な思考にはまったく気付かず、

「手が止まってるですよド腐れ弟子。掃除も満足にできんのか愚図っ、ですよー」

「……あのな、こちとらまだ貧血気味なんだぞ。つか、暇ならおまえも手伝えよ」

「バカ言うなですう。雑用なんて下々の者がすることですう」

「こいつ……無性に解体したくなってくるな……」

「きやーっ、おまけに変態ですうー 助けてご主人さまーっ」

「ちよつと待てー どういう解体を想像した!?」

きやーきやー言いながら、胸を隠して半ベそをかくイブシロン。何と言うか、心が弱い。これではますます、魔王の持ち物に相応しくない。

「何だ、朝っぱらから……騒がしいぞ……」

のそりと廊下の角を曲がって、グリゼルダがやってくる。

その姿を見て、雷真はあわてて視線をそらした。

グリゼルダはシャツを羽織っただけで、下は下着一枚だった。はだけたシャツから引き締まったウェストがのぞく。そんな姿でも、左手に剣をぶら下げていた。

男っぽいとは思っていたが、あまりに無防備すぎる。

「ずいぶんと遅いお目覚めだな、お師匠さま。もう昼だぞ」

ひゅんっ、と剣が一閃し、雷真の鼻先をかすめた。

「つぶねーなー 何しやがるー」

グリゼルダはだるそうに、

「朝の挨拶は……『おはようございますご主人さま』だろう……?」

「昼だー つか、弟子にはなつたが、奴隷じゃねーぞ俺はー」

「どちらも同じようなものだ……眠い。くー」



「寝るな。あと問題発言もやめろ。つか、今日こそ稽古をつけてもらうからな」

「口うるさい男だ……。まったく、そんなに私を束縛したいとは♡」

「違うー 何でそこだけ無駄にポジティブなんだー」

「ド腐れ弟子……。主人様をたぶらかして……。くっ、くやしいですう……。ー」

イブシロンがハンカチを噛んでいる——のは無視するとして。

グリゼルダはぐつたりと柱にもたれ、しきりに目をこすっている。

昨日も寝起きはこうだった。あれだけ血気盛んなのに、意外にも低血圧らしい。

（いや……。〈糸〉の代償か？）

三日前、グリゼルダは〈糸〉を多用していた。〈紅鬃陣〉と同じ原理なら、かなりの量

の血液を体外に放出したはずだ。

「掃除は済んだのか……。？　なら、何か精のつくものを作れ……。」

「執事って言や聞こえはいいが、ただの使用人じゃねーか」

「執事が不満か？　ならばメイドでもいいのだぞ？　むしろ私はその方がいいっ」

「急に元氣になったな！　絶対やらねーからなー」

雷真はグリゼルダを放置して、床掃除を再開した。

廊下の片側は吹き抜けになっていて、見事な中庭が見える。イギリス式の庭園は和風のそれとはまた違う静けさがあり、邸内の静寂を一層際立たせていた。

「なあ、お師匠さまよ。何でこんな大きな——城？　に、使用人がいないんだ？」

「金がない」

腕を組み、胸を反らして言い放つグリゼルダ。イブシロンが同じポーズを取っているのが地味にむかつく。

「この邸宅はバカみたいに維持費がかかる。人件費にまで金が回せない」

「……あんた、魔王なんだよな？」

「無論だ。現在もつとも若く、もつとも美しく、そしてもつとも貧乏な魔王だ」

「貧乏魔王ですう！　ちなみに二つ目のは自称ですう！」

「死にたいのかイブシロン……！」

「きやーっ、ごめんなさいですう！」

グリゼルダはイブシロンの頬をつかみ、むにーっと左右に引く張った。

じゃれ合う主従にあきれつつ、雷真は氣になったことを訊く。

「じゃあ、家族が同居してないのはなぜだ？　いないのか？」

「……この邸には、私だけだ」

「自動人形も少ないよな。魔王の城だってのに、こんなものしかないとか」

「この癡れ者がーっ、ですうー」

イブシロンが剣を抜き、いきなり斬りかかってきた。

ひと目見て、おやつと思った。使い手の体格に合わせたのか、剣は短く、グラディウスに似ていた。ただし、こちらは片刃で、わずかに反りがある。銀がたっぷり含まれているらしく、魔力も感じる。なかなかの高級品だった。

だが、当たらなければどうということはない。雷真らいしんはひよいと体をかわし、剣をモップで押さえ込んだ。

「いきなりこんなものを抜くな。野蠻なのは、ご主人さまの教育か？」

「黙りやがれですうー わたくしを『こんなの』呼ばわりなんて……わーんー」

「あつ、ごめんー おまえは立派な自動人形オートマタだー」

「えへへーそれほどでもあるですう♡」

もう機械が直る。雷真は白々しい気分でグリゼルダを振り向いた。

「あの……お師匠さま？ こいつ……ちよつと、その……」

「うむ。おつむが弱い、可哀相かわいそうな子なのだ」

「はつきり言うなー あんたの人形だろー」

「だが、私は馬鹿ばかなくらいが可愛いかわいいと思う」

可愛いと言われて、イブシロンが目をうるませる。

「ご主人さま……」

「おい感動するなよ？ 馬鹿ばかって言われたんだからな？」

イブシロンは聞いていない。女神を見るような眼で主を見つめる。

「可愛いかどうかはともかく——そいつ一体だけつてのはおかしくないか？」

単なる地主と化した「元」貴族ならともかく、ウェストンのように軍人氣質を受け継いでいる場合、戦力として、財産として、各種とりそろえているのが一般的だ。

この点に関しても、グリゼルダの答えは簡潔だった。

「我がウェストン家には金がない」

「ですうー」

がくつと雷真はつんのめった。そんなオチか。

「ゆえに大半の自動人形を手放してしまつてな。私の財産と言えるものは、土地と建物、そしてこの剣——（ストラトキヤスター）——くらいのもんだ」

「盾を撃ち出すもの？ ひょっとしてそれ、魔具……なのか？」

「聖剣と言え。曾祖父が女王陛下からたまわつた、恩賜の剣だ」

「だが、全然、魔力を感じねえぞ？」

「貴様が未熟なだけだ。ともかく、我がウェストン家の財産はほとんどが失われた。この点に関しては、代々の当主に申し訳なく思う」

「金がないなら稼げばいいだろ。あんたは魔王なんだからさ」

「私は確かに魔王だが、その前にひとりの女だ」

「わけわかんねーし。つか、働かないと、世間が納得しないだろ？」

グリゼルダの右眼みぎめがこちらを見る。雷真かみじきは重ねて訊いた。

「あんたが魔王マウジンになったことで、列強が手塩にかけた連中——大勢の（魔王候補）が魔術師倫理規定っていう物ものをはめられたんだ。あんたが今みたいな暮らしをしてて、そいつらは大人おとなしくしているのか？」

「……まったくもって意外だが、貴様、バカ面のわりに聡さとしいな」

「バカ面は余計だ！」

「大人しくは、ない。だが、恨みを買うのは慣れっこだ。私にはこんな暮らしが似合っているし、私に敗れた連中に私を責める資格はない」

もつともだ。雷真は奥歯を噛かむ。敗者はいつだって、勝者の理屈に従うしかない。この世界は、そういうふうにできている。

「……だとしても、英国は黙もくっちゃいねーだろ。あんたは英吉利人イギリスで、しかも有名な軍人一家の生まれだ」

「うむ。ましてこの美貌ひびようだからな。高官たちが鼻の下を伸ばして寄ってくる」

「見栄張るな。あんたは確かに美形だが、鼻の下を伸ばす系じゃない」

「貴様、死にたいのか？」じゃきつ。

「ほらそれーそれが怖いって言ってたんだよー。少しは娘さんらしくしろー」

「む……」

グリゼルダは剣を見下ろし、次に自分の体を見た。シャツをはだけて下着一枚——確かに、レディに相応しい格好ではない。

少しは引け目があったのか、グリゼルダは赤面して、そつばを向いた。

「私はロードとして育てられたからな。女らしくと言われても……わからん」

「じゃあ、せめて形から入れ。貴族なんだから、貴婦人の礼法とか知ってるだろ」

「しとやかぶっついては戦場で死ぬぞー バカがー」

「その戦争ボケをやめろー 女子どもを戦場に送り込むなー」

「ふん、甘えるなよ。ここが戦場になることもある」

「論旨のすり替えだな。ともかく、女っぽい格好して、化粧してみるとかさ」

「なん……だと……!? 私が女装……!?」

「女装っつーか、女だけどな、あんた。ま、無理することはねーけどよ」

そのひと言がカンに障ったようだ。グリゼルダは顔をひくつかせ、

「……ここまでコケにされたのは生まれて初めてだ」

「え? 俺、何か言ったか?」

「うるさい黙れー さっさと掃除を済ませて、食事の支度をしろー」

雷真を怒鳴りつけ、ぶんぶん怒って去っていく。その後を、イブシロンがちよこちよこ

と仔犬のように追いかけていった。

「……そういや、小紫はどこ行つたんだ？」

思い返してみると、朝から姿を見ていない。

雷真の胸に、もやもやと黒い雲が立ち込めた。

4

ウエストン邸の城壁の内側には、庭園が広がっている。

その一角、大きな櫓の木陰で、小紫はしょんぼりと膝を抱えて座っていた。

「コムラサキ？」

誰かに呼ばれる。小紫はあわてて目元をぬぐった。

「どうかしたんです？」

がちやがちやと鐘を鳴らして、イブシロンが庭園に入ってきた。

「何でもないよー 涼んでいただけー」

「……嘘ですう」

「え……」

「わたくしはバカですけど、バカだからわかるですう。コムラサキは、ちょっと前のわた

くしと、同じ眼をしてるです」

カラ元気をいともたやすく見抜かれて、小紫は狼狽した。

視線を受け止めきれず、顔を背けてしまう。

イブシロンは小紫のとなりになちよこんと座り、同じように幹にもたれた。

「話すがいいですよ、コムラサキ。自動人形は自動人形同士、悩みは打ち明けて、わかち合うものですう」

「でも……」

「わたくしでは力不足ですか？」

そう言ったイブシロンは、にっこりと優しく微笑んでいた。

「でも、力の強い立派なひとには言えないこともあるですよ。あの下腐れ弟子や、ほかの誰かに言えることなら、コムラサキはそんな顔してないです」

意外な包容力に触れ、小紫の胸はたちまち一杯になった。

感情があふれ、とどめておけなくなる。

ぼろ、と目尻から涙がこぼれた。イブシロンはぎよつとした様子で、

「わわっ、ごめんなさいコムラサキー 傷つけてしまったですか!?」

「ううんっ、違うの……」

何度か目もとをこすりながら、小紫は震える声で言った。

「ありがとう……イブシロンちゃん」

小紫が泣き止むまで、イブシロンは待っていてくれた。

少し落ち着くと、小紫は深呼吸して、ぼつぼつと語った。

「あのね、私には姉さまがふたりいるの」

「姉妹機、です？」

「うん、そつくりの設計なの。(雪月花) っていうシリーズ」

「おお……何かカッコいいですう」

「でね、姉さまたちは、それはもうすごい自動人形なの。いろいろ姉さまは都市を壊滅させちゃうし、夜々姉さまは戦艦の主砲を当てられたって平気なの」

「そつ——それが本当なら本当にすごいですー 超兵器ですうー」

キラキラと瞳を輝かせるイブシロン。対照的に、小紫の瞳は暗くなる。

「私だけがね……戦いの役に立たないの。こないだだって、雷真は私をかばって……実力が発揮できなくて。また紅翼陣を使っちゃって、それで……!」

一度引いた涙が、再び込み上げてくる。

「私にも……すごい力があればよかったのに……!」

「何を言ってるですー コムラサキはすごい自動人形ですよー」

怒った声で断言する。イブシロンは驚く小紫の手を取り、



「ほら、小紫の手はこんなにきれいですし、しなやかです。わたくしはそうはいかないのです。関節を動かすたび、ギアがきゅるきゅる言っちゃうですよ」

腕を持ち上げ、ぱっぱとてのひらを開いて見せる。そのたびに、軟質素材の肌の下で、内部構造が機械音を立てた。

イブシロンはやわらかく微笑み、小紫の手を両手で包んだ。

「こんな素敵な体を持つてるのに、車厘になつてはバチが当たるですよ」

「……でも、イブシロンちゃんは、戦いの役に立つでしょ？」

「わたくしだって……役に立たないですよ」

悲しそうにつぶやき、しおれてしまう。

「だからご主人さまは、わたくしにお留守番ばかりお命じになるです……。ご主人さまがおひとりで戦われた方が、お強いですから」

小紫がフォローの言葉を見つける前に、イブシロンはすつくと立ち上がった。

「でも、わたくしはあきらめないですーそれが自動人形魂ですよー」

「――」

「うおおおお猛烈に素振りしたくなつたですー ちょっと失礼つかまつるですよー」

イブシロンは銀剣を抜き放ち、その場で素振りを始めた。

縦に、横に、基本に忠実な素振りを繰り返す。

ブレがまったくなく、ずっと続けているのだと、素人の小紫にもわかった。

——胸が締めつけられるような気がした。

小紫の感覚器は超高度、イブシロンの魔力親和性を見抜いている。

イブシロンがどれほど努力したところで、根本的な問題は解消されない。

彼女は最大出力の〈糸〉に耐えられないのだ。イブシロンがどれだけ努力を重ねても、その現実が変わらない。グリゼルダが彼女を使ってくれるかどうかは……。

「でも、ふんー わたくしは、ふんー 違うと思うですよっ」

素振りをするが、イブシロンが唐突に言った。

「え……？」

「コムラサキの悩みはっ、ふんー 的外れだと思っすっ」

びたつと素振りを止め、笑顔で振り返る。

「お姉さまだけ優れてるなんてことはあり得ないですよ。人間は『吊り合い』というのをひどく気にする生き物ですよ」

「吊り合い……？」

その瞬間、小紫は初めて、硝子の意図にまで考えが及んだ。

三つの異なる魔術回路を、雪月花とひとくくりにした理由。

いろいろ、夜々、小紫——まるで統一感のない愛称を三人に与えた理由。

何かがわかりかけている。何か、とても大切なことが。そして、もうひとつ、別のことも。

イブシロンはグリゼルダの（糸）に耐えられないかもしれない。だが、それが果たして、努力を放棄する理由になるだろうか？

自動人形には知性がある。学習する存在だ。もっとも効率のいい動作、無駄のない動作、術者の意図に沿う動作——それは後天的に学習できる。

役に立つか立たないかなんて、性能だけが決めることでは……。

「おーい、小紫——」

邸宅の中から、雷真の声が飛んできた。

一階の廊下から手を振っている。シャツのそでをまくり、上着を脱いだラフな格好。珍しく締めたネクタイが二割増しで男前に見せている。

「何だおまえ、そんなところにいたのか」

安堵したように笑っている。ひょっとして、心配して探していたのか。

その雷真に、イブシロンが剣を突きつけた。

「出やがったなド腐れ弟子っ、ですうー」

「……おまえもいたのかイブシロン」

「いちゃ悪いか、ですうー 新入りのくせに生意気ですうー」

「何でケンカ腰なんだ。すぐ戻るから、そう殺氣立つな」
適当にいなしつつ、雷真は小紫の方に近寄ってきた。

小紫はちよっともじもじしつつ、上目遣いでたずねた。

「雷真……何？」

「これから昼飯を作るんだ。レシピはあるんだが、その、正直サッパリでよ……悪いが、手伝ってくれないか？」

頼られた。それだけのことで、小紫の心が弾む。

「おっけい！ 任せて！」

元氣よく駆け出す。素振り中のイブシロンに見送られながら、小紫は雷真の腕にまとりついて、邸宅へと戻った。

「ねえ、雷真。お願いがあるんだけど」

「願い？ 何だ？」

迷いは一瞬。小紫は表情を引き締め、真剣な声で言った。

「私にも修行、つけてくれない？」

雷真が硝子の屋敷で寝泊まりするようになって、十日がすぎた。

体の傷はすっかり癒え——るところか、さらに生傷が増えていた。

ここ数日ですつたとおぼしき切り傷や内出血、包帯やら湿布やら絆創膏やらで、雷真の見た目はますますポロポロになっている。

それでも雷真は怠けず、早朝から深夜まで鍛錬を続けていた。

この日も、雪が融けた中庭に居座り、自作の木偶人形を散歩させていた。

「相変わらず、薄汚れた男です」

ほとんど気配もなく、樹上に乙女が現れる。

振り向かなくても、もう声だけで誰だかわかる。雷真は無視して鍛錬を続けた。

「あちこち傷だらけで、本当に野良犬じみてきました」

「……誰のせいだよ、暗殺者」

「人聞きの悪いことを言わないでください。誰が暗殺なんて」

「寝ている俺の上に石灯籠が飛び込んできたり、となりの部屋のタンスがふすまを破って飛んできたりするのは暗殺じゃねーのか!?」

思わず振り向いてしまう。夜々はつんとそっぽを向いて、

「夜々がやつたという、確たる証拠があるんですか？」

「状況証拠だバカ野郎—— おまえ以外にいるか——」

「お話になりませんね。魔力だけじゃなく、血の巡りまで不十分です。そんな言葉で有罪が勝ち取れるなら、裁判所なんていりません」

「黙れ！ おまえのおかげで俺は殺氣が読めるようになったよ！ 剣術道場で何年修行しても身につかなかったのになー」

「よかったじゃありませんか。暗殺者に感謝するべきです」

「くそつたれ……ああ言えばこう言う……」

雷真は髪をかきむしった。そんな雷真を夜々は敵対的な目つきで見下ろしている。監視しているつもりなのか、なかなか立ち去ろうとしない。

「……おまえ、暇なら付き合えよ」

「付き合う？ 何に？」

「決まってる、修行にだ」

「ばか、と夜々の唇が開いた。さすがに意表を突かれたようだ。

「あらかじめ戦術を練っておきたい。それに、俺はおまえの魔術回路もわからないんだ。

把握する必要があるだろ」

「バカにしないでください。汗臭い訓練なんて、夜々には必要ありません」

「おまえがバカじゃなくても、こっちはバカなんだ。試させろー」

「嫌です。それに、夜々は貴方あなたなんかに使われません」

はああああ……、と雷真は長いため息をついた。

そして、ぐっと腹を据えて、夜々をにらみつけた。

「おまえが俺を気に食わないのはわかった。だが、俺は硝子さんと契約したんだ。おまえはもう俺の人形だ。是が否でも従ってもらう！」

気迫と気迫、視線と視線がぶつかって、空中に見えない火花が散った。

ややあって、先に視線をそらしたのは夜々だった。

夜々はバカらしくなった様子で、ふんと鼻であしらった。

「百万歩讀つて、夜々が貴方に手を貸すとしても、修行の必要はありません」

「あ？ なぜだ？」

「貴方はただ、魔力を提供するだけで結構です。あとは夜々がやつてあげます。不本意ですが、硝子の命令なので」

「そんな簡単な話じゃねえ！ 相手は赤羽が千年かけて生み出した化け物——一族の歴史を塗り替える時まで言われた傀儡師なんだぞー」

目の奥で火炎が燃え、肉体が憎しみに支配される。

炎の臭いが甦る。家が焼かれたときの。撫子を焼かれたときの。

「あいつは兵法にも通じてる。おまえは確かに馬鹿力だが、力任せで勝てるわけ——」

一瞬で、間合いに入られた。

遅れて認識したところでは、夜々は幹を齧^かって跳躍したようだった。

新芽を吹いたばかりの木がへし折られてしまう。そのめきめきつという音を聞いたときにはもう、夜々は雷真のふところに入っていた。

あるいは本調子だったなら、かわせたかもしれない。

だが、今の雷真は半死人。夜々の（のど輪）はたやすく雷真の首をとらえた。

「口は達者なようですが、腕はこんなものですか？」

「ぐっ……が……はっ……！」

つかみ上げられ、血流が途絶える。視界が白み、耳が遠くなった。

「どうですか？ これでも足りないかと？」

「……そう、だー」

必死に叫ぶ。断固として。

ぶんつ、と体が振り回され、地面に叩^{たた}きつけられた。痛みよりも、呼吸の快楽が勝る。

雷真は咬^かき込みながら、酸素を求めて激しく息を吸った。

夜々は蔑^{あざむ}むような眼で雷真を見下ろし、くるりときびすを返した。

「……おい、どこへ行く？」

「手を洗いに行くんです。男に触れた手なんて、汚らわしいので！」

去っていく。雷真は仰向けに転がり、苦笑した。これはなかなか難しい。

春の空をほんやり見上げ、背中で土の冷たさを味わっていると、不意に、妖艶な美女の顔が覆いかぶさってきた。

「難儀しているようね、坊や」

雷真はあわてて飛び起き、硝子に向き合った。復讐にとりつかれているとは言え、何日も居候を決め込んでいると、自然と礼儀作法を思い出してくる。

硝子はくすりと笑って、それから、魅力的な提案をした。

「私があの子を叱ってあげましょうか？」

「……いや、いい」

「あら、どうして？」

雷真は視線を落とし、無意識に土を握りしめた。

「硝子さんに『言われたから』じゃ、何つーか……足りない気がする。あの男に手をかけるには、もつと……熟？　みたいなもんが必要なんだ」

精神論と笑われるかもしれないが、奇跡を起こすためには、奇跡に見合うだけの何かが必要だと思つた。それがあつてなお、起きないのが奇跡だと。

（今の俺と夜々には、全然、足りねえ……！）

「何とか、自分で説得してみる。もう少し……」

「ふふ……いい心がけね」

意外にも、硝子の言葉は優しかった。

硝子は夜々が去った方向を眺め、昔話を聞かせるように、穏やかな声で言った。

「古来、優れた道具は自ら主を選ぶと言うわ。刀剣、馬、茶器に至るまで、名器は主を主と認めて、初めて本当の威力を発揮する。それに――」

ちらりと雷真を一瞥。試すような口ぶりで言う。

「傀儡と傀儡師は犬と飼い主みたいなものよ。どっちがご主人さまか、時には血みどろの格闘の末に、わからせるもの」

「……真に受けてそれをやったら、俺は死ぬな」

あの夜々を相手に格闘すれば、雷真は簡単に殺されてしまう。

だが、ひよっとしたら――

それをやらなければ、道は開けないのかもしれない。

雷真は立ち上がって土を払い、再び魔力を練って、木偶人形に向き直った。



Chapter 4 変われば、変わる



1

硝子しょうこの屋敷に居候ゐこうするようになって、さらにふた月ほどが経った。

季節は初夏にさしかかり、汗ばむほどの陽気が続いている。庭木は青々とした葉をつけ、みずみずしい生気を放っていた。

この頃になると、雷真らいまことの体はすっかり回復していた。飛んだり跳ねたりに不自由もなく、少しくらい無茶な鍛錬にも耐えられる。相変わらず夜襲の危険にさらされていたが、慣れとは恐ろしいもので、傷を負うこともなくなった。

じりじりと太陽が焦げる昼下がり。雷真は本個人形ほんごじんぎょうに徒手空拳とくそくうけんの（型）を演武させていた。二か月前には歩かせるのもひと苦勞だったが、今ではかなりスムーズだ。

雷真が汗まみれになって悪戦苦闘していると、

「雷真殿、主あるにがお呼びです」

いろりが縁側に現れ、雷真を呼んだ。

「硝子さんが？ 何だ？」

「硝子に直接おたずねください。夜々、おまえもこい」

雷真は驚いて庭を振り向いた。庭にいるのは自分だけだと思っていたが、梢こずえががさりと動き、夜々が枝から降りてきた。気配を消して、のぞき見していたらしい。

誰も突っ込まない。いろりは無言で、雷真を屋内に導いた。

硝子は北向きの部屋にいた。縁側に腰掛け、足は水桶おけに浸している。風車のようなカラクリで涼をとっているが、少しも涼しそうに見えない。

こちらに気付くと、硝子はいろりを見つめて、「氷……」とおねだりした。

「もうお控えください、主。風邪を引きます」

硝子は未練そうにため息をついたが、あきらめた様子で、雷真に向き直った。

「坊や、お使いを頼まれてくれないかしら？」

「使い？ どこへ？」

「箱根を越えて、静岡しずおかの兵舎にね。夜々が場所を知っているわ」

「こいつを連れて行くのか……」

となりの夜々を盗み見て、げんなりする。夜々もつんとして、

「夜々だって貴方あなたと一緒に行くのは嫌です。お使いなら夜々ひとりで——」

「夜々——」

いろいろが叱る。夜々はふてくされ、黙り込んだ。

硝子は「ふふ」と小さく笑って、諭すように言った。

「二人で行くのよ」

「……わかった」「……はい」

しぶしぶながら、二人そろって承知する。

硝子は袖口から封書を取り出し、雷真に差し出した。

「この手紙を榊中将に届けて頂戴。渡せばわかるわ。いろいろとね」

「中将？ そんなお偉い方かよ……」

雷真はますますげんなりした。偉い人に会うのは苦手だ。

「すぐに発ちなさい。でも、道中は急がなくていいわ。途中に温泉もあるから、峠を越える前に、ゆっくりなさいな」

「あ？ ああ……」

雷真は首をひねった。鉄道を使えば今日中に往復できる距離だが——わざわざ途中下車して温泉に浸かれとは？

膝に落ちないものを感じたが、大人しく従うことにする。

雷真は部屋に戻り、簡単に支度を済ませた。

夜々と門のところで落ち合って、いざ出発。

二十メートルほど進んだところで、雷真は早くも足を止めた。

夜々は門の前に立ったまま、そつぽを向いている。

「おい、何やってんだ。日が暮れちまうだろ」

「……………」

「おい、夜々ー 返事くらいしろー」

「なれなれしく名前を呼ばないでください。耳が壊れます」

「俺は何だー 呪詛でもかけてるのかー」

「こんな男と旅行だなんて……………」

心底、嫌そうにつぶやく。雷真は頭痛を覚えた。愚痴を言いたいののはこっちだ。こんな調子では、妹の仇を討つなど、夢のまた夢だ。

二人でため息を繰り返しながら、最寄りの駅へと向かう。

国府津で降り、馬車で峠の宿場町に入る。「わざわざ徒歩で峠越えなんて……………」と夜々は不満顔だったが、硝子の指示ということで納得させた。

峠の東側は暗くなるのが早い。残照に浮かび上がる稜線は鋭く、こちらにのしかかってくるような圧迫感があった。

急峻だ。街道沿いにはうつそうとした森が広がり、明治以前の面影を遺している。

その地形を見上げ、雷真はしばし、呆けた。

「……あごが外れてますよ。バカ丸出しです」

わざわざ背後まで寄つてきて、嫌みを言う夜々。

「往來の真ん中で……真正正銘、恥ずかしい男ですね」

「ほう。俺を連れと認めるんだな？」

にやつとして切り返すと、夜々は一瞬、言葉に詰まり、

「……くだらないことを言っていると、首の骨を折りますよ？」

暗い瞳でそう言った。怖い。雷真はそそくさと逃げ出し、手近な旅館に入った。

旅館の従業員に——と言うより、夜々に聞こえるよう宣言する。

「一週間ほど、ここに逗留する」

「……あきれた男です。まだ初日なのに、もう怠けるんですか？」

「温泉でゆっくりしろ、つて硝子さんも言ってたろ」

「硝子のお金で……厚かましい……」

「文句はないんだな？」

「わかりました。七日もあれば、一度くらいは夜這いしたくなるでしょうし」

「俺は自殺志願者か——」

「夜々はいつてもいいですよ？ 骸は峠に捨てられますし」

全然、冗談に聞こえない。雷真は震え上がりながら、仲居の案内で部屋に入った。

心づけを渡して荷物を置くと、夕飯も食べずに宿を出る。

ざっと下見をして策を練り、旅籠に戻ったのは、夜も更けてからだだった。

翌日も、その次の日も、雷真はほぼ一日中、出かけていた。

擦過傷をこさえていることもあれば、草まみれになっていることもあった。現金を持ち出しているのもバレていて、夜々はかなり不審がついていたが、直接たずねてはこなかった。興味がないという顔で、のんびり温泉を楽しむ——ふりをしている。

そして、出発の日。

昼前に出発した二人は、見事な健脚を発揮して、するすると坂を登って行った。

頂まであと少し、というところで、雷真は立ち止まった。

「……何をモタつているんですか？ 今日中に峠を越えるんでしょう？」

夜々が不機嫌な声を出す。そんな彼女に、雷真は鋭く切り出した。

「夜々。俺と立ち合え」

「——え？」

「俺が勝つたら、おまえは俺の人形だ。この先は、俺に従ってもらう」

決死の覚悟を秘めた言葉。雷真は本気で言っているのだ。

どちらが主か、はつきりさせなければ、俺たちの関係は変わらない。

前に進むことも、別の道を探すこともできない。

だから今、決着をつける。たとえ決定的な敗北を喫することになっても。

夜々は雷真を見上げ、正気を疑うような顔をした。

「……本気ですか？ 自殺志願者じゃないって言いたくせに」

「死ぬ気はない」

むむっ、と夜々の眉根が寄った。

「夜々と戦って、無傷で済むとでも？」

「無傷は無理だな。だが、俺が負けることはない」

「……面白いです」

綺麗な顔が強張る。《雪月花》のプライドを傷つけられ、腹を立てたようだ。

夜々の体から魔力が勝手に漏出し、肩から妖気が立ちのぼる。あたりの木々がざわめき、鳥たちが一斉に飛び立った。

昨超えの旅人たちも、ただならぬ気配を感じて逃げていく。

「夜々の《金剛力》、ゆっくり味わう暇ありませんよ？」

そう言うが早い。雷真が構える間もなく、夜々は突っ込んできた。

執事とは名ばかりの、下男生活四日目。

珍しく早起きしたタリゼルダは、朝から町に出かけていた。「鬼のいぬ間」に、雷真は家事をサボり、小紫を中庭に呼び出した。

素振り中のイブシロンが興味津々の様子で見つめる中、雷真は棒きれ二本と、大ぶりのナイフを芝生に並べた。

「雷真、このナイフは？」

「このへんの森で、ハンターが枝や草を払うのに使うらしい。持ってみた感じ、小太刀にバランスが似てる。ちゃんと研げば使い物になるだろ」

「え……と？ ひょっとして、雷真……修行、つけてくれる気になったの？」

「ああ」

「ほんと？ ありがとうー」

嬉しそうにバンザイする。その無邪気な顔を見て、雷真の胸は痛んだ。

小紫の望みを叶えることは、兵器として彼女を完成させることを意味する。

それは本当に「いいこと」だろうか？

（……綺麗事だな）

雷真は苦笑して、棒きれを一本、小紫に渡した。

「え？ これは何？」

「掘りやすいだろ。ちよつと削つて、さっきのナイフにバランスを近づけた」

太陽が雲に隠れるように、小紫の表情が見る見る曇つた。

「……ひよつとして雷真、私に武器を使えつていうの？」

「コムラサキ……どうしたです？」

小紫の変化を見て、イブシロンが不思議そうな顔をする。

傍から見れば、小紫が感じた痛みは取るに足らないものだ。だが、雷真には痛いくらい

気持ちがかかる。雷真は囁んで含めるように、優しく言つた。

「いいか、小紫。夜々もいろいろも、魔術自体に攻撃力がある。だが、おまえの魔術じゃ、

相手を叩きのめすことはできないだろ？」

「そうだけどー！ 私だつて（雪月花）なのにー」

「言い方が悪かつたかな。おまえ、何年で強くなりたいんだ？」

「え、そりゃあ……今すぐ！」

「だろ？ おまえに組み打ち術を仕込んで、実戦で使えるようになるには、早くても数年

かかる。その数年を刃物がうんと縮めてくれる。小太刀は決して簡単じゃないが、おまえ

なら、ひと月ふた月でものにできるさ」

小紫はうつむいた。まだ納得していない様子だ。

「そう難しく考えるな。優れた人形がみんな素手で戦うわけじゃない。現に——マグナス

の戦隊は、全員が武器を持っていた」

そして、恐るべき攻撃力を誇っていたのだ。

「……うん、わかったよ」

ようやく納得したのか、小紫は棒きれを握って、何となく正眼っぽく構えた。握り方も、構え方も、まるで素人だ。だが、雷真はいちいち口では説明せず、

「じゃ、とりあえず基本からやってみるか」

「どうするの？」

「手取り足取り、教えてやるよ」

小紫に右手を向け、魔力を飛ばす。

普段はやらない強制支配で、小紫を意のままに操る。

小紫は逆手に棒きれを握り、半身になって腰を落とした。

武器を持つ手——右手が前で、左半身が後ろ側。刀と同じで、空手の逆だ。

順手に持つのが自然だが、小紫の脚力を生かすには、逆手の方が有利と踏んだ。

雷真に操られ、小紫は隙のない構えを決めた。イブシロンが感嘆の声をあげる。さすが剣を使うだけあって、流派が違っても、構えの意図がわかるらしい。

「歩法や太刀筋は追い追い詰め込むとして——基本はこれだ」

右足を踏み出すと同時に、右斜め下からコンパクトに斬り上げる。

もつとも小さな動きで、もつとも素早く攻撃できる、基本の攻撃方法だ。

雷真は二、三度繰り返した。小紫は必死な顔をして、されるがままになっている。まだ理解が追いついていない。

雷真はもう一本の棒を左手にぶら下げ、小紫に近づいていった。意図的に殺気を出す。斬り合うつもりだと察して、小紫があわてた。

「え？ え？ ちょっと待って、雷真！」

待たない。雷真は問答無用で斬りかかった。

小紫は常人離れした反射神経で、雷真の一撃を防いだ。不慣れな道具を使っているわりに、的確に真横から弾いて、太刀筋をそらす。

小紫の顔が歪む。腕が痺れたようだ。だが、筋はいい。

「ほら、斬ってこい」

棒を振って、攻撃を誘う。当然、小紫は躊躇した。

「だって……どうすればいいの？」

「甘えるな。強くなりたいんだろ？」

敢えて突き放す。小紫は一瞬、悲しそうな顔をした——が、眠っていた負けん気に火がついたらしく、眉がキリッとして引き締まった。

芝生を蹴って、攻撃してくる。

鋭いーやはり硝子しょうこが造った人形だ。人間をはるかに超えているー

今度は雷真が真横にさばく。いなされて体勢を崩す小紫。無理に踏ん張ると転ぶところだが、小紫は勢いに逆らわず、くるっと反転して、さらに向かってきた。

やはり筋がいい。本能的に、体の使い方を知っている。

何度か斬り結ぶうちに、雷真が押され始めた。身体能力は向こうが上で、雷真が使っているのは左手一本。おまけに攻撃しなければ、当然の展開だ。

「やっちまえですコムラサキー ド腐れ弟子をぶち殺すですうー」

「いや、殺すなよ!」

思わずツツコミを入れた瞬間、小紫が思い切りよく踏み込んできた。

反応が遅れる。不利な体勢で棒きれを弾く。雷真の胸が開いて、隙ひまが生じた。

——ここだ。

雷真は小紫に魔力を送り込んだ。小紫は弾かれた勢いのまま回転し、がら空きの雷真の胸に、棒きれを突き立て——

「これで、一本だ」

胸を強打する寸前で、びたりと止まる。

「どうだ? 習うより慣れろで、何となくわかったろ?」

「ず——ずるい、雷真!」

小紫は怒って詰め寄ってきた。

「今、私を強制支配したー今の一本は、私の実力じゃないよー」

「阿呆。俺から実力で一本取ろうなんざ、一年早い」

「……案外、短いね」

雷真は苦笑した。まあ、さすがに一年で抜かれたくはないが。

「今のはズルだが、打ち込みの感覚はわかったろ？」

「……うん」

「剣さばきってのは、八割ディフェンスの技術でできてる。おまえが一流の剣士になるには、まだまだ何年もかかるだろうが……」

言いたいことがわかったのか、小紫ははっとしたように自分の手を見た。

「そう、おまえにはディフェンスの必要がない。相手を崩すフェイントもいらぬ。確実に攻撃する技術さえあれば、十分に勝てる」

小紫の（八重霞）を使えば、相手に知覚されず、一方的に攻撃できる。

ただし、グリゼルダのように、隠形を看破できる知覚があれば、迎撃されてしまうかもしれない。

そうさせない術があるとすれば、それはひとつだ。

雷真はイブシロンを指差し、

「じゃあ、そいつに相手してもらって、小太刀の動きを叩き込め」

「か——勝手に決めるなですう！」

「頼むよ。おまえほどの達人が相手じゃないと、小紫の練習にならないだろ？」

「えへへーそこまで言われちゃ仕方ないですう♡」

嬉しそうに照れるイブシロン。雷真は心の中で両手を合わせた。

すまん、イブシロン。おまえのバカを利用して。

やる気まんまんのイブシロンに棒きれを渡し、小紫に指示を伝える。

「とにかく木刀で撃ち合え。正しい斬り方とかあんま考えなくていいぞ。おまえの場合、雑な太刀筋でも、腕力だけで肉をぶった切れるからな」

「うん、わかった——って、雷真は？」

「俺は勉強する」

「勉強!? 雷真が……!?」

「驚愕するな——俺だって学生だ！」

雷真は少し憤慨しつつ、中庭を後にした。

ひっそりとした廊下を歩き、あてがわれた部屋へ向かう。飾り気のない机に落ち着くと、ふところから巻物を取り出し、広げてみた。

出発前に硝子から渡された、〈八重葺〉の仕様書だ。

小紫の望みを叶えてやるには、付け焼き刃の小太刀などでは全然足りない。

それに、硝子しょう子がこれを渡したということは、学ぶ必要があるということだ。

先日、街で襲ってきた連中を思い出す。彼らが「よからぬ連中」だとすれば、おそらくまた襲ってくる。(八重やえ重かさね襲)を把握していなければ、命が危うい。

それから数時間、雷真らいしんは巻物と格闘した。

おそらく半分も理解できていないだろうが、驚くべき発見がいくつもあった。

(八重襲には、そんな使い方があったのか……！)

こんなことができるなら、対人戦では無敵じゃないか？

三時間があったと言う間に過ぎ、太陽が傾いてきた。そろそろ厨房ちゅうぼうに行つて、夕食の支度

をしなければ。雷真は巻物を再び巻いて、立ち上がった。

そのとき、ばーん、と扉が開いて、イブシロンが飛び込んできた。

「ド魔れ弟子ー ご主人さまがお呼びですうー」

あれからずっと打ち合っていたのか、散歩中の犬みたいに眼めがキラキラしている。

一方で、やり場のない怒りをこらえているようにも見えた。

イブシロンは雷真の顔を見ると、見る見る涙ぐんだ。

「うう……くやしいです……こんな男のために……呪のろわしいですうー」

わーん、と叫んでいなくなる。何と言うか、嵐あらしのようなやつだ。

「……何だ、あいつ？」

雷真は首を傾げ——嫌な予感を覚えつつ、グリゼルダの部屋に向かった。

3

黄昏に染まる線路を、八両編成の貨物列車が走っている。

機巧都市とシェフィールドを往復する便だ。行きは鉄鉱石を満載していたが、機巧都市ですべて吐き出し、今はほとんどのコンテナが空だった。

そのうちの一两、錆びの浮いた黒い車体に、十二人の男たちが乗り込んでいた。

座席がないので、壁にもたれて立っている。男たちはダークスーツに身を包み、量産型の自動人形を連れていた。

車両の後方、一番奥に、一人だけ自動人形を連れていない者がいた。

黒いフードをかぶっている。フードからのぞく髪は金髪で、顔立ちは端正。貴公子然としているが、眼光は鋭く、身にまとう気配はひどく剣呑だ。

ただ者ではない。周囲の人形使いたちも、明らかに男のことを恐れている。

私語もなく静まり返った車内に、とすん、と鈍い音が響いた。

一瞬、車内に緊張が走った。人形使いたちが魔力を蓄え、攻撃の準備をする。だが、彼

らが何かする前に、金髪の男が手で制した。

天井で足音がする。足音は車庫前方に向かい——無造作にドアが開いた。姿を見せたのは、黒ずくめの若者だった。

人形使いたちが一樣に立ちすくむ。闖入者の風貌に見覚えがある！

黒い髪、黒い瞳。整った容貌。身にまとうものは全身モノトーンの黒ずくめ。流線型のフォルムを揺く、蒼い装甲の自動人形を従えている。

「エドマンド殿下に、敬礼！」

誰かが叫ぶと、人形使いたちは一斉に敬礼をした。

「よせよ。せっかく機械兵から解放されたつてのに」

エドマンドは皮肉げに笑った。悠然とした足取りで彼らの中央を通り過ぎ、奥の貴公子に近づいていく。

「よう、ライコネン。兵は補充できたようだな？」

古くからの友人に話しかけるような、気安い口調だった。

ライコネンは答えない。エドマンドは笑い出した。

「おや、ご機嫌斜めかい？ 閣下はどうやら、この任務に乗り気じゃないご様子だ」

「……叛逆の王子が、なぜこのようなところに？」

「しばらく英国を離れることになったんでね。祖国を脱つ前に、親友の顔を見ておきたく

なったのさ」

「……戯れ言は好かない」

「おや、つれない」

エドマンドは肩をすくめた。

「まあ、実際のところは、ババア——じゃない、老害どもの使いなんだがね」

「蕃藪の方々への悪意を隠すつもりもない。あきれた男だ、貴方は」

吐き捨てるような言葉。軽筆をとがめるような響きがある。

ライコネンの蒼い瞳に、ふと、冷たい殺意のようなものが宿った。

「……グレンダン中将を戦死させたそうだな？」

「ああ、残念なことにね。惜しい男を亡くしたよ。俺は將軍が好きだった」

天を仰ぎ、大げさに嘆くエドマンド。

「どうしても部下に欲しくてね。だが、將軍はあの通りの堅物だ。言いなりにするには、

師団から切り離すしかないと踏んで、ああいう状況を作り出したんだが……愉快な小僧が

邪魔してくれてね——つと、そう言えば、將軍は君の師だったな？」

悪びれたふうもなく、エドマンドはライコネンに顔を寄せた。

「親友の君に忠告しよう。慢心するな、とね。あの將軍でさえやられちまう時代だ。世界は古い秩序を一掃しようとしているのさ」

「……師の技量など、俺はとつくに超えていた。今の貴方と同じ歳で」

「そうだろうとも。君は三期前の魔王、いと畏き（オ・ク・ラム・ノ・ン）の魔王だ」

その単語を聞いて、周囲の人形使いたちが身を固くした。

顔が強張る。改めてその名を聞けば、同じ人形使いとして畏怖を禁じ得ない。

「その魔王、おまけに軍の將軍さまが、小娘ひとり抱き込むために「お使い」をやらされるんだからな。王族の俺がアゴで使われたって、恥じることはない」

くくつと笑う。

「お互い、つらい立場だな。仲良くやろうぜ」

「……べらべらとよくしゃべる男だ」

「俺は口から生まれたんだよ。で、ババアどもの命令だが――」

エドマンドはふところに手を突っ込み、無造作に小ピンを取り出した。

丸フラスコのように、下部が丸く膨らんでいる。中にはエメラルド色にきらめく、透明な液体が入っていた。

「君にこれを授けよ、とのお達しだ」

「エリクサー？」

「そうとも。無限連鎖反応の美酒だよ」

「――」

「機巧じゃないから再利用できず、本家ほどの力もないが——こいつをひと口味わえば、君の炎はシェフィールド一帯を焼け野原にできる」

人形使いたちが息をのむ。エドマンドの言葉に誇張がないとすれば、それはもう魔術ではなく、科学者たちが夢想する（大量破壊兵器）に等しい。

「まさに（神酒）というわけさ。持っていけよ。そして、君は受け取るのが正しい。なぜなら、俺が正しいからさ」

エドマンドが小ピンを差し出す。ライコネンはすつと視線を外した。

「俺は貴方とは違う。そんなものを頼みにするほど、堕ちてはいない」

エドマンドは嘔き出した。腹を抱えて笑いながら、

「いいー、いいぜ、最高だー 君のそういうところが俺は好きだー」

ライコネンは顔を背けた。だが、エドマンドはそちらに顔を突き出し、

「相愛わらず、愛想のない野郎だよ。この俺——いずれ世界の王となる男にも媚びることを知らない。だが、君はそこが いい のさ。君の鼻っ柱をへし折って、力尽くで服従させるところを空想すると、俺は心底ぞくぞくする」

「……俗物め。叶わぬ夢を見ているがいい」

「そうしよう。役目は済んだことだし、これで失礼する——おっと、魔王くん」
車両から出て行こうとして、何かを思い出したように立ち止まる。

「（迷宮）のお姫さまは、君の旧友らしいね。いや、弟子と言うべきかな？」

しん、と空気が冷たくなった。

人形使いたちにわずかな動揺が広がる。どうやら、初耳だったらしい。

彼らの動揺を鎮めるべく、ライコネンは落ち着き払った声で応えた。

「……友ではない。学生の時分、家庭教師をしていただけだ」

「なら、情が移っていてもおかしくないか」

「……何が言いたい？」

「いやいや。ところで、魔王ワイズマンという人種も、弟子は可愛いものかい？」

「ごうっ、と魔力の炎が爆ぜた。」

青白い魔力がライコネンの肩から噴き出す。と同時に、彼の影が揺らめいた。

ライコネンの影から、何かが這い出してくる！

鮮やかな真紅。輪郭はおぼろげで、ゆらゆらと陽炎カゲカゲのように揺れている。

魔術師であれば、それが危険な存在だとすぐに理解できただろう。内部に膨大な魔力と、

そして熱を蓄えている。空気があぶられ、まぶしく白熱した。

ぎゃっ、と情けない悲鳴をあげ、近くの人形使いが飛び退いた。手の皮膚が赤く焼けて

いる。どうやら、熱にやられたらしい。

熱を感じていないのか、エドマンドは涼しい顔で笑った。

「おやおや。君の炎が、俺を殺したがっているのかな？」

「……貴方はもう王子ではない」

ライコネンは鷹のような眼でエドマンドを見据え、冷ややかに言った。

「貴方の代わりに死んでくれる者はいない。覚えておくがいいだろう」

「これは手厳しい。ああ、諫言を肝に銘じておく」

笑い飛ばす。最後まで楽しげに、エドマンドは車両を出て行った。自動人形イカロスに飛び乗り、走行中の列車から脱出する。

やがて列車は減速し、シェフィールドのひとつ手前、小さな町に到着した。

人形使いたちが気を引き締める。彼らはひと目を避けるように、次々に列車を降りた。統制の取れた動きで、音もなく暗がりへ消えていく。

最後に残ったライコネンが、突然、燃え上がる。

全身から発火した——いや、彼自身が炎と化したようだ。

炎はすぐに燃え尽きる。あとにはもう、髪の毛一本、残っていなかった。

4

グリゼルダの私室は、邸宅の最上階、三階にある。

見晴らしはいいが、そのぶん、魔術攻撃の標的になりがちだ。こんな場所を私室にするというのは、何とも神経が太い。

まだ中に入ったことはない。興味をそそられつつ、鉄の扉をノックする。

「は……入れ！」

くぐもった声。遠慮なく扉を押し開けると、鉄の匂いが鼻を突いた。

原因はすぐにわかる。狭い室内に、刀剣や甲冑が並べられていた。

どれも手入れが行き届き、表面は磨き込まれ、金属的光沢を放っている。怠惰なはずの部屋の主は、こういうことだけきちんとしているらしい。

そこは言わば玄関口で、部屋は奥へと続いていた。

奥は書庫のようになっていて、今度はカビくさい香りがした。

膨大な本の量に雷真は圧倒される。背の高い本棚に、ずらりと並んだ蔵書の数々。全部が全部、魔術書だ。ここは魔王の面目躍如といったところか。

「えーと……お師匠さま？ どこだ？」

「お、奥にこい。こっちだ！」

本棚に埋もれるようにして、扉のない出入口がある。声はそちらから聞こえた。入ってみると、そちらは部屋らしい部屋だった。

眺望が素晴らしい。小さな窓から暮れなずむ町が望めた。

領主には似つかわしくない、質素なテーブルセット。床には使い古されたじゅうたんが敷かれ、暖炉には家族の写真が飾られている。

グリゼルダは窓際にいた。安楽椅子の前に立ち、雷真をにらみつけている。

何を怒っているのか、グリゼルダはドレスを着て——ドレス？

思わず、二度見してしまう。グリゼルダが女物の服を着ている——

コルセットで胸を締め上げるデザイン。スカートはフリフリで、すごく短い。その短いスカートを両手で引っ張り、グリゼルダはふとももを隠そうとしていた。そうすると後ろ側が上がってしまつて大変なことになるのだが、気付いていない。

普段は束ねるだけの髪に、きっちり櫛が入れられている。ただし、顔の左半分を見せるつもりはないようで、前髪は長く垂らしたままだ。

うつすら化粧していて、普段より華やいで見える。頬が赤いのは頬紅のせいではなく、どうやら赤面しているらしい。

一瞬、別人かと思つたが、そんな格好でも帯剣しているので、やはり本人だ。

雷真はひどく落ち着かない気分になつた。

学生たちに「暴竜」とあだ名されるシャルも、少女のたしなみはわきまえている。男勝りの女教授キンバリーや、凶暴な秘書官アヴリルでさえ、見た目は「デキる女」といったふうで、やはり女性特有の色気をまとうていた。

そうした『女性らしさ』とは無縁で、無骨そのものだったグリゼルダが、恥じらいに頬を染めているのは、何と言うか、ベクトルのまったく違う破壊力だった。

雷真はガラにもなくドキドキして、思わず目をそらしてしまった。途端に、グリゼルダの機嫌が悪くなった。

「なぜ目をそらす？ 貴様、死にたいのか？」

「それは、その……恥ずかしいっつーか」

「なっ——!? やはりこれは恥ずべき格好だったのか！ 貴様、よくも見たな！ 眼球をえぐりとってやる！」

「あんたが見せたんだろ！ つか、そういう意味じゃない！」

「な、ならば、どういう意味だというのだ！」

「それは……」

「はっきり言え！ 死ぬぞ！」

「殺すなよ！ 要するに——照れたんだ。あんまり……その、綺麗だったんで」
言ってて恥ずかしい。雷真は逃げ出したくなった。

「で、では、その……」

グリゼルダは視線をさまよわせ、ぐずぐずとためらってから、

「少しは……女らしい、か？」

上目遣いで訊いた。雷真も彼女に釣られて赤面しつつ、正直に答えた。

「……ああ。見違えた。よく似合ってる」

ふらっとグリゼルダの膝から力が抜け、安楽椅子に倒れ込んだ。

「おい、どうした？ 大丈夫か？」

「いや、その……気が抜けた」

ふう……、と肺をからっぽにするようなため息をつく。

「ああ、安堵した……こんな恥をかかされて、似合わないなどと言われたら、死体を二つも捨てに行かねばならないところだった……」

「俺が恥をかかせたみたいに言うな。つか、二つって何だよ？」

「貴様と服屋のアリシアだ。私を着せ替え人形のように扱いおって」

フーン と怒り顔でそっぽを向く。いつもの調子を取り戻したようだ。

「でも、どうしたんだ急に。女物の服なんて、どういう心境の変化だ？」

「……貴様、死にたいのか？」じゃきつ。

「何でそこでキレるんだよー 剣をしまえー」

「貴様が私を馬鹿にして、女らしくないなどと言うから、ウエストン家の誇りにかけて、女らしいところを見せたのだー」

雷真は感心した。負けず嫌いもここまでくれば見上げたものだ。

「ふ……そうか、似合うか」

グリゼルダはすぐに機嫌を直し、スカートのすそをバタバタ振った。

「では、しばらくこの姿でいるとしよう。ひらひらして落ち着かんが、もう少し、不肖の弟子を眼福にあずからせてやる」

「まだ何も教えてもらってねーけどな」

グリゼルダは窓ガラスに自分の姿を映して、にこにこしている。思えば、この部屋には姿見の鏡も、化粧台も存在しない。グリゼルダが自分の美を味わうのは、これが初めてのこともかもしれない。

彼女は「偉大な先輩」だ。年齢はそう違わないが、能力的にははるかに遠い存在。だが、なぜだろう。まるで妹の相手をしているような、微笑ましい気分になる。などと和んでいると、いきなり刃が降ってきた。

「——つぶねーなー 何だいきなりー」

「貴様……今、私を上から見下ろしただろうか？」

「見下ろしてねえー 可愛いところもあるなー、と思っただけだー」

「そっ、それが見下ろしていると言うのだー」

グリゼルダはストラトキヤスターを振りかぶったが、途中で気が変わったらしく、

「ふん……まあ、そのくらいは許してやろう。私は度量の広い女だからなー」

「裏忍袋がボロきれみたい強度だけどなー」

「今日は気分がいい。どれ、夕餉の前に、少し稽古をつけてやるか」

「――本当かつ!?」

「ああ。ほら」

グリゼルダはすんなりうなずき、雷真に左手の指を向けた。

刹那、雷真の心臓に重い衝撃がきた。グリゼルダの指先から強烈な魔力がほとばしり、雷真の体内で暴れ回る。

息ができない。雷真はその場にくずおれ、喉をかきむしって苦しんだ。

目の前で、床がぐるぐる回転している。

この感覚には覚えがある。そう、溺れたときの苦しみだ。泳ぎに長けた雷真だが、過去に一度だけ、溺れたことがある。それも、ごく浅い沢で。

雷真の意識は、再び箱根の山中へと飛ぶ――

5

夜々の一撃を、雷真は本能だけでかわした。

立っていた場所にひび割れが生じる。

「本当に、夜々に勝てるつもりなんですか？」

箱根の山中、街道を外れた森の小道で、夜々はゆっくり振り向いた。

雷真は苦笑した。ポーカーフェイスを取り繕っても、冷や汗は止められない。夜々は全身に力をみなぎらせながら、底冷えのするような声で訊いた。

「勝敗は、どうつけますか？」

「そうだな……どっちかが『まいった』と言うまでだ」

「たとえ破壊されても、夜々は『まいった』なんて言いません」

「気が合うな。俺も死んだって言うつもりはない」

夜々が再び地を蹴った。一直線に跳び、銃弾のように雷真を狙う。雷真は跳躍してかわした——が、鉄拳は斜面に突き刺さり、地面を割った。

足場が崩れ、斜面をずり落ちる雷真。バランスを崩し、四つん這いになる。

「こんな地形を選ぶとは、愚かな人間です！」

夜々が襲ってくる。とっさに樹を盾にしたが、幹はたやすくへし折られた。

仕方なく、倒木もろとも斜面をくだり、下方に逃れる。だが、逃げ切れない。夜々が目の前に出現し、進路をふさいだ。樹を蹴って跳んできたのか。

なるほど、夜々ほどの運動能力があれば、森は足場に不自由しない。

（普通なら、な）

雷真はにやつと笑って、崖下^{がけもと}に身を投げた。

ぎよつとする夜々。だが、雷真は決して、自暴自棄になったわけではない。

きゅきゅつと甲高い音^{かんたかいおと}が響いて、雷真が崖下から飛び出してきた。

空中を飛翔^{ていしょう}している――

――違う！ 張り渡したロープで移動しているのだ。滑車を使った原始的なカラクリ。

子どもの遊具に、こんな仕掛けがあった。

ここ数日、雷真がどこで何をしていたのか、夜々にもようやくわかったようだ。同時に現金の使い道も悟る。滑車や――ひよつとしたら労働力の調達に使ったのだ。

「どうした？ たかが人間の足に追いつけないのか？」

枝に飛び移り、雷真が夜々を跳発した。

「つまらないことを――」

跳発に乗って夜々が跳ぶ。雷真はひょいと枝を飛び降り、落下速度を利用して、夜々の攻撃をかわした。夜々は枝を蹴って追撃する。そのときにはもう、雷真は次の滑車で、別方向へと飛び立っていた。

夜々がさらに迫いすがろうとした瞬間、横から丸太が飛んできた。

雷真が設置したトラップだ。お寺の鐘撞きよろしく、ごーんと吹っ飛ばされる夜々。空中ではふんばりが効かず、夜々は十メートルも吹っ飛んだ。

(モロに当たったか……すまん、夜々)

胸の痛みをおくびにも出さず、雷真は大声で笑った。

「そんなつまらない手に引つかかるとはな！ 雪月花ってのはそんなものか！」

「い……い……言いましたね……」

夜々の頭から湯気が出た。雷真の狙い通り、怒りに我を忘れている。

雷真は急いで逃げ出した。狙い通りとは言っても、危険度が増したことに変わりはない。滑車を使って低い方へ低い方へ移動、距離を稼ぐ。一方、夜々は幹を蹴り、樹から樹へ、ムササビのように跳ぶ。

夜々の脚力に耐え切れず、樹木は次々に倒れた。のみならず、夜々は岩だの巨木だのを投げてくる。

まさに環境破壊。箱根の山が見る見る地形を変えていく。

恐るべきは(金剛力)。七本用意したロープをたちまち渡りきってしまう。

鬼ごっこはせいぜい五分かそこらで、雷真は山の中腹より少し下、切り立った崖に追い詰められてしまった。

夜々は竹林を引き裂き、羅刹の表情で近づいてくる。夜々が一歩踏み出すたび、雷真の寿命が一年も縮むような気がした。

その夜々を、真横から何かが吹っ飛ばした。

最後のトラップ。竹で作ったバネ仕掛けが、夜々を横から打ったのだ。

もちろん夜々は傷も負わない。だが、斜面を這い上がってきた夜々は、ぜえはあと荒い息をついていた。完全にバテている。

「こ……こ……姑息……な人間……ですっ」

足運びがおぼつかない。夜々はよろめき、その場に尻もちをついてしまった。

——魔力切れた。

夜々は禁忌の秘術で生み出された人形——自前で魔力を供給し、自分の魔術回路を起動することができるとは言え、その魔力は無限ではない。

勝負あり。完全に雷真の作戦勝ちだ。

だが、雷真は勝ち名乗りをあげるでもなく、つぶやくように言った。

「なあ、もうやめにしようぜ」

夜々はきょとん、とした。

雷真はまっすぐ夜々を見つめ、真摯な気持ちで言った。

「おまえを力尽くで服従させて、言いなりにするってのは俺の性に合わない。できれば、おまえの方から、力を貸して欲しいんだ」

「……おめでたい人間です。もう……勝った気でいるんですか？」

夜々が強がる。雷真はそれには応えず、訴えるように言った。

「俺は確かに三流以下のド素人だが、これから腕を磨く。そして、おまえに相応しい人形使いになる。だから、俺の人形になってくれ」

願いを込めて、夜々の瞳をのぞき込む。

「俺の人形……?」

ふっと、夜々の唇に笑みが浮かんだ。

「お断りです！ 貴方なんか、夜々は使われたくありません」

熱意を拒絶され、雷真もむかつとした。貴方なんか、という言葉がカンに障る。それは嫌でも、兄や妹との違いを思い出させてくれる。

「なぜだ!? 俺は努力すると言ってるんだぞ!? それじゃ駄目なのかよ!? そんなに一流の人形使いがいいのか!?」

「そんなこと言ってるんじゃないやありません!」

「じゃあ何だ! はっきり言えよ!」

「人間に……夜々の気持ちなんてわかりません!」

「――!」

夜々は叫ぶと同時に、突っ込んできた。

がむしゃらにつかみかかってくる。(金剛力)の効果は失われていたが、夜々の言葉があまりに意外で、雷真の反応は遅れた。

回避が間に合わない。やむを得ず、夜々の勢いを利用して、後方へ投げた。腰で跳ね上げ、崖^{がき}つぶちの木に叩^{たた}きつける。

加減したつもりだったのに、木が折れた。

（枯れてやがった——!?）

あるいは腐れていたのか。夜々は折れた木と一緒に、空中に放^{はな}り出されてしまう。

崖は二十メートルもない。だが、〈金剛力〉を失った夜々には致命的な高さだ。

まずい、と思ったときにはもう、体が動いていた。

夜々の腕をつかみ、強引に引き戻す。

入れ替わるように、雷真の体が宙に浮く。

驚いたような夜々の眼^めが、一気に遠のく。

そうして、雷真は谷底に落ちていった。



Chapter 5

誇りと絆

1

とにかく、息が苦しい。

どうやら水中にいると気付いたときには、もがく力もなくなっていた。ここで、雷真の記憶はこま切れになる。覚えているのは断片だけだ。

「雷真……雷真」

誰のものかわからない叫び。

うろたえ、涙をこぼす夜々。

山道を駆け抜ける、誰かの背中――

次に目覚めたとき、雷真は布団の上にあった。

天井の木目に見覚えがある。箱根の旅籠ではなく、硝子の屋敷だ。

少しずつ、記憶が鮮明になってくる。そうだ、箱根の山中で夜々と戦って……。



岩場に叩きつけられ、沢を転がったところまでは覚えている。

ほんやり記憶をたどっていると、すうつと隙子が開き、夜々が入ってきた。

「――硝子――雷真が――硝子――」

夜々の声が傷に響いて、鈍く痛む。その痛みで、生きているという実感がわいてきた。おそろおそろ体を確認してみると、手足はきちんとそろっていた。

さらりと衣擦れの音をさせて、硝子が廊下を渡ってきた。

「しようなない子ね、坊や。お使いも満足にこなせないなんて」

「面目ない……」

「やんちゃが過ぎるわよ。あやうく背骨を失くすところ」

「……折る、じゃなくて？」

「とがった岩に引っ掛けたみたいね。こっそり肉を持っていかれたわ」

「げ……」

急激に血の気がひく。突然、背中が痛み出した。

「まあ、少し足しておいたけれど」

「足す……？ 足すって何だ……!?」

「私との賭けを覚えてる？ 坊やの命は私のもの。もう二度と、こんな無茶は許さないわ。わかったら、養生なさい」

「……ああ。そうする」

厳しい言葉と、微笑^{ひびく}みと、クチナシの香りを残して、硝子^{しやうし}は部屋を出て行った。しばらくして、夜々^{やや}が戻ってきた。

土鍋^{どなべ}をのせた、小さなお盆を持っている。

遠慮^{えんよ}がちに正座する。何も言わず、目も合わせない。口を開くのもつらかったが、仕方がないので、こちらから声をかけた。

「よう、おまえがここまで運んでくれたのか？」

「……いえ。夜々は、ふもとまで」

「そうか、悪いな。おまえのおかげで、命をつないだ」

利那^{りな}、夜々の眼から涙がこぼれ落ちた。雷真^{かみまこと}はあわてた。

「ちょ……どうしたのか？ 俺^{おれ}のせいかな？」

「……何でもありません。ほっとしただけです」

そのとき不意に、夜々の言葉が耳の奥に聴^{きこ}えた。

「人間に……夜々の気持ちなんてわかりません」

その通り、今の雷真^{かみまこと}には、夜々の気持ちがまるでわからない。

配慮^{はいよ}はしているつもりだった。雷真^{かみまこと}を嫌っていることも知っていた。だが、理解してはいなかった。理解しようとも、していなかった。

心のどこかで、彼女のことを「人形」だと――

人間に使われる存在だと、見下ろしていた。

だが、夜々には心がある。怒ったり、あせったり、ほっとしたりする。

泣きもし、怒りもし、誰かを嫌ったり、自分を誇ったりする。

そんな彼女が、人間とどう違う？

「悪かった」

「……え？」

「おまえを『俺の人形』なんて言ったこと、謝る。もちろん、山での取り引きも撤回だ。

その上で、おまえに頼む」

痛む体に鞭を打ち、身を起こす。雷真は布団の上にきちんと座って、頭を下げた。

「俺の相棒になってくれ」

「――相棒？」

「俺」ときがおまえの主になろうなんぞ、確かに十年早かった。だから、相棒だ。対等の

存在として、俺に力を貸して欲しい」

「……貴方の方が下では？」

「しばらくは、そうだ。だが、そのうち並ぶ。――約束する」

熱意を込めて、見つめる。

夜々は土鍋に視線を落とし、考え込むような仕草をした。

そして、そつとかぶりを振った。

「……それはできません。夜々は勝負に負けました。約束通り、夜々は貴方のお人形として、貴方のお役に立ちます」

夜々の凄厲の双眸には、侮蔑も悪意も見当たらない。

夜々は本気で、雷真の人形になると言ったようだ。

「……何だよ、それ。相棒になる、ってことじゃねえか」

「違います。夜々はあくまでお人形です」

「相棒だ。意地張るな」

「雷真こそー」

二人はにらみ合い——一瞬後、どちらからともなく、噴き出した。

「夜々はずっと貴方を護ります。どんなときでも。この命の続く限り」

「ああ。アテにしてるぜ、相棒」

「ただし、体は許しても心は許しません」

「体を許せとは言っていない——俺を何だと思ってる！」

夜々は抗議を無視して、お盆を膝の前に進めた。

「おかゆ、作ったんです。今回のことは夜々にも責任がありますし……。不本意ですけど、

夜々が手ずから食べさせてあげます。あーん、してください」

「ああ、悪いな」

夜々はおかゆをさじですくって、ふうふうと吹いてから、雷真の口元へ運ぶ。

雷真は言われた通りに、口を開け、食べさせてもらった。

「おいしいですか？」

「ああ」

「よかった」

ふわつと微笑む。それは初めて見る、夜々の優しい笑顔だった。

ふと、怖い考えに思い至り、雷真はこわごわ訊いた。

「……毒とか、入ってないよな？」

「ひっ……ひどいですー 夜々が心を込めて作ったのにー」

「わ、悪いー だが、俺のせいじゃないだろ？ おまえの日頃の行いが悪いんだー」

「雷真は馬鹿ですー やっぱり……やっぱり人間なんて……っ」

「ちょ……待てよ？ 俺はまだ怪我が……やめろおおおおー」

どたんどたと屋敷が揺れて、りーん、と涼やかに風鈴が鳴った。

その光景を、遠くから盗み見ている者がいた。

庭園を挟んで反対側。いろりが険しい顔をして、柱にへばりついている。

そのすぐ後ろでは、水桶に素足を入れて、硝子が縁側に寝そべっていた。怠惰な猫を思わせる、だらけきった姿勢だ。

「主、夜々はどうしたのです？ 急にあんな、甲斐甲斐しく世話など焼いて」

「あら、やきもち？ おまえは夜々が大好きだものね」

「ちぢ違いますー わわ私はただ疑問に思っただけでー」

「どうやら、荒療治が功を奏したみたいね」

ふふつと笑って、硝子はうつ伏せになった。煙草入れをたぐり寄せ、寝たまま煙管に火をつける。いろりは首をひねり、

「荒療治、ですか？ では、主が何か細工を？」

「私はきつかけを与えただけ。坊やが自分で切り開いた道よ」

「その代償が、あの大怪我というわけですか」

「ひどく不器用な子ね。でも、ひよつとすると、あの坊やは物事の勘所——急所を心得ているのかもしれないわ」

「……急所、ですか？」

「あの子なら」

ふつと目を細め、はるか遠くの空に目をやる。



「花柳商が長らく追ひ求めたものを、この世に顕現させるかもしれない」

いろりは怪訝そうに眉を寄せた。主の言葉が理解できない。だが、正直なところ、今はそれどころではない。いろりは再び険しい顔をして、雷真の監視に戻った。

硝子は微笑み、煙管を吸い、吐いた。

今年最初の蟬の声が、紫煙の上から降ってくる。

2

びくんと体が跳ねて、雷真は覚醒した。

酸素を求めて、激しく咳き込む。

息を吹き返した、というやつだ。直前まで、本当に呼吸が止まっていた。

グリゼルダは椅子の上で足を組み、本を読んでいた。ひどくきわどいアングルなのだが、彼女は気にしたふうもない。

「意識が戻ったか。死体をどこに捨てたものか、思案していたところだ」

「捨て……るな……外道……」

「冗談だ。貴様はその程度で死ぬタマでもあるまい？」

ふっと口元をゆるめる。認めているということか。雷真は洗面になった。夜会を制した

大先輩に、そんな言い方をされては、文句を言う気も失せてしまう。

呼吸が落ち着いてくる。雷真はようやく起き上がり、ひたいの汗をぬぐった。

「また気絶したのか、俺は。今のは何だ、お師匠さま？」

「わからなかったのか？」

「……アリアドネの糸？」

そうか——町で人形使いを気絶に追い込んだのは、この技だ。

だが、どうやった？ 魔力を相手に叩き込んで、どうして窒息に追い込める？

「私がなぜ（迷宮）の魔王と呼ばれているか、わかるか？」

「……性格がねじくれてるから？」

「つまり死にたいのか」じゃきつ。

「本気にするな——大人だろ——」

叫んだ瞬間、するつと頭の中で回路がつながった。

「アリアドネ——そうか、クノッサスの迷宮……」

詳細はギリシャ神話に詳しい。勇士テーセウスがミノタウロスを退治する際、迷宮から安全に脱出できるよう、秘策を授けた娘がいた。

彼女の名がアリアドネ。糸玉をほどきながら進み、帰りは糸をたどって戻る——彼女が授けたその知恵こそ（アリアドネの糸）だ。今では、困難を解決する妙案を言う。

「アリアドネの糸を使うから、（迷宮）の魔王……？」

そんな単純な話だろうか、と疑問に思った瞬間、雷真の体に異変が生じた。

「——動けねえ！」

手足が石化したように動かない。まるで金縛りにあつたようだ。

呪縛か。この手のテクニクは日本にもある。高位の法力僧が好んで使う。念動の応用で、相手の自由を奪う技だ。だが——

やはり、違う。これは外側から押さえつけられているのではなく——

（内側から操作されてる……!?）

「私は迷宮を支配する。人体という迷路をも。従って、こんなこともできる」

次の瞬間、喉の奥がだるくなり、呼吸が止まった。

息ができない——吸えない——

先ほどと同じだ。また気絶する——前に、ずっと苦しみが引いた。

体の自由が戻る。雷真は咬き込みながら、恨みがましい気分でグリゼルダをにらんだ。

一方のグリゼルダはキュンとした表情で、

「いい顔だな……♡」

「黙れ変態——俺に何の恨みがある——」

「二度も味わったのだ。私が何をしたのか、わかっただろうか？」

真剣な調子で問われ、雷真は怒りを引つ込め、考え込んだ。

グリゼルダの〈糸〉は途方もない出力だ。だが、念動ではない。外側から首をつぶされた感じもなかった。つまり……。

「内側——そうか、魔力循環系——」

「そう、〈糸〉を体内に送り込み、魔力の流れを乱してやったんだ」

魔力循環系は、清国しんごくで言うところの〈気〉の流れに相当する。

魔力とは単なる魔術の燃料ではない。人体の生命活動そのものだ。洋の東西を問わず、聖職者は祈りによってこれを磨く。インドの行者は呼吸法によってこれを高める。雷真が剣術道場で習った〈氣息きそく〉というのもこれと同じだ。

人間はほかの動物よりもはるかに魔力に長けている。魔術師は特に魔力の流れが強い。魔力は体になじみ、既に生命活動と不可分のものとなっている。その循環を阻害し、操作できれば、相手の生命活動を危うくできる……というわけか。

理屈を理解した途端、雷真は改めて、グリゼルダに畏怖いふを覚えた。

理屈は簡単だが、実践は簡単ではない——

魔力の流れは血管よりも細く、それこそ迷宮のように入り組んでいる——という。その流れを感知し、侵入し、意図的に乱すなど、普通の魔術師には不可能だ。

正確な人体の知識と、鋭敏な感覚と、繊細なコントロールが必要になる。

ぞつとする——と同時に、大きな疑問が浮かんだ。

「確かにすごい技だが、これがどうしたってんだ？」

「これを毎日、貴様にかけてやろうと思う」

「なぜだー やめろー」

「貴様、座学は苦手だろう？ バカ面なだけに」

「バカ面は関係ねえー 確かに座学は苦手だが！」

「成績の大部分を実技で稼ぐタイプだ。違うか？」

「……その通りデス」

「貴様のような奴には口で説いても時間の無駄だ。だから、体で教えてやる。誰がご主人さまか——じゃない、痛みの快楽を——でもなく、（糸）の本質を」

「二回も間違ったぞ？ あんた、実は楽しんでるだけじゃ——うぐっ！」

再び（糸）が襲ってきて、雷真はまたもや床に転がった。

3

それから、さらに一週間が過ぎた。グリゼルダが「女装」を始めたあの夜を境に、雷真の無賃労働には、過酷な「いびり」の要素も加わっていた。

料理を運んでいるときや、シーツを物干しに広げる瞬間など、一番嫌なタイミングで、例の窒息現象が襲ってくる。

落としたら面倒なことになるので、雷真は必死に耐える。グリゼルダの気が済むまで、同じ姿勢で窒息の苦しみをやり過ぐすのだ。

慣れとは恐ろしいもので、三日を過ぎたあたりから、息が詰まった状態でも、そこそこ作業をこなせるようになってきた。

ただし、疲労は確実に蓄積している。その日、小紫と夕食の後片付けをしているとき、雷真は何度も生あくびを噛み殺した。

「どーしたの、雷真。眠そうだね？」

エプロン姿で皿を磨いていた小紫が、心配そうに近づいてくる。

「ああ、何か……頭がボーっとする……」

「脳細胞がいっぱい死んじやつたんじゃない？ 酸欠で」

「怖い想像させんなよ……」

「ただでさえ脳が弱ってるのにねー」

「弱ってるとか言うなー おまえまでー」

小紫はキュキュッと磨き粉を鳴らしながら、ためらいがちに訊いた。

「ねえ、あんなゴーモンみたいな修行、続けるの？」

「もちろんだ」

魔王フィースマンがつけてくれる修行だ。放り出すのはもつたいない。

「ほんとに？　グリゼルダさんは悪い人じゃないと思うけど……雷真ライジンにアレをするとき、すごく輝いているっていうか、コーフンしてるんだよ」

「天下の魔王フィースマンさまがやることだ。ただの趣味ってことはないさ。それに、ずいぶん慣れたきたぜ。膨活量が増えたかな？」

磨き粉の音が止まる。小紫コパープルは何か言いたそうに、皿の光沢を見つめていた。

「心配するなって。いくらお師匠さまがサディストの変態でも、弟子に無意味なイジメを加えて楽しんでる——可能性はあるが——うぐっ!?」

「ずいぶん楽しい話をしているな、貴様」

今にもプチ切れそうな顔で、グリゼルダが台所の入り口に立っていた。

雷真は逆らわず、てきばきと皿磨きをこなした。息が詰まってるとは思えないほど手際がいい。おー、と小紫が手を叩く。だが、三分もやっていると、さすがに苦しくなってくる。雷真は皿を置き、苦しみながら、グリゼルダに手を合わせた。

「ああ……実にいい表情だ……!」

キラキラとグリゼルダの眼が輝く。

結局、グリゼルダが術を解いてくれたのは、さらに三分も過ぎてからだった。

「あんた……やっぱり楽しんでるだろ……」

「そ、そんなことはない……ぞ?」

「そっば向くなー わかりやすいなー」

「く……悔しいですう…… わたくしもいじめて欲しいですう……」

いつの間に現れたのか、扉の陰でイブシロンがハンカチを嚙んでいた。

雷真に呪わしげな視線を浴びせてくる。雷真は気付かないふりをして、

「で、何の用だよ。もう今日の仕事は終わりだろ?」

「台所が済んだら、私の部屋にきてくれ」

「部屋へ?」

グリゼルダはあわてて胸を隠した。

「おっ——おかしな意味ではない! 不埒な想像をするな!」

「何の用かと思っただけだ! 本格的に窒息させる気じゃねーよな?」

「安心しろ。私も夜はやりたくない。……翌日に響くからな」

あ、と思った。

そう、グリゼルダにとっても、(糸)を連発するのは負担のはずだ。

最近、目に見えるほどの血は使っていない。だが、もちろん消耗している。嫌がらせのほすがない。疑った自分を恥じつつ、雷真はうなずいた。

「あ、それなら雷真、もう行つていいよ。お屋は私が磨いておくから」

そう言つて、小紫が尻をちよんとぶつけてきた。

「若い二人の邪魔しちや悪いからねー」

「そういうんじゃないからな!?　つか絶対、夜々にそんな言い方するなよ!?」

「貸しだねー」

嫌な貸しだ。真夏だというのに、真冬のように肌寒い。

「ああ言つてゐるのだ、ここは花の乙女に任せろ」

グリゼルダにうながされ、雷真は台所を出た。

背中にイブシロンの殺気を感じながら、グリゼルダの部屋に向かう。

テーブルにはチェス盤が置いてあり、既に白黒二色の駒が並べられていた。

「用件はこれだ。久しぶりに相手が欲しくてな」

「西洋将棋か……。やつたことないぜ?」

「案ずるな。教えてやる」

「なら、そいつが相手でもいいんじゃないか?」

イブシロンはグリゼルダの腰にしがみつき、牙をむいて、雷真を威嚇した。何と言うか、仔犬みたいなやつだ。

グリゼルダはイブシロンの頭を撫でてやりながら、

「何度か仕込もうとしたのだがな。どうしても駒の働きを覚えられんのだ」

「ああ、そう……それはすごいな」

「えへへーそれほどでもないですう」

簡単に駒の動きだけ教えられ、すぐ実戦に入る。

あれこれ考えながら指してみたが、最初の一局はほとんど手も足も出なかった。

「貴様は駒を捨てすぎる。非情な将だな」

グリゼルダに笑われた。武闘派の彼女に言われると、無性に悔しい。

だが、グリゼルダの指摘はもっともだった。将棋の感覚で駒を捨てにいくと、すぐに戦力が足りなくなる。チェスと将棋では駒の配置も役割も違う。序盤の手順が全然わからず、戦端が開かれる前に、布陣でリードを許してしまうのだ。

二局目の前に、序盤の定跡をひとつふたつ、教えてもらった。

イブシロンは床に座り込み、グリゼルダの膝にもたれて寝入っている。その髪を左手で撫でながら、グリゼルダはゆっくりと駒を運ぶ。

しばらくのあいだ、駒を置く音だけが室内に響いていた。

戦いが終盤に差しかかる頃、グリゼルダがぼつりと口を開いた。

「私のいびりにも、ずいぶん長時間、耐えられるようになったな」

「いびりって自覚してんじゃねーか」

グリゼルダは指を立て、「静かに」というジェスチャーをした。イブシロンを起こさないように、という配慮だろう。意外な優しさに驚き、雷真も声を低くした。

「まあ、あんたが仕掛けてくるタイミングも読めてきたしな」

グリゼルダの唇がかすかに曲線を描く。……笑われた？

「貴様が狙っているのは、『マグナス』とかいう男か？」

いきなり急所を突かれ、さしもの雷真も言葉に詰まった。

「……なぜそれを？」

「私は魔王だぞ。ツテくらいある。貴様が偽学生でないかどうか調べた——ああ、気にするな。貴様が日本軍の後援を受けていることも知っている」

「なら、何で追い出さない？ あんたの秘術は日本軍だって欲しがるはずだ」

「そういう命令を受けたのか？」

「……いや。あんたの秘術を盗め、なんて命令は受けてない」

「ならば、いい」

「信じるのか、俺を？ どの馬の骨とも知れない東洋人だぜ？」

グリゼルダは盤上の駒を運びつつ、しつとりとした声で言った。

「稽古をつけてやる気になったのは、貴様がしてきたことを聞いたからだ」

「——ますますわかんねえな。はっきり言って、悪行だったろ、全部」

力尽くで夜会の参加資格を奪おうとしたり、民間の自動人形オートマトン工房に押し込んだり、好き勝手に暴れてきた。キンバリーの後援がなければ、器物損壊だの傷害行為だの成績不振だったので、とつくに放校されている。

「……今は、その話はいいい。それより、マグナスの話だ。マグナスの才を仮に百とすれば、貴様はせいぜい二、三十といったところだろう」

かつん、と硬い音を立てて、グリゼルダが駒を倒した。

無意識に握りしめそうになるこぶしをほどき、雷真は駒に手を伸ばす。

「俺もまんざら捨てたもんじゃないな。百ほど上乗せすれば、勝てる計算だ」

「いや、私が言っているのは器の話だ。修練は貴様の器に水を満たす。幸い、貴様の器はまだまだからっぽだ。いくらでも水を入れる余地はある。だが——」

「器の大きさを変えることはできない……?」

「そうだ。こればかりはどうにもならん。天分だ」

器。天分。天賦の才——どれも嫌いな言葉だった。

おし黙る雷真を心配したのか、グリゼルダは珍しく声の調子をやわらげて、

「悲観することはないぞ。この私に迫るほどもある。魔王ワイルドマンも夢物語ではないだろう。マグナスさえいなければな」

「俺が……あんたに迫るほど……?」

「か、勘違いするな！ 貴様の生まれ持った資質、（糸）の存在を計算に入れての話だ。それがなければ、貴様など私の足もとにも及ばん！」

「あ、いや、そこも驚いたが——マグナスつてのは、そんな化け物なのか？」

このグリゼルダよりも、三倍近いポテンシャルがあると？

「奴（やつ）にまつわるエピソードがすべて真実なら、そうなる。——ときに、あいつも（糸）を使うというのは本当か？」

「……ああ。この目で見た」

グリゼルダの視線が鋭くなる。何か、察した様子だ。

「奴は六体もの自動人形（オートマトン）を同時に使役する。個々の戦闘能力が通常の自動人形十体ぶん（オートマトン）に相当するというから、（糸）を使うのは事実だろう」

ことり、と駒（こま）を倒す。転がり落ちるビシヨップを指でつかみ、もてあそぶ。

「学業は優秀そのものの、広範な魔術知識を持ち、古今の秘術も貪欲（どんよく）に学んでいる。おまけに人形作りに関してもエキスパート。こと戦いにおいては、私は誰（だれ）にも劣らんと自負しているが……マグナスの器は、確実に私を上回っている」

謙虚な分析だ。グリゼルダの意外な一面を見た気がした。

「秘術か機巧で実力を底上げしているかもしれん。奴の力がそうした（チート）なら、術を破ればいいだけだ。しかし——」

おまえは空が飛べるか、と訊くような調子で、たずねる。

「夜会でぶつかる前に、奴の正体を見極められるか？」

それは無理だ。

雷真がマグナスを見極められるのは、最終戦の「九九番目の夜」以降。仮にマグナスが裏技を使っていたとしても、一度の戦いで暴けるものでもない。

ふと、グリゼルダが「むう……」とうなった。

腕組みをして、盤面に顔を寄せている。マグナスのことを考えているのかと思ったが、違った。グリゼルダはチェス盤を示し、忌ま忌ましげに言った。

「おい、貴様。チェスは本当に初めてなんだろうな？ 定跡を教えた途端、いきなり形になった。恐ろしく筋がいい」

「ああ……チェスは初めてだが、似たような遊びはよくやった。日本にも将棋って遊びがあつてさ、毎日、師匠の相手をさせられたんだ。要は持ち駒なしで詰めればいいんだろ。

詰め将棋は得意な方だ」

「何だどつ？ それを早く言え卑怯者！」

「いや、だが、チェスと将棋じゃずいぶん違うぞ？」

「黙れ卑劣漢……私の弱いところばかり攻めて……蹂躪して……嫌らしい！」

「妙な言い方するな！」

「く……初心者にここまで追い詰められるとは——な」

グリゼルダは自分のナイトをつかみ、雷真らいしんのクイーンを倒した。

「ふ……だが、所詮は素人しょじんだな。女王を捨てにくるとは」

「あ、いいのか？ それ取ったら、詰むぞ？」

「何だと!?」

ナイトが動いたおかげで、キングの前が薄くなる。雷真はルークを走らせ、あらかじめキングの退路を封鎖した。

グリゼルダの陣は密集していて、キングが逃げるスペースがない。今さらナイトを戻したところで、雷真側のナイトが防げない。これで「詰めろ」の状態だ。次の手番で雷真を詰ませなければ、グリゼルダのキングが死ぬ。

グリゼルダは盤面をにらみ、詰ませる手順を必死に探した。むきになっているところが可愛らしいと思ったが、言ったら多分、殺される。

「……ちつ、私の負けだー 女王を捨て駒こまにするとは、騎士の風上にも置けん奴やつー」

「俺おれは非情な将でね。目的のためなら、女王だって平気で捨てるよ」

先ほど言われたことを言い返す。グリゼルダは悔しげに頬ほほを染めた。

それから、ふっと柔らかな笑みを浮かべ、盤上を示した。

「見る。私の方が多くの駒を持っていた。だが、詰められたのは私の方だ。駒が多ければ

有利だが、駒の多い方が常に勝つわけではない」

荒れ野に落ちた雨のように、その言葉は雷真の心に染み込んだ。

自動人形オートマタが多い方。魔術知識の多い方。そして、器に恵まれた方。

いずれも兄だ。すべてにおいて、兄は雷真を上回っている。

だからと言って――

「あんだ、まさか、それを教えるために……？」

「違う。本気でやって負けたのだ。もう出てけー」

ぶくー、と膨れて、雷真を追い払う。

謙虚なところもあるが、やはり魔王フィクサーだ。基本は負けず嫌いらしい。

「……参考になった。ありがとよ、お師匠さま」

心から礼を言って、雷真は部屋を後にした。

翌日、朝もやが晴れる前に、雷真は起床した。

顔を洗って着替えを済ませ、朝の掃除に出発する。

まずは門のあたりを掃こうかと、前庭に出たところで、グリゼルダを発見した。

堅固な城門の真下、郵便受けの前に、ひとりで突っ立っている。

横顔は険しい。手には便せんを持っている。

「何だ、お師匠さま。今朝はまた、えらく早いな」

雷真が声をかけても、グリゼルダは振り返らず、じっと手紙をにらんでいた。張り詰めた表情。顔色があまりよくない。

「どうかしたのか？ 手紙？」

「……今日一日、眠を出す。今すぐ花の乙女を起こして、町で遊んでこい」

「はあ？ 何だよ、急に。こんな時間に出かけろって言われても——」

「いいから、行け！ 口答えするな！」

グリゼルダは殺氣立っている。原因を探して、雷真はあたりを見回した。小高い丘から一望できるのは、ひなびた集落。そして——

ダークスーツの男たちが、自動人形を引き連れて、丘のふもとに立っていた。

4

強硬なグリゼルダに命じられ、雷真は小衆とともに丘を降りた。

言いつけ通り、坂道をくだる。それはあいにく一本道で、ふもとは、ダークスーツの男たちが待ち受けていた。

その中に、ひと際目立つ金髪の貴公子がいた。抜き身の真剣のような迫力は隠しようも

ない。初日、グリゼルダと互角の戦いを繰り広げた、あの男だ。

殺氣に気付かないふりをして、雷真は彼らの前を通り過ぎた。

町の中に入ったところで、とととと小走りに、小紫が体を寄せてきた。

「絶対、何かが起こるって感じだよ。こんなときに、町で遊んでいいの？」

「いいわけないだろ」

雷真はすたすたと路地に入り込み、物陰に隠れた。素早く魔力を練って、小紫に送り込む。小紫は雷真の意図を理解し、魔術回路（八重電）を起動した。

魔術はただちに効果を示し、雷真と小紫の姿を覆い隠した。二人にはお互いの姿が見えているが、第三者にはもう、二人の姿を見ることはできない。

雷真は慎重な足取りで路地を出て、きた道を引き返した。

町外れの粗末な門に隠れ、遠くの黒服たちに目をこらす。

こちらに気付いた様子はない。男たちは無言で待機している。数は六人。自動人形が同数。よく見ると、丘を取り囲むように、さらに五人が散開している。

「どうするの、雷真？」

「そうだな、まずは警察署に――」

言葉の途中で、それが叶わないことを知る。

後方、町の中心部付近に複数の人影が見えた。黒服の男と警察官。彼らが握手するのを

見て、雷真の頭に警報が鳴り響いた。

（連中、警察を抱き込みやがった……？）

どうやったのかは知らないが、警察は既に連中の側と考えた方がいい。

一体、連中は何者なのか。グリゼルダはもう孤立無援だ。

雷真は息を潜め、近付いてくる黒服をやり過ごした。黒服が仲間たちに合流する。それから間もなく、彼らは行動を開始した。一列縦隊で丘をのぼっていく。

このときになって、雷真も動いた。

小紫を招き寄せ、意識を集中。魔力を高めて、流し込む。

それまでとは質の違う魔力に、小紫は驚き、それから恍惚とした。

「はあん……すごい……こんなの初めて♡」

「妙な声を出すな！ まあ、夜々がいけないからいいけどよ」

雷真の魔力を受け、小紫の体が青白く光った。表面にうすい膜が張っている。雷真は指先に魔力を集め、そっと膜に触れてみた。

魔力に反応し、膜は見た目の形を変えた。雷真の指は小紫の腕に触れた——が、手応えはなく、魔力もまったく感じなかった。

（魔力を完全に透過してる。これなら、（アクティブ）センサーとやらも……）

コウモリの超音波知覚のように、魔力の反射で周囲を探る——それが（アクティブ）な

知覚だ。今にして思えば、グリゼルダが小紫を投げ飛ばせたのも、おそらくは（糸）によるアクティブセンサーの賜物（たまもの）だろう。

だが、今の小紫は、アクティブな知覚でもとらえることはできない。

これが（八重霞）の本来の力。完全なる隠形だ。

「すごいよ、雷真。いつの間に、こんなに上手くなったの？」

「言っただろ。俺は勉強するってさ」

「あ……じゃあ雷真、ずっと私の回路を研究してたの？」

「今は、おまえが俺の相棒だからな」

小紫は顔を上気させ、こくん、と踏（ふみ）しそうにうなずいた。

「よし、じゃあまずは偵察だ。俺はここで増援に備える。おまえは——」

「お城の様子を見てくればいいんだね？」

「危なくなったら戻ってこいよ」

「わかってるー 任せてー」

小紫は元気よく手を振って、すぐさま丘を登って行った。

それから二時間ほど、雷真はじっと待ち続けた。

ざわめく心を必死に抑えつけ、辛抱強く、小紫の帰りを待つ。

フレイがやっていたように、コントロール中の自動人形（オートマトン）と感覚を共有できればいいのだ

が。夜々ともできないことを、小紫とはとてもできない。

さらに時間が過ぎる。太陽はもう、かなり高い。

突然、誰かの手で、心臓をわしづかみにされたような気がした。

「雷真——っ！」

虫の知らせは現実だった。真つ青な顔で、小紫が丘を駆け降りてくる。

敵に発見される危険を覚悟で、雷真は全力疾走し、丘を駆け上がった。

「どうした？ 何があった？」

「いいから早く—— イブシロンちゃんが殺されちゃうよ！」

小紫は雷真の腕にしがみつки、ぐいぐいと引っ張った。

迷っている暇はない。雷真と小紫は正面の城門から敷地に飛び込んだ。

城門には見張りらしき黒服がいたが、気にせず真横を通過する。

小紫が雷真の手を引き、駆け足で邸内に入る。廊下を駆け抜け、さらに奥へ。黒服たちを素通りしながら、雷真は彼らの数と配置を頭に叩き込んだ。

やがて、小紫は広間に突っ込んだ。かつては礼拝堂だった場所だ。天井が高く、宗教画のステンドグラスが壁に残っている。

黒服が二人、入り口のわきに控えている。奥には立ち尽くすグリゼルダ。その前に銀剣を構えたイブシロン。そして——

部屋の中央に、あの金髪がいた。

獣が彼我的強弱を悟るように、無条件で恐怖を覚える。

雷真は怯える自分を叱咤した。顔を冷やせ。まずは敵を見極めろ。

(……自動人形を連れていない?)

突然、金髪の姿が炎に包まれた。

炎は一瞬で消え失せ、別の地点——イブシロンの眼前で燃え上がる。

炎はすぐさま金髪の男へと変貌した。……察するに、炎を使った瞬間移動だ。

金髪がイブシロンの首をつかみ上げ、宙吊りにした。

「――」

思わず、といったふうに、グリゼルダの手が剣に伸びる。

だが、自制した。グリゼルダは左手で右手を押さえ込み、顔を背けた。

「イブシロンちゃん――」

飛び出そうとする小紫を、雷真は手で制す。

状況がわからない。グリゼルダが抵抗しない理由も気になる。

何より、あの男は危険だ。

こちらの存在はまだ気付かれていない。雷真は逃る心を鎮め、状況を探った。

金髪の男は、鷹の目を思わせる双眸で、グリゼルダを一瞥した。

「ミス・ウェストン。これが最後の自動人形か？」

「……そうだ。この邸にはもう、ほかに自動人形はない」

「俺がこれを破壊しても、それは職務の執行だ。理屈はわかるな？」

「……わかる」

グリゼルダは苦しげに顔をゆがめる。彼女のそんな表情は、初めて見た。

「だが、貴女には別の選択肢もある。結論を聞こう、ミス・ウェストン？」

「……私は」

「そんな必要は……ないです……ご主人さま……」

喉をつぶされながら、イブシロンは気丈に言った。

「わたくしは……ご主人さまの……邪魔には、なりたく……ないですよ」

グリゼルダの顔に痛みがにじむ。グリゼルダは顔を伏せ、うなだれた。

長い遠慮。呼吸が乱れ、結い上げた髪が何度も上下する。

やがて、振りしほるように、グリゼルダはつぶやいた。

「……すまん、イブシロン」

それが答えだった。金髪は失望したように息を吐き、

「では、この人形は処分す——」

最後まで言わせない。

雷真は一足飛びに間合いを詰め、男の腕を蹴り飛ばした。当たった感じはしなかった。命中の瞬間、男の腕は火炎となり、気体のようになって、蹴りをすり抜けた。

おかげでイブシロンの拘束が解け、どたと床に落ちる。

雷真の脚が一瞬で燃え上がる。魔術の炎だ。雷真は床を転がって炎を消した。火傷の痛みと魔術の干渉で、せつかくの（八重霞）が解けてしまう。

「貴様！ このバカ弟子！ なぜ戻ってきたー」

雷真を認識して、グリゼルダの声が高くなった。

黒服二人が自動人形を構えさせた——が、金髪の男が手を挙げ、やめさせる。

男と目が合った瞬間、雷真は全身起毛立った。

（こいつ……化け物……っ！）

マグナスとも、学院長も違う。男の魔力は底なしに冷たい。

怯む自分を心の中でどやしつけ、雷真は魂を奮い立たせた。

「……悪いな。あんたが誰だか知らねーが、そいつは俺のトモダチなんだ」

「誰がトモダチかつ、ですう……ド腐れ弟子ー」

けほけほっと吹き込みながら、イブシロンは憎まれ口を叩いた。

金髪の男は雷真から視線を外し、グリゼルダに目を向けた。

「……ミス・ウェストン？」

「待つてくれ、ライコネン殿——このバカ面は何の関係もない。邸に寄宿しているだけだ。それに、こいつに何かあれば、貴方にも不都合があるだろう？」

「学生がひとり行方不明になつても、三面記事の扱いだ」

真冬の月のような、訝え訝えとした眼光がグリゼルダを射貫く。

「わかるだろう？ 貴女は賢明なる魔王だ」

「……わかつている」

グリゼルダは雷真の前に出て、背中で背後に押しやった。

「下がれ、バカ弟子。すみでじつとしていろ」

「おい、何を勝手なこと言つてんだ？ 俺は俺のやりたいようにやる——」

グリゼルダを押しのかよとした途端、体が動かなくなった。

「お師匠……さま……!?」

グリゼルダの人差し指が雷真の首筋に触れていた。

直に（糸）を流し込まれ、雷真の体はたやすく制御を失う。

その間に、金髪の方——ライコネンか——は雷真の前を素通りして、イブシロンに近付いていく。イブシロンはへたり込んだままだ。

ずっと黙っていた小紫が、今にも泣きそうな顔で叫んだ。

「雷真― どうしようっ？」

雷真は迷った。小紫の存在はまだ誰にも気付かれていない。だが、小紫が仕掛けるのは無謀だ。何より、指示を出したくても、雷真は指一本動かさない―

小紫は覚悟を決めたようだ。こきゅ、と喉を鳴らして、

「私が……私がやる―」

「だめですよ、コムラサキ」

小紫の無謀をとがめたのは、雷真でもグリゼルダでもなく、イブシロンだった。

「いるのはわかってるですよ。でも、何もしないでくださいです」

見えているはずがないのに、小紫に呼びかけている―

イブシロンはふらふらと立ち上がり、顔を上げた。

訝るライコネンの目の前で、にこつと笑顔を見せる。

「ありがとうございますよ、コムラサキ。でも、お別れです」

イブシロンは両手を広げ、聴することなく相手をにらみ、昂然と言い放った。

「さあ、好きにします― このド腐れ將軍―」

「そうしよう」

慈悲もへったくれもなく、ライコネンの右手がイブシロンの胸を貫いた。

雷真は暴れた。筋肉が千切れそうなほど力をこめた。だが、グリゼルダの支配力は少し

もゆるまず、体はびくりとも動かなかった。

ライコネンの腕が、イブシロンの中で炎となった。

一瞬で焼き尽くされ、イブシロンの胸に、ぽっかりと穴があく。

胸当ても、軟質素材の肌も、内部骨格も、完全に消滅していた。

イブシロンはゆっくりと膝をつき、顔面から床に突っ伏した。

小衆が声にならない悲鳴をあげた。あるいは、イブシロンの名を呼んだのか。

雷真の頭の中で、何かが切れる音がした。

「て……めえ……っ」

ごうごうと耳鳴りがする。髪が逆立ち、筋肉が波打つ。体の奥の奥、芯の部分が煮えたぎり、途方もない魔力が湧き出してくる。

「な……貴様……やめろっ」

雷真は（糸）の拘束を振り払い、一歩、また一歩、ライコネンに迫った。

突然、真横から衝撃がきた。

吹っ飛ばされながら見ると、グリゼルダが必死な顔で剣を振り抜いていた。

ストラトキヤスターの一撃を喰らったのか。剣は鞘に収まったままだったが、雷真は血を吐きながら床を転がり、壁に激突して止まった。

「……やめろと言ったぞ、バカ弟子」

グリゼルダは背を向けた。感情を感じさせない、平板な声だった。

「協力に感謝する、ミス・ウェストン。これで、貴女にはもう軍備がない」
フードをかぶり、ライコネンは淡々と言った。

「明日、またここを訪れよう。そのときには、色よい返事を聞かせてもらいたい」
何の感慨もなさそうに、黒服を従えて去っていく。

彼らの気配が邸内から消えるまで、雷真は立ち上がることができなかった。

小紫がよろめきながら、イブシロンのもとに駆け寄った。

「雷真！ 雷真っ！ 早く助けて！ イブシロンちゃんを……助けて！」

「……無理だ、花の乙女」

動けない雷真に代わり、グリゼルダが応えた。

「心臓を消滅させたのだ。もう助からん」

ひくっ、と小紫がしゃくり上げる。こらえきれず、雷真は激昂した。

「何……なんだ、あんたは！ 何で、そんな言い方ができ——」

怒鳴りつけようとして、できない。

グリゼルダは、泣いていた。

見えている右眼から涙をあふれている。たぶん、隠している左眼からも。

グリゼルダの涙を見て、小紫も悟ったようだ。

イブシロンはもう助からないのだと――

死んだのだと。

鳴咽なげが漏れる。小紫はイブシロンの亡骸なきがらにしがみつき、声をあげて泣いた。

グリゼルダは泣き顔を隠すように背を向け、ホールを出て行こうとした。

出がけ、一度だけ立ち止まり、雷真かみじんに告げた。

「……今夜は泊めてやる。だが、明日には出て行け。もう私の部屋にはくるな。貴様との師弟しでいごっこも、これっきりだ」

「ふざけるな。せめて理由を言え」

「うるさい――出て行け――」

「断る――あんたは俺おれを弟子でしにしてくれると言った。修行もハンパのまま、理由も告げずに破門にする――それが師匠のやることなのか？」

「……勝手にしろ――」

ふらふらと立ち去るグリゼルダ。雷真は奥歯を噛み、部屋の中央を振り返った。

イブシロンはもう動かない。

小紫はまだ泣いている。

ステンドグラス越しの光が、残酷なほど美しく、二人の少女を包んでいた。





Chapter 6 アリアドネの糸



1

庭園のすみ、花壇に囲まれた一角に、雷真は箱を置いた。

その中に、そつと彼女の残骸を座らせる。

イブシロンの死に顔は、決して安らかではなかった。

だが、彼女らしい決意を秘めた、凛々しい顔だった。強張った眉を指でほぐし、優しい顔つきに戻してやる。小紫がしゃくり上げながら、摘んできた花を手向けた。

ささやかだが、それは確かに、別れの儀式だった。

イブシロンを叩くと、雷真は「完全な隠形」を自分にかけて、町に向かった。

町の様子は明らかに違っていた。人通りが極端に少なく、町全体が静まり返っている。何かに怯え——あるいは備え、じっと息を潜めているようだ。

警察署の門前には、例の黒服が立っていた。

警察は完全に彼らの支配下だ。雷真は少し思案して、駅に向かった。

道路を渡って古びたホテルに接近。周囲の気配を探り、ひと気がないのを確認してから、真新しいガラス戸を押し開ける。

カウンターの女主人が、ひとり、で、開いたドアを見つめ、気味悪そうな顔をした。一か八か。雷真は（八重葎）を解除した。

女主人は驚いたようだ。びくつと腰を浮かせ――

無言で椅子から立ち上がり、そつと奥の扉を開けた。

雷真に目配せをして、先に立って奥へと引込む。雷真は急いでその後を追った。扉の向こうはダイニングになっていて、テーブルと食器棚が置かれていた。

「ライシンくん……だったね。今のは魔法？ 連中には見つからないわよね？」

「ああ。爆りは見つかるだろうけどな」

「私たちの領主さまは無事なんでしょうね？」

「本人は無事だ。だが、イブシロンをやられた」

「――そう」

「事情が知りたい。一体、何がどうなってる？」

「ちよって待って。まずはお茶を淹れるわ」

半ば強引に、雷真をテーブルの前に座らせる。ティータイムの残り湯か、既にお湯は沸

いていて、お茶はすぐに出来上がった。

「クッキー、どうぞ」

勧められるまま、手を伸ばす。

サクツとした歯ざわり。ふんわり甘い香りが口の中に広がって、心地がつく。思えば朝から何も食べていなかった。

二つ、三つとパクつく雷真を見て、女主人は目を細めた。

「おいしい？」

「ああ」

一瞬、女主人の眼差しが母のそれと重なり、雷真はちよつとどぎまぎした。

やがて雷真の腹が落ち着くと、女主人は腕組みをして、

「さて、何から話したもんかしら……」

「あの黒服連中は何者なんだ？ こないだ、この宿を襲った連中だよな？」

「ウチを、じゃないよ。あれはライシンくん、君を狙ったんだってさ」

「なぜ——いや、その前に、すまない。俺のせいで」

「バカな子ね。そんなことはどうでもいいのよ。ドアを新調できてよかったわ」

ばたばたと手を振って、笑い飛ばす。それから、真面目な顔に戻って、

「あのいけすかない連中は、政府の偉いさんだって」

彼らはどう見ても文官ではない。戦闘経験を積んだ役人と言え、当然、軍人だ。

「連中、君が地下組織のメツセンジャーだと言ってるよ。そうなの？」

「何の冗談だ。つか、どんな地下組織だよ」

「決まってるじゃない。政府転覆を狙う、反乱分子の集まりよ」

「政府転覆？ そんな奴らがいるのか？」

いや——いる——いた——

「エドマンド——あいつの一派か」

そう、英軍内部には、捕縛されたエドマンドを逃がした者がいる。

「君がこの町にきたのは、ミス・ウェストンが一味である証拠だってさ」

「どこから突っ込んでいいかわかんねーな……」

前提からしておかしい。雷真はむしろ、エドマンドに敵対した側だ。

「じゃあ、お師匠さまは謀叛の嫌疑をかけられたのか？」

「うん……でも今回に限ったことじゃないわ。連中ときたら強盗と詐欺師の集まりみたい

なものなの。ミス・ウェストンに離縁をつけて、土地を横取りしたいだけ」

忌ま忌ましげに罵る。その激しい口調に、雷真は胸が熱くなった。

「あんたは味方なんだな？」

「政府の言いなりになって、領主さまを売る奴なんて、この町にはいないわ。警官だって

きつと同じ気持ちよ。みんな、ウェストン男爵に守ってもらったんだから」

「守ってもらった……？ 何かあったのか？」

「十年ほど前、このあたりでは小競り合いがあつてね」

小競り合い。意外な言葉だ。雷真はカップを置き、女主人の言葉に集中する。

「シェフィールドの方から、大勢の兵隊がやつてきて、こう言つたの。この町はけた違いの鉱毒を流している。シェフィールドに累が及ぶ前に、鉱山は閉鎖しろ。作物は廃棄しろ。家畜はすべてつぶせ、つてね」

雷真は愕然とした。そんなことをすれば、町そのものが消滅する！

「連中は力尽くも辞さない構え。男爵は政府に調停を頼んだけど、待てど暮らせど返事がこない。そのうちに、あっちの兵隊が乱暴して、いさかいになった」

女主人はため息をつき、かぶりを振った。

「あとは流血の惨事。シェフィールドの側には、明らかに政府がついてたわ」

「政府は黙殺……したのか」

「そうじゃなきゃ、新聞が大々的に報じてくれたはずよ。何だかわからないままに、人間がたくさん死んだ。私のダンナもね」

いくつもの疑問が氷解する。町の人間が戦い慣れしている理由。グリゼルダに向けられる敬意。グリゼルダがひとりで暮らしている、その背景――

「戦いはひと月ほど続いた。ほんの十年前、ここでは確かに戦争が起きていたのよ。人知れず……ね。新聞も電話もあるってのに、時代錯誤と思う？」

答えられない。人の口に戸は立てられないと言う。だが、大衆が無関心であれば、言論を圧殺することはできるのだ。

「ミス・ウェストンは十歳で初陣だった。十歳の少女が実戦を経験したのよ」

「――」

「もちろん、相手にも人形使いがいた。兄上と叔父上が亡くなった。一か月を経て、何十人という犠牲を強いて、私たちは土地を守った」

淡々と語りは続く。その声音には、何の感情もこもっていないように思えた。抑制された響きが、（糸）を喰らったときのように、雷真の呼吸を苦しくする。

「戦いは終わったけど、トラブルはやまなかったわ。手を替え品を替え……強盗団ぶうの連中が襲ってきたり、シェフィールドの顔役たちが出張ってきたりね。その都度、ウェストン男爵が守ってくださった——ってわけ」

「そう……だったのか」

戦い慣れしていて当然だ。今も戦っているのだ、彼らは。

得体の知れない敵を相手に。自分たちの団結と、グリゼルダだけを頼みにして。

語り終えると、女主人はとんと机を叩き、穏やかな笑みを見せた。

「さて、それを飲んだら、もう帰りなさい」

「……そうする。城の方がどうなってるか、心配だ」

「違う違う。そうじゃなくて、学院に帰りなさい」

「——あんたたちは、どうする？」

「それは連中の出方しだいね」

力みのない、ただし、重大な決意のこもった言葉。

それで腹が決まった。雷真は紅茶を飲み干し、立ち上がった。

「町を出る気になったのね？」

「その逆だ」

親指で唇をぬぐい、雷真は鋭く言い放った。

「俺に電話を貸してくれ。連中に盗聴されないやつを」

2

窓から吹き込む風が、いつの間にか涼しくなっている。

午後、キンバリーは自分の研究室で、謎めいた地図と格闘中だった。

四角い建造物を中心に、ぐるぐると等高線が引いてある。クレーターの中に建つ、神殿

のような建物か。数式や暗号めいた記述が、びっちりと書き込んである。

ふと、けたたましく電話が鳴り、キンバリーは驚愕そうに受話器を取った。

「ご機嫌いかが、キンバリー教授」

「サマンサか。夏休みなのに、ご苦勞なことだ」

「貴女もね。貴女に学外からお電話よ」

キンバリーは眉をひそめた。教授としてのキャリアが浅いので、学外とはほとんど交流がない。魔術師協会とのやり取りは「直接会って」が原則だ。

「エドワードって、田舎なまりの男の子よ。貴女も隔に置けないわね」

「——あいつか。つないでくれ」

かちやり、と回線が切り替わる。キンバリーは相手に先んじて言った。

「どうした、（エド）から「二番目」。君はバカンスの真っ最中だろう？」

「……何で、俺だってわかった？」

実に気味悪そうな、雷真の声がした。

「落ちこぼれの君が教授に何の用だ？ 機巧物理学の課題につまずいて……なんてことはあり得んな。また何か、厄介ごとに首を突っ込んでいるのかね？」

「……そうだ」

やはりか。まあ、行き先を耳にしたときから、そんな予感はしていた。

時間が惜しいのだろう。雷真らいしんは早口になって、早速本題に入った。

「ライコネンって男を知ってるか？ 政府筋の魔術師で、年は三十前くらい」

「無論、知っている。むしろ、君が知らないことに驚いたよ」

「何者なんだ？」

「少しばかり名の知れた人形使いさ。世間では、(燒却)の魔王リムゾンで通っている」

「魔王——」

「ああ。三回前の夜会で頂点に立つた」

無鉄砲を絵に描いたような雷真も、さすがに黙り込んだ。

「それで？ そのライコネンがどうしたね？」

「……そいつに、自動人形オートマタを殺された」

「ほう？ それで、君は彼をどうしたい？」

「切り刻んでミンチにしたい……が、それは俺の勝手な希望だ。とりあえず、償いをさせたい。何とか、糾弾できないか？」

「無理だな。彼は現在、飛ぶ鳥を落とす勢いだ。ライコネン中将のされることに、一介の

学生風情が噛みつけるものか」

「中将だって？ 本当なのか、それは」

雷真の声が裏返る。魔王リムゾンは将官待遇が原則だが、あの若さで中将とは。

「君は英國の諜報機関を知っているかね？」

「MI5——ってやつだろ。以前、シャルが言ってた」

「そうだ。そのMI5から分離する形で、近々、国外専門の機関が新設される」

「国外ってことは、他国に間者を送り込むのか」

「いや。とつくに送り込んでいる連中を新機関で統制するのさ。こちらはMI6、とでも名付けられるかな。設立はライコネン中将の肝入りだ」

「じゃあ、そいつがその……」

「初代長官と目されている。若いは若い、何と言っても魔王だしな」

秘密主義の諜報機関であっても、トップは何かと耳目を集める。その点、魔王が矢面に立てば、世間に対する疑似餌——いい目くらましになる。また、機関内で高度な魔術実験を行えるのも大きい。強力な自白剤、盗聴器や隠しカメラなど、諜報機関が研究開発したものは山ほどある。

ライコネンは魔王で、將軍で、その上、情報のスペシャリストというわけだ。

「糾弾するなど不可能だ。たとえ、中将の犯行だったとしてもな」

「だが、あいつは俺の目の前で破壊したんだ！」

「君の目撃証言などクソにもならん。やるとすれば、政敵に取り入るくらいだが……どのみち無理だろう。罪状がチンケすぎる」

「……それを聞いて安心したぜ」

「なに？」

「おかげで何の気兼ねもなく、非法な手段に訴えられる」

キンバリーは直感した。受話器の向こうで、雷真は笑みを浮かべている！
気がつくと、キンバリーもまた、自然と顔をほころばせていた。

「では、用件を聞こうか。今度は私に、どんな不法行為をお望みだね？」

「ライコネンの悪事を喧伝して欲しい」

ほう、と思う。毎度ながら、意外なことを言う奴だ。

「俺が叫んだところで、誰も聞いちやくれない。だから、あんたに——魔術師協会の権威にすがりたい」

「仮にも將軍閣下が悪事とは穏やかじゃないな。証拠でもあるのか？」

「ない。だが、疑惑は濃厚だ。探れば出てくる……と思う」

「断言する根拠は？」

「グリゼルダ・ウエストンって魔王を知ってるだろ？」

「（迷宮の）魔王——四年前になったばかりの、最年少の魔王だな」

「俺は今、そいつの城で住み込みのアルバイトをやってたんだ」

「おや、それは驚いた」

「嘘つけ、白々しいー やっぱ知ってたのかー」

雷真は治まらない様子だったが、どうにか気を取り直し、話を続けた。

「グリゼルダはライコネンにやられっぱなしなんだ。多分、弱みを握られてる」

「それを暴くと？ やめておいた方がいい。弱みを握られているのだとしたら、ヤブヘビになるのがオチだ」

「そんなことは——」

「まあ聞け。悪事を働いたのはグリゼルダの方かも知れん、ということさ。魔王になるのは並み大抵のことではない。力があればなれるというものでもない。魔王の座を手にするために、不正行為に手を染めたのだとしたら？」

「そうやって手に入れた魔王の座を、グリゼルダは何に使ってると思う？」

「——報告では、隠遁生活を送っているそうだが」

「そんな生活に、魔王の座が必要だと思うか？」

声の調子が変わった。キンパリーは息を潜め、耳を傾ける。

「魔王って人種に、俺は悪い印象しかなかった。すげえ力を持ってて、富も名声も思うがまままで、怪しい研究に没頭してて……ってな。だが、あいつは違う」

雷真は揺るぎない確信に満ちた声で続けた。

「今どき珍しいくらい純朴な、田舎の小領主さ。戦争ポケで、サディストで、すぐに剣を

抜く野蛮人だが……町が好きで、何より町の連中を大事にしてる。あいつが守ろうとしているものは、あいつ自身じゃない。ほかの誰かだ。万が一、ヤブヘビになったとしても、情状酌量の余地はある……と思う」

「彼女を信じているのか？」

「グリゼルダは、信じるに足る人間だ」

キンバリーは絶望的な気分で、深く深く嘆息した。

「……まったく、君にはあきれるよ。毎度そんなノリで、よくも知らん他人のために命を捨てたがる。先日の一件を思い出してみろ。イオネラ・エリアーデは、危うく国家を転覆させるところだったんだぞ？」

「違う！ イオは利用されただけだ」

「見解の相違だな。私はイオネラにも、シャルロットにも、罪はあったと考える」

過去の事例を蒸し返し、追い詰めるように言う。

「無知は罪だ。騙されようが、脅されようが、罪の重さは変わらん。騙されて人を殺せば無実かね？ 死んだ者は救われるのかね？ 人間は皆、己の行為がどんな影響を及ぼすのか、考えて行動するべきだ。君にも言えることだぞ。君の生き方は危険となり合わせだ。君自身の危険と、ではない。君の行為がいつか極悪人を助け、善人の命を奪うかも知れんと言っているんだ。他人の罪を背負えると思うな。君は——」

ふふつ、と空気のこすれる音がした。

受話器の向こうで、雷真かみまことが笑っている――

「……何がおかしい？」

「らしくないぜ、キンバリー先生。あんたが説教なんてさ」

苦虫を口いっぱい押し込まれたような気がした。確かに、若者に人生訓を垂れるなど、
 〈キンバリー教授〉らしくない。

「とびきりデキの悪い生徒を持つと、さすがの私も説教臭くなるというわけさ」

苦笑しつつ、語りかける。

「だが、これだけは覚えておけ。溺れる者の腕をつかめば、君もまた深みに引きずり込まれる。たとえ相手が子どもでも、こちらの泳ぎが達者でもだ。まして君は若く、短慮で、無知で、貧乏だ」

「ああ、覚えておく。その言葉を肝に銘じて、俺は潮に飛び込む」

「……状態ロケ面づらがくなよ？」

「そんなものは、もう飽きるほどかいてきた」

何でもないことのように言う。

笑みが込み上げる。キンバリーは久しぶりで、愉快な気分になった。

「……ま、〈剣帝けんてい〉にはかり便宜を図ってやるのも不公平だしな」

「どういう意味だ？」

「こっちの話さ。話はわかった。ライコネン中將に関しては何か細工をしてみよう。君が遭遇した男が本当に彼なら、ひとつアドバンテージだ。ライコネン中將は現在、バツキングムに詰めていることになっていてね」

「王宮に？ 何かあったのか？」

「君の能天気にはあきれる——を通り越して感動するよ」

愉快な気分は急速にしほみ、代わって頭痛がしてくる。

「誰かさんがエドマンド殿下を殺さなかったせいで、王都は今てんやわんやさ。逃亡した叛逆の王子が、陛下の暗殺を目論むのではないかと騒がれている」

「俺が悪い、みたいな言い方はよせよ。逃がした奴が悪い——」

はっとした様子で、雷真は不意に黙った。数秒ほど考え込み、

「まさか……そういうこと……なのか？」

「どうした？ またぞろ何か、珍妙な策を思いついたのかね？」

「キンバリー先生。無茶を承知で頼みたい。明日までに……」

改まった口調で、自分の考えを開陳する。

雷真が言ったことを聞いて、キンバリーは掛け値なしで感心した。

既に魔術師協会が仮説として想定していた内容だが、少ない情報からその結論に向かう、

鋭い直感には目を見張る。

「そんなつながらが存在すると、本当に思っているのかね？ 根拠は？」

「カンだ」

「そうだろうと思ったよ。結論から言くと、それは不可能だ。君の大並みの嗅覚が真実を嗅ぎ当てていたとして、決定的な証拠を残すほど連中は迂闊じゃない」

「じゃあ、どうすればいい？ 俺にできることはないのか？」

「まあ落ち着け。証拠がなくても、嫌がらせの方法はいくらでもある。君は……そうだな、カメラを扱ったことはあるかね？」

「写真機？ まあ……簡単なやつなら、軍で触ったことがある」

「ならば、今から言うことをよく聞け」

いくつかの可能性を示し、いくつかの段取りを説明する。

「——というわけだ。できるかね？ 魔王が相手では到底、実現不可能なミッションだ。まして相手は情報部のエリートなわけだが」

「十分可能さ。俺の側には小案がいる」

「では、やってみろ。——そうだな、十二時間後、もう一度連絡を寄越せ」

言うだけ言って、通話を切る。

受話器を置いた途端、キンバリーの背後、窓枠のところに人間の気配が立った。

「面白い話をしているな」

さすがのキンバリーも慄然りうぜんとした。電話に氣を取られていたとは言え、この私に氣配を感じさせないとは。

「……レディの部屋に侵入とは感心しませんね、山鳩やまきりの同胞」

窓枠に腰かけていたのは、ひとりの男だった。

金糸で縫い取りのされた、フードつきの黒マントをかぶっている。夏場にもかかわらず、暑そうには見えない。男は涼しげな目でキンバリーを見て、

「レディとは実に不似合いな言葉だな、鶯うぐいすの同胞」

「その発言は侮辱では？ 我らがファザーに訴えますよ？」

「教父には私から奏上しよう。面白いことになるかも知れん」

キンバリーは目を丸くした。

「この件に力を貸してくださいと？ あの傍觀主義者が？」

「傍觀主義者とは、得てして物見高いものだよ」

体重たいりくが消えたかのように、ふわっと浮き上がり、窓枠に足をかける。そのまま階下に飛び降りようとして、思い出したように動きを止めた。

「覚えてるか。以前、君が言っていた、『星のもと』という言葉だが」

「（下セから二番目）について、ですね」

「その意味を私もようやく理解した。今度は〈焼却〉の小僧が相手とは……神というもの
が実在するなら、よほどあの少年を殺したいと見える」

「そうでしょうか。私には彼を生かしたがっているように思えます」

「生き延びるための試練……か。いずれにせよ、面白い」

につ、と口元にしわを刻み、虚空に身を躍らせる。

キンバリーもまた、不思議と痛快な気分で、それを見送った。

3

完全に日が沈み、午後九時を回ってから、雷真はウエストン邸に戻った。

夜の闇にまぎれて、忍び込むように城門をくぐる。

邸内はひっそりとしていた。もともと明かりの数は多くなかったが、文字通り、火が消えたように静まり返っている。

ひと気のない廊下を突っ切り、古ぼけた階段を上がって、グリゼルダの部屋へ。

ノックをしても返事はなく、ノブをひねるとすんなり回った。

勝手に入って、一番奥の部屋へと進む。暖炉の部屋は暗かった。あかりもつけていない。

雷真は魔力を込めて、ランプ型の魔具を点灯させた。

いきなり斬りつけられる——のも覚悟していたのだが、グリゼルダは安楽椅子にもたれて、窓の外を眺めているだけだ。

その体は、ひどく小さく見えた。まるで幼い少女のように頼りない。

「……この部屋にはくると言っただ。バカが」

口をきいてくれたので、少しほっとする。雷真は窓際、彼女の側に近寄った。

「半日、町に行っていた」

「——」

「悪いとは思ったが、いろいろ聞かせてもらった。十年前の（戦争）のことも。あんたの一族がずっと、この土地を守ってきたことも」

「黙れー そんな綺麗な話ではないー」

グリゼルダの瞳の奥に、怒りの炎が燃え上がった。

「よそ者の貴様がこの地を語るな！ 何も知らぬくせに！」

「ああ、何も知らない。だから、ちゃんと聞かせてくれ。そうすれば、俺も引き下がる。

——あんたはなぜ、あの男に抵抗しない？」

「……いいだろう」

弱々しい声。背もたれに首をあずけ、ゆっくりと語り出す。

「十年前のことは聞いたようだな。では、戦いの原因は何だと思う？」

「土地がどうのって言ってたな。奪われそうになったとか」

「違う。シェフィールド市街ならいざ知らず、こんな田舎の土地にどれほどの価値があるというのだ。敵が狙っていたものは、我がウエストン家の財宝だ」

「財宝？ 自動人形か何かか？」

「禁書だ。この地のどこかに隠されている——そういう伝承だ」

「……それが本当なら、敵も相当イカれてるな。あるかどうかもわからない本一番のために、町ひとつ消しちまおうってのか」

それほど価値のある禁書なのか。大勢の血を流すほどの。

「その禁書ってのは、見つかったのか？」

「……いいや。ありかは誰も知らん」

嘘のにおいがした。だが、追及しない。

「戦いはこちらの勝利に終わった。だが、敵もあきらめない。魔手は幾度となく伸びてきた。当初のように大掛かりな争いなら、政府もいずれは無視できなくなる……が、もっと姑息な手段が目につくようになり、我らは窮した」

それは訊いた。強盗団などの犯罪者にまぎれて、小規模な攻撃が繰り返されたのだ。敵の正体がかめないまま、市民たちは終わりの見えない戦いを強いられた。

「そこで、父上は一計を案じ、私を機巧都市へと遣わした」

「学院に？ 何のためだ？」

「目的はふたつあった。ひとつは、学院で私が力をつけること。もうひとつは、揺るがぬ名声を得ることだ」

名声——なるほど！

この町の苦境を世間に知らしめるために、確かに名声が役に立つ。

名声は人脈を生む。グリゼルダが人形使いとして名を馳せれば、その動向は常に注目を浴びる。鬱陶しいはずのそれを、ウェストン家は運用しようとしたのだ。

「学業は困難を極めた。超一級の家庭教師が必要なほどにな。だが、夜会はぬるかっただ。私はスタートラインからして、そこらのボンボンどもとは違う。覚悟も、実戦経験もだ。

私は血の匂いも、硝煙の匂いも、かき慣れていたからな」

自らを嘲るような、寂しげな笑みを浮かべる。

そうか……、と雷真は思った。グリゼルダが身にまとう凄みは、戦争の落とし嵐だ。生死の境を体験した者だけが身につける、諦観にも似た落ち着き。それは《魔王》となる前から、彼女に備わっていたもののなのだろう。

高級官僚になりたいとか、研究者として大成したいとか——

そうした「普通の秀才」たちとは、死生観が違う。普通の学生なら、グリゼルダと対峙しただけで、棄権したくなっただろう。

「そして私は夜会を制し、魔王ワイスマンとなった」

「……それで、敵は攻撃をやめたのか？」

「びたりとやんだ。この町は魔王のお膝元ひざもととして知られるようになり、悪党どもは寄りつかなくなった。魔王ワイスマンに何かあれば、魔術師協会マジック・ソサエティも黙ってはいない——敵も表立った動きは取れなくなったのだ。しかし……」

ふう、とため息をつく。

「父上が死んで数年。今度は別の動きが私を悩ませるようになった」

「……軍に参加しろ、ってか」

力なく、うなづく。それから、グリゼルダは皮肉げに微笑ほほえみんだ。

「なぜこの邸やしろには自動人形オートマトンがないのか、と貴様は訊いたな。答えは簡単だ。政府に没収されたのだ」

「——」
武装解除。叛乱はんらんの意志を疑われたがゆえに、恭順きんそんの意を示せと言われる。

「軍への参加を拒むと、初めは砲門を撤去せよと言ってきた。お次は自動人形オートマトン。兵たちには暇を出した。使用人の数も制限され、今ではこんなさまさ。三十あった収蔵品しゆざうひんも、ひとつとして残っていない」

「じゃあ、残ったのはその、ストラトキヤスターだけか」

「……こんなもの」

剣を鞘からわずかに引き出し、馬鹿にしたように笑う。

「蔵の中で腐っていた、安物の剣だよ」

偽物！ 雷真はぞっとした。では、あの斬撃は武器の力ではない……？

「本物はとくに奪われている。ストラトキヤスターには大地を割るほどの威力があった。そんなものを私に持たせておくほど、連中は甘くない」

「……あきれたぜ。まるで大阪城じゃねーか」

「オーサカ？」

「騙を理められたんだよ、あんたは。何でそんな、見え透いた誘いに応じるんだ。連中の狙いは、あんたの手から武装を取り上げることだ。抵抗力を殺いで、連中が何をしたいのか、考えなくてもわかる——」

言葉が宙に浮く。

グリゼルダは穏やかに、ちよつと切なそうに、雷真の言葉を聞いていた。

雷真は己を恥じ、批判めいた言葉を引つ込めた。グリゼルダも、そんなことはわかつている。わかつていて、応じざるを得なかったのだ。

「結局、禁書には何が書かれてるんだ？ 連中がそこまで欲しがってることは、よつぽどの——まさか、〈アリアドネの糸〉!?」

グリゼルダは答えなかった。

だが、その沈黙は肯定したのと同じだ。

「……こんなことなら、きちんと研究成果をあげておけばよかったな。貴様が指摘した通りだよ。私は軍務にも就かず、何の研究もしていない。過去にはここで人殺しを働いたという扱いだ。謀叛の意志あり、と疑われても仕方がない」

「それは論理の飛躍だ――」

「だが、真理だ。相手の言い分を否定できんという意味でな。私がいずれかの組織に属していれば、組織の後援を受けられただろうが……」

「なぜ、そうしない？ いっそ英軍に入っちゃえばいいんじゃないか？ あんたは英

人なんだ。祖国に貢献したって、胸は痛まないだろ」

「……（アリアドネの糸）の秘密は、祖国であつても、漏らすわけにはいかない」

苦しげな回答。雷真はなおも食い下がった。

「俺には教えてくれると言ったよな。なのに、連中に教えないのはなぜだ？」

「貴様は信じられる、という結論はどうだ？」

「納得できない」

「……だろうな」

はつきりしない。彼女にしては珍しく、何か迷っているようだ。

やがて、迷いを断ち切つて、グリゼルダは雷真を見上げた。

「私と貴様の秘術は違ふんだよ。(アリアドネの糸)は「糸を操る術」ではない」

「何だつて？　じゃあ一体、何のことを指して……」

「見ろ」

グリゼルダの指が顔にかかり――

顔の左半分を覆つていた、長い前髪をかき上げた。

あらわになつたものを見て、雷真は絶句した。

左眼の周辺に、繊細な紋様が浮かび上がつていた。

タトウだ。幾何学的だが、有機的でもある。一見しただけでは、モチーフがわからない。妖しく、まがましい。図柄自体が魔力を帯びている。

紋様は瞳にまで記されていた。外科的な手段で書き入れたようだ。

「この(へるし)こそが、秘術(アリアドネの糸)だ」

言われてみれば、なるほど、図柄はあたかも迷宮のように入り組んでいる。

「人体を機巧に見立てる、一種の魔術回路さ。この(へるし)を肉体に刻めば、誰でも(糸)を操れる――いや、『誰でも』というのは言いすぎだな。才の足りない者はそこまで

魔力を高められないか、血をまいて死ぬことになる」

だが、才のある者なら。

たとえば学院に在籍しているような少年少女なら、使いこなせるかもしれない。

シャルやロキの姿が思い浮かぶ。(十三人)に列せられる二人は、雷真よりもはるかに魔力のコントロールが巧みだ。

「この秘術が英国軍の手に渡れば——あるいは列強いずれかの手に渡れば——何が起こるか、容易に想像がつくだろう?」

紋様が刻まれた瞳に見据えられ、雷真の膝が震えた。

機巧師団の一大隊でもいい、全員がグリゼルダなみの魔術師になったと想像してみればいい。自動人形を用いずとも、人形使いを圧倒できるほどの力。それが戦闘用の自動人形を複数従え、群れをなして襲い掛かれば。

機械化された部隊であれ、巨大な戦艦であれ、たやすく撃破される。

それほどの攻撃力を得た国家が、世界帝国の座を狙うのは必定……ただちに戦場が開かれる。そして、いざ争いが起これば、ギリギリの綱引きでたもたれている平和は、一気に瓦解するだろう。

グリゼルダが守ろうとしているものは、この小さな町だけではなかった。

世界に戦火が広がるのを、食い止めようとしているのだ。

血生臭い言動を繰り返し、ふた言めには戦争だの戦場だのと言う彼女が。

本当は、誰よりも、戦場を忌避していたのだ……。

グリゼルダは髪を下ろして、疲れ果てたように言った。

「醜いものを見せたな」

「醜くなんか、ねえ。町の連中をずっと護^{まも}つてきた、力の証だ」

「……変な氣を回すな、バカが」

うつむいて、三秒。グリゼルダはいつもの強氣な表情に戻り、

「さあ、これでバカ面の貴様にもわかつただろう。私は政府と事を構えるつもりも、軍に参加するつもりもない。理解できたなら、下がれ」

「最後にもうひとつ答えてくれ。イブシロンは、どうしてこの城にいたんだ？」

グリゼルダは逃げるように顔を背け、しかし逃げず、か細い声で答えた。

「……コレクションを奪われた後、やむを得ず調達したものだ。あいつには……可哀相なことをした。私などに……買われたばかりに」

「違う。あいつは幸せだった。あんたのことを、誰よりも好いていた。あんたの間違ひは、あいつを買ったことじゃない。あんな野郎の言ひなりに——」

「黙れ。……それ以上言うな」

「このまま泣き寝入りしたんじや、あいつは浮かばれない。あんたの行動は尊いが、軍の言ひなりになってあんたが苦しむことを、あいつは望まな——」

「うるさい！ もういい加減わかれ、バカ弟子！」

こらえきれなくなつたように、グリゼルダは叫んだ。

安楽椅子の肘掛を殴る。肘掛は簡単にへし折れ、破片が飛び散つた。

「私が町のために戦うのは、決して市民たちのためではない。私のためだ！ ウェストン家にこんな秘術などなければ……町で血が流れることもなかった。元凶は我がウェストン……この呪われた秘術だ！」

「違う！ 悪いのは、それを奪おうと人殺しを働く連中だ！」

「もう黙れ……っ！」

涙声で訴える。

グリゼルダの肩が小刻みに震え、透明なはずくがふとももに落ちた。

ひっく、ひっく、としゃっくりが漏れる。魔王と恐れられ、剣では無敵のグリゼルダが、

幼い少女のようにしゃくり上げていた。

「私が抵抗せず、こらえていれば……町は助かる。逆に、私が短気を起こしたり、脅しに屈して秘術を渡せば、世界中で血が流れるのだ……」

「――」

「だから、貴様もこらえろ。イブシロンのことは……忘れろ！」

喉まで込み上げた言葉を、無理やりにのみくだし、雷真はうなずいた。

「……わかった」

背を向け、部屋を出る。扉を閉める瞬間、むせび泣く声が聞こえた。不器用なグリゼルダは、慟哭までもが、不器用だった。

4

小紫はひとり、庭園の片隅に立ち、月を見上げていた。

小太刀の鍛錬をしていた場所だ。踏み荒らされた芝の上に、ぽつんと立ち尽くしている。その背中は折れそうなほど細く、ほどけた髪が頼りなく揺れていた。

「小紫」

雷真が声をかけると、小紫はゆっくりと振り向いた。

気付かれないと思つたのだろうか、涙のあとが月光に浮かび上がっていた。

「雷真……どこ行つてたの？」

弱々しく微笑む。泣き腫らした眼は、たぶん、ウサギのように赤い。

雷真はそつと深呼吸して、用意のひと言を言った。

「あの野郎の正体がわかった」

「……正体？」

「（焼却）の魔王——ライコネン中将、だとよ」



「魔王……」
ワイスマン

「力を貸せ、小紫。俺は明日、あの野郎をぶちのめす」
こむらさき カズ

小紫はぼかんとした。それから我に返って、

「——無理だよー だって、相手はグリゼルダさんと同じくらい強いんでしょ？ 大体、偉い軍人さんに何かしたら国際問題になっちゃうよー それに……」

くしゃつと表情が崩れた。悲痛な声で叫ぶ。

「私なんか、何ができるって言うの!？」

「できるー」

びくつと小紫の肩が跳ねる。その肩に両手を置いて、雷真は言った。

「信じてくれ。俺とおまえで、連中に地獄を見せるんだ」

見つめられて、小紫はうつむいた。

小紫が落ち着くまで、雷真は辛抱強く待つ。

やがて、少しは話を聞く気になったのか、小紫はぼつりとつぶやいた。

「でも……どうするの？ 殺すの？」

「いや、殺さない。あの野郎を失脚させる」

「失脚……？」

「あの野郎は町の警察を支配下に置いた。明らかに政府の権威を振るかざし——肩書きを

利用してる。ライコネンが失脚すりや、連中は〈中將〉という道具を失う。黒幕にも打撃を与えられるし、ライコネン自身も血が沸騰するだろうぜ」

「でも……失脚って、どうやるの？」

「当然、スキヤンダルだ」

小紫が肩を落とす。落胆したようだ。

「そうそう都合よく、スキヤンダルなんて転がってないよ……」

「今、キンバリー先生が探してくれてる。俺の考えが正しけりや、必ず隙はある。だが、それをあげつらうためには、密かに細工をしなくちゃならないんだ。魔王に気付かれないように接近し、工作する——それができるのは」

真「正面から小紫を見据え、きつぱりと告げる。」

「夜々でも、いろりでもない。おまえだ、小紫」

「……………」

「イブシロンは優しいやつだった。復讐なんざ、きつと望んじやいない。だが、あいつはグリゼルダのことが好きだっただろ？」

小紫は庭園のすみ、楡の木を振り向いた。

「俺たちはグリゼルダを救う。それが、イブシロンのための、復讐だ」

「……グリゼルダさんは、何て？」

「イブシロンのことは忘れて、こらえろってさ」

「雷真は……?」

「そうすると言った」

「じゃあ……」

「知ってるだろ、小紫。俺は最低の嘘つき野郎なんだ」

「でも……雷真、死ぬかもしれないんだよ?」

「今さらだな」

「グリゼルダさん、きつと怒るよ。もう、何も教えてもらえなくなるよ……?」

「そのときは、自分で奥義をつかんでやるさ」

「見つめ合う。やがて、小紫はこしこしと目元をこすって、顔を上げた。

きりつと、いい顔で雷真を見る。雷真はうなずき、小紫に手を差し出した。

「やるぞー」

「うんー」

ぐっとこぶしを握り、こつんとぶつけ合う。

そして——二人の復讐が始まった。



Chapter 7

紅き王



1

深夜、雷真は小紫とともに、町の地下にいた。

湿った空気が肌に涼しい。壁はセメントで固められ、天井には電灯がともっている。驚いたことに、町の主要な建物は、地下道でつながっていたのだ。

その一室、銃がずらりと並ぶ（司令室）で、雷真は受話器に耳を当てていた。

武装した市民十数人が息を詰めて見守る中、音声に耳を澄ます。

「首尾はどうだね、（下から）一番目（一番目）？」

「まあまあだ」

キンバリーの言葉に軽く応え、雷真は机上のカメラをとんと叩いた。

側には現像したばかりの写真もある。数は十数枚。写っているのはライコネン。日付や場所がわかるよう、カレンダーや時計、建物なども撮っている。どの写真も暗いが、専門家が鑑定すれば、「ライコネンの偽者がこの町にいた」とことは証明できる。

「簡単な仕事だったぜ。何せ、世界最高の自動人形オートマトンがついてるからな」

軽い口調とは裏腹に、雷真ライマのひたいには冷や汗が光っていた。小紫コパープルも消耗した様子で、雷真のとなりでへばっている。

「この写真を機巧都市に送ればいいんだな？」

「急げ。ライコネンが動く前なら、何とかなる。感づかれた様子はないな？」

「相手は魔王ワイルドマンさまだぜ？ 断言はできない」

「珍しく謙虚じゃないか。そんなに大変だったのか？」

「ああ、自分を抑えるのが大変だった。寝込みを襲った方が早いってな」

「よく我慢した」

「おいおい……あんたが誉めてくれるんだ、気味が悪いぜ」

「誉めてやるさ。魔王ワイルドマンに手を出していたら、今頃、君は消し炭だ」

事実をありのまま述べるような、端的な言葉。ライコネンに肉迫したとき、肌で感じた恐怖恐怖が甦り、雷真の首筋に鳥肌が立った。

「実はやつこさん、とんでもない危険物を持ち出したようだね」

「自動人形オートマトンか？」

「聞いて驚きたまえ。奴やつこの武装は伝説級のアンティーク・ドール——フリスヴェルグだ。コードH Vと言った方が通りがいいかね？」

「……すまん。どっちも知らん」

がたん、と受話器の向こうで音がした。まさかとは思うが、あのキンバリーがコケたのかもしれない。だが、キンバリーは何事もなかったかのように、

「海軍が彼のために確保した、ルネサンス後期の一体だ。無論、製造技術は失われている。価格を聞けばたまげるぞ。君の相棒に十倍する高値がついた」

「硝子しやうすいさんはまだ生きてるしな。骨董品こつどうひんの値段には負けるさ。そんなことより、魔術回路の情報をくれ」

「ふむ……君の周囲で言えば、イロリに似ているな」

「いろりに？ どういう意味だ？」

「イロリの回路はターゲット周辺の熱を奪う。フリスヴェルグはその逆だ。ターゲットに熱を与えて、一瞬で消し飛ばす……ようだ」

——違う。それだけじゃない。

雷真は昼間、ライコネンとやり合ったときのことを思い返した。

完全な不意打ちをかけたのに、ライコネンはすぐさま、自ら炎になってかわした。単純に熱を操る能力ではないだろう。

炎には実体がない。刃物や銃火器でダメージを与えることはできない。

まして、相手は魔王マフィア。使い手の性能が圧倒的に違う。

雷真ライマコの思考を読み取ったかのように、キンバリーが挑発的に笑った。

「万に一つも、君に勝ち目はないな。それでもやるのか？」

「ああ」

「つくづく、バカな男だよ。そんな君に朗報だ。我らの教父が動かれた」

「教父……って確か、魔術師協会の元締めだよな？」

「指導者と言え。実は先ほど、ライコネン中將と会談を持たれてな」

「会談？ 何を話したんだ？」

「ライコネン中將の偽者がシェフィールドで不正を働いている、という話さ」

「——証拠はまだ送ってねーぞ？」

「口八丁は魔術師の得意技だよ。虚実入り混じった話を聞かされ、本物は軍警察に偽者の捕縛を命じ——叶わぬ場合は始末してよい、とまで言ってしまったのさ」

ぞっとする。心底、魔術師協会を恐ろしいと思う。

なるほど、教父こそ魔術界の頂点——魔王を任命する存在だ。それがじきじきに会談を申し込めば、魔王であっても断ることはできない。

王宮に詰めていなければならぬこの時期、本物がシェフィールドにいるはずはない。エドマンドに狙われた国王を護っていないてはならない。

だが、ライコネンは国王ではなく、エドマンドの方とつながっているのだ。

グリゼルダを「叛逆者はんぎやくの一味」に仕立て上げようとしたこと。雷真の顔を知っていて、狙つてきたこと。その二つの事実から、雷真はそう推測した。

当て推量だったのが、正鵠せいこくを射貫いぬいていたようだ。結局、ライコネンの替え玉は、本物を偽者扱いせざるを得なくなった。

「……軍に命令がいつてるとなりや、俺おれがうっかり怪我けがさせたところで、叱よられるくらいで済むよな？」

「今回に限っては大丈夫だ。魔術師協会も偽者捕縛に協力することになったのでね。君が何かやらかしても、協会の意向だと言ひ張れる。ゆえに、教父はこういうおっしやりようだ——かまわないから、倒せるものなら倒してごらんなさい」

「……偉く買われたもんだな、俺も」

「こちらからは以上だ。急いで写真を送れ。工作に必要なになる」

「毎度ながら、あんたには世話になる」

「ああ、毎度うんざりするよ。ほかに何かあるかね？」

「夜々と話をさせてくれ」

「そう言うと思つたよ」

くすつ、という笑い声が遠ざかり、代わって――

「雷真……？」

遠慮がちな夜々の声が聞こえてきた。

雷真の胸いっぱいに懐かしさが込み上げる。離れていたのはほんの二週間ほどなのに、もう何年も会っていないかったような気がした。

「元氣か、夜々」

「はい。雷真も元氣そうです」

嬉しそうな声。無邪気に喜ぶ夜々が、急にいとおしく感じられた。

「雷真、また無茶をするんですね？」

「ああ。今までいろいろやってきたが、ある意味、今回が一番ひどいな」
何せ、相手が悪い。あのマグナスでさえ、まだ魔王ではないというのに。

「雷真。夜々は……本当は」

明るかった夜々の声が、不意に上ずった。

「今すぐ飛んでいって、雷真と一緒に戦いたい……です」

「わかってる。ありがとよ」

しばしの沈黙。一体、夜々は何を考えているのだろうか？

やがて、いつも通りの明るい声が聞こえてきた。

「あと二週間で、また夜会が始まっちゃいますよ？ 余計なことにかかりつきりで、修行の方は大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫だ。何つーか……わかりかけてるんだ。いろいろ」

「わかる？ 何をですか？」

「たとえば、おまえに頼りすぎてたこととか」

夜々の性能に寄りかかっていた。工夫することを忘れていた。

「硝子さんが、おまえを俺につけてくれた理由……。以前いろいろが言ってた、「要人警護にもっとも適しているのは夜々」っていう言葉の意味……。今回の旅に、硝子さんが小紫を同行させたわけ……。そういったものが、全部な」

雷真の言葉を夜々は黙って聞いていた。雷真はいつになく優しい気持ちで、

「戻ったら、修行に付き合ってくれ。試してみたいことがあるんだ」

「もちろんです。雷真が望むなら、夜々はどんな体位にも応じます」

「そんなことは試さないからな？ 魔術の修行だからな？」

いつも通りのやりとり。煩わしいはずのそれが、不思議と和む。

命懸けの死闘が迫っているというのに、雷真は穏やかな気持ちで受話器を置いた。

小紫が可愛らしい顔をきりと引き締め、雷真を見つめている。

お互いにならずき合い、同時に椅子から立ち上がる。

周囲の市民たちを見回し、雷真は作戦の詳細を説明した。

2

立ち尽くす夜々の後ろ姿を、キンバリーは頬杖をついて眺めていた。

通話はもう切れているようだ。しかし、夜々は受話器を放さない。

「まったく、おまえの主人好きにも困ったものだ」

キンバリーはため息をつき、立ち上がって、夜々の肩をぽんと叩いた。

「だが、よく我慢したな」

こくつ、とうなずく夜々。その顔はもう、涙でぐちゃぐちゃだった。

雷真が魔王に——「死」そのものに挑もうというのに、側にいられない。

不安と、無力感と。身を裂かれるような痛みに耐え、夜々はいつも通りにふるまったの

だ。雷真に負担をかけまいとして。

キンバリーはそつと夜々から離れ、窓際へと下がった。

そちらには、昨日の夕方と同じように、黒マントの男が立っていた。

「あの少年はやれそうかね、鶯の同胞？」

ささやき声で訊いてくる。キンバリーはうなずいて応えた。

「やるなど言ってもやる奴ですよ。ですが——正直、驚いています。あいつはまだ学生で、

無鉄砲な小僧にすぎません。教父自らが尽力くださるとは」



「それだけ期待されているということだ。そして、学院の暗部にも興味を持たれている。彼をこちらの手駒にできれば、ラザフォードの思惑にも迫れよう」

「魔術師は対価を求めるものですからね」

苦笑してしまう。魔術師は真理の探究に明け暮れるものだ。基本的にはロマンチストだが、それ以上に合理主義者でなければ務まらない。

「そして、もうひとつ。教父が進んで動かれた理由がある」

「と、おっしゃいますと？」

「以前、君も言っていたな。教父はあの少年を、ご自身が予見された〈子ども〉ではないかとお考えだった。彼が、あるいは——」

「彼の兄、ですか？」

そつとあごを引く。肯定だ。

「面白い対比だな。十代の若さで禁忌人形を作り出し、歴代最優秀を謳われる稀代の天才か——成績不振の問題児か」

「因果なものですね。いえ、皮肉と言えはいいのか。極東の一族、それも血に汚れた傭兵集団から、二人も候補が出ようとは」

私が言うのも何だな、とキンバリーは自嘲した。戦争の味は私も知っている。この手は血に汚れ、あまたの人命を奪った。赤羽一門をとにかく言う資格はない。

男は窓の外に目をやり、沈みかけた月を見上げた。

「技術の革新、理論の充実、そして不穏な社会情勢——神性機巧マシンドリットが生まれる材料は十分にそろっている。太古の海に生命の（起源）が満ちていたときのよう」

最初の生命が生まれる直前、母なる海は、その（原因）で飽和していた。

大きな変化が訪れる前に、変化の条件はそろっているものだ。

「間もなく誰かが『最初のドミノをつまびいて』、人類は神性機巧を手に入れるだろう。

教父はその役を子どもが担うだろうと予見された。そして、それは魔術の知識がもつとも集積される場所——夜会が行われる、この学院においてほかにない」

機巧技術と機巧魔術がせめぎ合う場所。実験的な試みがぶつかり合い、試され、淘汰されて、新たな何かが生まれる場所——それが王立機巧学院ロイヤルマシンドリットアカデミーだ。

世界は今、構造の変革を迫られている。

急速な科学技術の発展。帝国主義の台頭。資本主義に植民地支配。旧世界の秩序が崩壊し、新たな平衡感覚を模索する時代——

この社会的な危機が、皮肉にも人類の進化をうながしている。人間とは基本的に怠惰な生き物だ。差し迫った脅威がなければ、何の対策も講じない。

彼らに何かをさせるためには、まずもって（危機）が必要なのだ。

ふと、キンバリーの脳裏に、恐るべき思考が浮かんだ。

ひよつとして、この社会情勢は……誰かの作爲では？

(……馬鹿な。それでは陰謀論だ)

かぶりを振る。そこまでの仕掛けは、結社の蓄意ともであつても不可能だ。

男はフードを引き上げ、金色の隙で夜々を見た。

「神性機巧を得た結果、人類に待つのは災厄か。それとも繁栄か——願わくば、よりよい時代を期待したいものだ」

男の視線の先で、夜々は受話器を握りしめ、切なそうに泣いていた。

3

警察署を出ると、外はあいにくの雨だった。

肌にとわりつくような細かい雨。ライコネンは曇天を見上げ、不穏な気配に眉をひそめた。文字通り、雲行きが怪しい。嫌な予感がする。

警察はこちらが掌握している。市民たちが抵抗するとは考えにくい。

だが、甘く見るのは危険だ。市民たちは戦い慣れしている。グリゼルダが抵抗した場合、市民たちに背後を突かれるのはぞっとしない。

ライコネンは隊の編成を見直し、予定より多い八名を町に残す決断をした。

八名を町の要所に展開させ、自らは三名を連れ、ウェストン邸に向かう。丘へ続く一本道を、十メートルほどの間隔をあけて、一列縦隊で進む。

ふと、先頭の部下が立ち止まり、不審そうにあたりを見回した。

「おかしくはありませんか？ 昨日よりずいぶん……城が遠くに感じられます」

わずかな違和感。無論、ライコネンも感じていた。ライコネンは隊を止め、自ら感覚を研ぎ澄まし、違和感の正体を探った。

ここは町と丘との中間地点。時刻は午前一〇時前。あたりに人間の気配は感じられず、魔力の漏出も感じない――

いや、感じる。誰かが魔術を使っている？

「町に戻れ――」

指示を飛ばし、自らは魔術を使う。

自身の体を炎と化して、存在を希薄にし、離れた地点で再び密度を高める。かつて師に教わった基礎理論を、実戦レベルにまで昇華させたものだ。

大幅な距離をショートカットして、町に戻る。

だが、一足遅かった。

何があったのか。残してきた部下は捕縛され、自動人形は破壊オートマティンされていた。

信じられないことに、どうやら市民の作業らしい。長銃や棍棒こんぼうで武装した市民が、部下

たちを縛り上げ、どこかへ連れ去ろうとしている。

もはや、こちらの正体がどうのと言っている場合ではない。ライコネンは魔術の行使を決断し、威嚇のつもりで攻撃した。

指先から炎がほとばしり、火柱がそびえ立つ。爆風が市民をなぎ倒し、警察署は木っ端微塵に吹っ飛んだ。

市民は驚愕し、ライコネンの部下たちを放り出して、一目散に逃げて行つた。

無論、逃げてでも無駄だ。視えていた範囲はすべてライコネンの射程内。抵抗力を殺ごとく、次の炎を発射する——寸前、市民の姿が見えなくなった。

あれほどの人数が一瞬で。まるで霧にのまれたかのように。

「中将——これは一体……？」

追いついてきた部下が叫んだ。歴戦の猛者が動揺している。

ライコネンに動揺はない。だが、危険は感じていた。

直前まで感じていた、市民たちの気配がまったくくしない。

今や、町は無人のゴーストタウンだ。そんなはずはないのに。

突然、うっ、と叫んで部下が倒れた。

首を押さえて苦しんでいる。呼吸ができないようだ。

ひとり、またひとりと倒れ、ついには三人ともがその場に倒れ伏した。

いつの間にか、あたりにはうつすら、紫色の煙が立ち込めていた。

強烈な刺激臭が鼻につく。喉が焼けつき、ライコネンも膝をついた。息が詰まる。有毒ガスか。焼き払おうと魔力を練って、愕然とした。

炎が出ない。フリスヴェルグが反応しない――

自動人形を封じられた……？

「――そういうことか」

あまりにも都合のいい窮地が、ライコネンに真実を教えてくれる。

ライコネンは目を閉じ、あらゆる感覚を遮断した。

ゆっくり立ち上がろうとする。体はビクリとも動かなかった――ように感じたが、それは幻覚だ。現実には、ライコネンはちゃんと立ち上がったはずだ。

「……まあ、そんな簡単にはいかねーか」

誰かの声が出た。居場所を探ろうとした瞬間、銃弾が眉間を貫通した。

脳髓を焼き尽くすような痛みとともに、鮮血が飛び散った。強烈な血の味、死ぬほどの苦しみが襲ってきて――ライコネンは感嘆する。

なるほど、見事な幻覚だ。この俺の感覚を、九割がた支配している。

実際には、銃弾はライコネンを傷つけなかった。ライコネンの体はちゃんと炎と化し、弾丸をかわしている。この血も、痛みも、敵が見せる幻覚にすぎない。

「……見事なものだ」

決して慢心ではなく、そう思う。こちらの魔力制御は超一流、他人の魔力干渉など受けつけないし、魔術でゆがめられた感覚情報など、ひと目で見破ることができる。

それなのに、この敵は完璧な欺瞞をしかけてくる。

「だが、姑息な手品だ。幻とは」

普段はきかない無駄口を叩く。相手を見極めるため、時間を稼ぐ意図だ。

「姑息とは心外だな。当代随一の名工、花柳斎の手による魔術だぜ？ 八重の霞は五感を狂わせ、心、知、識をも支配する」

「昨日、ウェストンのところにいた学生か？」

「名前で呼べよ。とつくにご存知なんだろう？」

「ライシン・アカバネ——といったか」

「やつば知ってるか。そうだ。あんたのお仲間の、エドマンド殿下の知り合いだよ」
顔には出さなかったが、ライコネンは内心で苦笑した。

カマをかけたつもりか。なかなかどうして、知恵の回る小僧だ。

声は聞こえるが、居場所はつかめない。ひっきりなしに銃声が響き、ライコネンを撃ち抜いていく。幻覚のせいで不明確だが、おそらく部下たちは全滅した。

「……騒々しいな」

一瞬で練り上げた魔力を、少し多めに解放する。

何も起こらなかった。

いや、起こった。実際にはフリスヴェルグの炎が炸裂し、あたり一帯に大規模な破壊をもたらしたはずだ。少なくとも、銃弾の発生源は焼き尽くした。

静まり返った〈幻〉の町で、ライコネンは姿なき後輩に呼びかける。

「ひとつ訊きたい。俺を襲って、どうする？ 俺の目的はグリゼルダ・ウェストンのスカウト——俺を殺したところで、次の交渉人が派遣されるだけだ」

「……交渉が聞いてあきれるぜ。そんな怪物じみた自動人形が——あんたみたいな怪物が交渉に必要かよ。あんたにはライセンスがあるんだろう？」

ライセンス。殺人許可か。学生のくせに、内部事情にも通じているようだ。

その通り、グリゼルダが抵抗した場合、「抹殺せよ」という命令を受けている。

——いや、それは少し違う。

ライコネンが受けた命令は、結局のところ、グリゼルダに抵抗させることだ。

「……そういや、あんたも学院生だったんだよな？」

ライコネンは戸惑った。さすがの魔王でも、予測できない言葉だった。

「なら知ってるだろ。夏期休暇には、自由研究ってのがあってさ」

「——それがどうした？」

「俺のテーマを教えてやるよ。魔王をぶちのめすことさ」
自然と笑みが込み上げる。

ライコネンは久方ぶりで愉悅を感じ、久方ぶりで、力の片鱗を示す気になった。

4

爆音を聞いたのが先か、魔力を感じたのが先か。

飛び起きたグリゼルダは、無意識に姿勢を低くして、剣の柄に手をかけた。

爆音は屋外、町の方から響いてくる。見れば、町に火の手が上がっている――

「あのバカ弟子……何かしてかしたな――」

矢も盾もたまず、古ぼけた剣だけを携えて、窓から飛び降りた。

まずは市民たちを護らなくてはならない。この期に及んでなお、グリゼルダにはロードとしての自覚があった。(糸)を――血を惜しみなく消費して、自らの魔力循環系に干渉し、筋力を強化する。そうして、駿馬のような速さで町へと駆けた。

到着したとき、町はひどいありさまだった。

不自然なほど乾燥した空気。砂塵が舞い、焦土のにおいが立ち込めている。

荒野と化した大通り。(焼却)の魔王がやっただけに違いない。こんなことができる魔術師

は、軍にも数えるほどしかない。

走りながら目をこらす。思った通り、ライコネンらしき背中が見えた。

「ミス・ウエストン」

横から声がかかって、急ブレーキをかける。

見ると、崩れた建物の陰に、市民たちが固まって避難していた。

老いも若きも、男も女も、弾けるような笑顔で手を振っている。

「バカ者ー 何をやっているのだー」

町のまとめ役、役所勤めのコーウェンが進み出てきた。

「悪党退治ですよ、ミス・ウエストン」

悪びれたふうもなくそう言つて、仲間たちに合図を送る。手前の市民たちが場所を開けると、そこに、ライコネンの部下たちが転がされていた。

さしものグリゼルダも、血の気が引いた。

「何ということだ……」

重傷の人形使いが六人。破壊された自動人形オートマティンが八体。

先日の襲撃は『悪漢の夜襲』だったが、今回は『軍から派遣された使者』だ。このことが明るみに出れば、軍が黙ってはいない。

彼らを怒鳴りつけようとしたとき、どこんっ、という爆発音が邪魔をした。

爆風が押し寄せ、市民たちが一斉に倒れる。グリゼルダでさえ、身を低くしてやり過ぎすしかなかった。

（この魔力……ライコネン！）

文字通り桁違いの力。まるで天が怯えているかのように、大気がびりびりと振動する。誰かと戦っているらしい。無論——雷真と。

「行ってください、ミス。もう一人の英雄が死んでしまいますー」

コーウェンが叫ぶ。緑色の帽子の下に、いたずら小僧のような目があった。

「どうか、ミスー」「あの坊やを護ってやってー」「さあ早くー」

市民たちが同調し、口々に言った。グリゼルダはためらった。残存兵力がどこかに潜んでいるかもしれないし、ライコネンがこちらに矛先を変えるかもしれない。グリゼルダには市民を護る義務がある。しかし……。

「すまんー おまえたちも死ぬなー」

グリゼルダはスカートをひるがえし、駆け出した。疾風のごとく路地を駆け抜け、荒れ果てた中心部へと急ぐ。崩れた建物の切れ間から、もうライコネンの姿をとらえている。少し離れた建物の屋上に、雷真と小紫の姿もあった。

グリゼルダは速度をゆるめ、気配を殺してライコネンに近づいた。ライコネンの周囲では魔力が荒れ狂い、炎の舌が町をなめ尽くしている。

（てんで見当違いの場所を攻撃している……）

ライコネンは立ち止まったまま、動かない。ときおり体を炎と化して、見えない攻撃をかわすような素振りをする。

（何をやって——そうか、欺瞞だ！）

小紫の魔術回路は「姿を隠す」ものだと思っていた。だが、実際は「敵の感覚を欺く」ものだったようだ。それならば、姿を隠すことも、幻を見せることもできる——

（魔王に幻覚を見せている……？ 一介の学生風情が……!?）

魔力を高めて、目をこらす。いわゆる〈靈視〉というやつで、魔力に対する感度を高める技術だ。ライコネンに意識を同調させ、彼の周辺を靈視する。

そして、驚愕した。完全幻覚、とでも言えばいいのか。ライコネンが見せられていたのは、現実とまるで区別できない、完全なる擬似世界だった。

血の臭いも、銃弾の痛みも、存在しない射手の気配まで、何もかもがリアルだ。

（どんな手品だ……？ 仕組みがわからん！）

立体映像を投影して、相手の〈視覚〉に直接訴えるやり方とは少し違う。

もっと直接的に、相手の意識に介入しているようだ。

一般人相手ならともかく、魔術師——それも魔王に干渉するなど容易ではない。万が一それが可能だったとしても、魔活性不協和の原理という壁がある。魔術による干渉なら、

ライコネンが自身を炎に変換した瞬間、打ち消されてしまうはず。

(いや、原理などどうでもいい。あんなものを使われたら……)

グリゼルダでさえ、やられる危険があった。

ただし、雷真の表情には余裕がない。したたり落ちる冷や汗から、悪戦苦闘ぶりがうかがえる。そのすぐ近くに炎が着弾し、爆発が雷真と小紫を襲った。

雷真は小紫を抱え、となりのアパートに飛び移る。間一髪、雷真が立っていた建物は、あとかたもなく焼け落ちた。石造りの塔が、一瞬で、だ。

大爆発に吹き飛ばされ、アパートの屋上をごろごろ転がる二人。

可哀相に、火傷と擦り傷で血だらけだ。それでもなお、毅然と顔を上げる。

(このままではなぶり殺しだ)

相手は魔王、幻覚はいずれ破られる。簡単に魔力切れを起こすような相手ではないし、闇雲に放った炎が雷真をとらえるのも時間の問題だ。

(私が(糸)でライコネンを止めるか……？ バカな！ 自殺行為だ！)

幻覚がどれほど完全でも、(糸)をライコネンに直接ぶつければ、こちらの位置は即座にバレて、その瞬間に焼かれるだろう。幻覚が解けるおそれもある。

手がない。だが、何もしなければ、町が灰になる。

煩悶するグリゼルダの耳に、ふと、雷真の声が届いた。

「どうだ小紫。あいつの魔力、視えたか？」

（視る——なるほど、そういうことか！）

雷真は黙ってやられていたわけではない。小紫の優れた感覚器で、ライコネンの魔力が伝わる先——フリスヴェルグの位置を探っていたのだ！

「うん、視えた——影だよ、雷真！」

「影？」

「自動人形オートマトンはあいつの足もと——影の中！」

「でかした——」

雷真は満面の笑みを浮かべ、素早く両手で印を組んだ。膨大な魔力が体内で燃え上がる。それは丹田たんてんから背骨を通り、彼の両腕に流れ込んだ。

「バカが——私の真似をするなど——」

遅い。グリゼルダが飛び出す前に、雷真は両手をライコネンの方に突き出した。

青白い魔力の糸が、閃光せんこうのように、指先からほとばしった。

肉眼でもはっきり見える。グリゼルダのそれとは違い、数は十本。そのぶん反動も大きい。雷真の背中から紅い霧あかきが噴き出し、翼のように広がった。

血液の気化が完全ではない。血管が破れたのか、水っぽい血しぶきだった。

しかし構わず、雷真は十本の糸を全部、ライコネンの足もとに注ぎ込んだ。

次の瞬間、明らかな反応があった。

ライコネンを取り巻いていた炎が、強風に吹かれたように暴れ出した。

はっ、はっ、と音を立てて火の粉を散らす。苦しんでいるようにも見える。

やがて、ずり……、と何かが影から這い出してきた。

（あれが……（すべてを呑み込む者）——）

それは不定形の、「炎そのもの」のような存在だった。固体のボディを持たないらしい。伝説に聞く〈火の精〉とやらが、たぶん、こんな感じだろう。

真紅の火の精は〈糸〉に巻きつかれ、もがいていた。干渉を振り払おうとしているようだが、からみつく〈糸〉は巨大な魔力の塊だ。たやすくはほどけない。

ライコネンはまだ異変に気付いていない。気付かれたが最後、フリスヴェルグは簡単に制御を取り戻すだろう。

（ふん、幸運だったな……。幻覚の効果で、ライコネンの感覚が鈍って——）
ぞくっ、とグリゼルダの背中に戦慄が走った。

（——違う！ 逆だ！）

幻覚が効いているから、フリスヴェルグに干渉できたのではない。

フリスヴェルグに干渉するために、あらかじめ幻覚を使ったのだ。

魔王を足止めするとか、その部下たちを排除するとか、そんなことは「ついで」にすぎ

ない。すべて、最初から、こうするための伏線――

しかし、現実にはチェス盤のようにには進まない。

「ぐうっ!?」

雷真（かみまこと）の背中、肩甲骨のあたりが大きくふくらみ、こぶのようになった。

肉が破裂する前兆だ。雷真は大量の血を噴いて、即死――

……は、させない。

乱れた魔力が再び安定し、こぶは消え、雷真が落ち着きを取り戻す。

冷や汗でぐっしより濡れた顔で、雷真はゆっくりこちらを振り返った。

「どんな魔法だ、お師匠さま……?」

「言っただろう。私は〈迷宮〉を支配すると」

グリゼルダの指先から青白い（糸）が伸び、雷真の背中に流れ込んでいる。それは雷真

の体内を駆け巡り、導線となって、魔力の流れを整えていた。

雷真は死を免れた。ほっとした途端、激しい怒りが込み上げた。

「何が非情な将だ！ 貴様はポーンを護るために自分を捨てる、バカなキングだ！」

「知ってるよ」

雷真は笑っている。グリゼルダはますます頭に血がのぼった。

「私はやめろと言ったのだ！ 師匠の言うことが聞けないのか！」

「あんたは俺の師匠だが、師匠である前にひとりの女だ」

「はあ？ 貴様、何を言つて——」

雷真はいささかの迷いも感じさせない、澄み切った声で言った。

「泣いてる女を護つてやつて、何が悪い？」

熱いものが込み上げ、視界がぼやけた。

……そうだ。こいつはそういうやつだ。

グリゼルダは知っている。彼の素性を調べたときに、聞かされている。

こいつはいつも、こうやつて、無謀な戦いを繰り返してきた。

だからこそ信じられると、信じてみようと、思ったのだ。

悟られないように指でぬぐい、グリゼルダは叫んだ。

「ならば、さっさと奴をぶちのめせ！」

「そうする！」

グリゼルダの介人で雷真の（糸）は極めて安定している。今ならマグナスにも劣るまい。

雷真は魔力を全開にして、フリスヴェルグを釣り上げた。

なす術もなく空中を漂うフリスヴェルグ。一方、ライコネンは棒立ちだ。

「今だ、小案——」

「待て——」

グリゼルダが叫ぶのと、背後にライコネンの気配が立ったのは、同時だった。弾かれたように振り向く。ライコネンは既に、指先を雷真に向けていた。

ライコネンの目は雷真を見ていない。だが、明らかに位置をつかんでいる。

（糸）をたどられた……）

あれだけ完全な幻覚でも、ライコネンの全知覚を騙すことはできなかったようだ。フリスヴェルグに感覚を同調させ、位置をつかんだのか……！

ライコネンが炎を放つ。真紅の銃弾、あるいは槍か。

支配権が揺らいでいるため、火力は格段に弱い。だが、雷真を殺すには十分だ。

炎はグリゼルダの頬をかすめ、一直線に雷真の心臓を狙う。雷真は身をそらし、かろう

じてかわした——が、右肩の肉が消滅した。

灼熱の苦しみに悶えながら、叫ぶ。

「やれ、小紫！」

叫びの意味を悟り、グリゼルダは瞠目した。

いつの間にか、小紫がライコネンの背後に出現していた。

今の一瞬で跳んできた——いや、そうじゃない。

初めから。そこを目指していたのだ！

確実に雷真を仕留めるため、敵は背後に出現する。それを雷真は読んでいた。

小紫は片刃の銀剣を逆手に持ち、踏み込みに合わせ、手練の動きで斬り上げた。基礎中の基礎。もつとも基本的な型。愚直なまでに、基本に忠実な動き。

銀の刃がそう見えるのか、小紫の小さなシルエットが、記憶の中の彼女と重なる。刃がライコネンのわき腹にめり込み、肉を割って骨に食い込んだ。

鮮血が飛び散る——だが、浅い——

フリスヴェルグの支配権が揺らいでいて、しかも攻撃の際に合わせられた……この状況でなお、ライコネンは自らを炎と化して、致命傷をさせた。

となりの建物に瞬間移動。血のついた手を見て、ほう、と感嘆の息を漏らす。

（何という男だ……学生に分際で魔王に一撃加えるとは！）

私のために——否、私たちのために、不可能を可能にしてくれる。

この男を……雷真を、死なせるわけにはいかない。

グリゼルダは雷真をかばうように、そつとライコネンの前に進み出た。

「お引き取りください。先生」

雷真と小紫がそろって驚愕する。二人を無視して、グリゼルダはさらに言った。

「貴方の指導がなければ、私は魔王にはなれなかった……。そのことは、感謝してもしきれません。ですが、不義理を承知で言います。軍には参加できません」

胸に手を当て、その場に膝をついて、こうべを垂れる。

「どうか、お許しを……」

「それはできない」

冷淡な返答。ライコネンはグリゼルダを冷ややかに見下ろした。

「軍にとって、おまえは価値ある存在だ。このフリスヴェルグよりも。ゆえに——万が一にも、他国の手に渡すわけにはいかない」

ごうっ、とライコネンの右腕が燃え上がった。渦を巻き、猛り狂う炎。あれが解放されれば、半径百メートルは黒コゲだ。

こちらを始末するつもりだろう。戦うしかないのか。陰鬱な気分（いんうつ）で剣の柄に手を伸ばしたとき、すうっと自然体で、雷真がグリゼルダの前に出た。

「爆れよ、中將閣下。嫌がる女を無理やり口説くなんざ、下品だぜ」

ライコネンは無言で雷真を見下ろした。雷真はさらに続けて言った。

「倫敦（ロンドン）に爆れ。さもないと、魔術師協会（マジック・ソサエティ）があんたを狩りにやつてくる」

「……何だ？」

「昨晚、魔術師協会の教父が、あんたと会談したそうだ。でもって、王宮じゃ今、あんたの偽者（いつはり）を始末しろって話になってる」

グリゼルダは哑然（もく然）とした。一瞬、雷真が何を言っているのかわからなかった。

だが、ライコネンはすぐに理解したようだ。鋭い眼光をますます鋭くする。

「なるほど、魔王の替え玉がうろついているとなれば、英国だけの問題ではない。すぐにも灰十字の戦士が現れるかも知れない——そういう理屈か」

ライコネンはぐるりと町を見回した。

「この町を焼き尽くすこともたやすいが」

穏やかな口調で、そら恐ろしいことを言う。

「それをやれば、ライコネンの本物がこちらにいたことになる。ゆえに、今日のところは退こう。若き後輩の機転と、その幸運に免じて」

マントをひるがえし、背を向ける。そして、振り向かずひと言——

「いい駒を持ったな、ゼルダ」

「……駒ではありません。私の弟子です。先生」

ふつ、とライコネンの頬がゆるんだように見えた。

錯覚だろうか。ライコネンの体は一瞬で炎に包まれ、そして消えた。

5

敵の気配が消えると、雷真の膝から力が抜けた。

とつくに魔力を使い切っている。撃たれた肩には感覚がない。実はもう、立っているの

もつらかった。

自嘲が込み上げる。やはり、魔王は遠すぎる。全身全霊の魔力を注ぎ込んで、汚い戦術に訴えて、それでもなお、切り傷ひとつが関の山だ。

全身がだるくて、受け身も満足に取れない。前のめりに倒れ、したたかにひたいをぶつけそうになるのを、小動物のように小さな体が支えてくれた。

「雷真、しつかりー大丈夫？」

「……よくやったぞ、小紫。おまえのおかげだ」

小さな体を抱きすくめ、ぼんぼんと頭を叩く。

小紫は涙ぐんだ。今さらのように震え出す。本当は怖かったのだろう。人形使いとやり合った経験は、小紫にはほとんどない。

(ほぼ初陣の相手が魔王さまだったのは、気の毒だったな……)

自分の無茶にあきれる。そして、その無茶に伝えてくれた小紫が心底、愛しい。

「もつと嬉しそうにしろよ。おまえは魔王に勝ったんだ」

「勝って……ないよー 引き分けだよー」

負けん気を出して言い返す。おかしくなって、雷真は笑った。

その拍子に、すうっと血が下がった。

小紫が引きとめようとするが、間に合わない。空がぐるりと回り、仰向けに崩れていく

のを、今度はグリゼルダが支えてくれた。

グリゼルダは顔面蒼白で、目尻と唇がびくびく痙攣していた。明らかに怒りに震えている。怒りをなだめようと、雷真はおどけた声を出した。

「どうだ、お師匠さま。魔王にひと泡噴かせてやったぜ？」

「無茶しやがって……バカが！ 貴様というやつは、本当に……」

グリゼルダは大粒の涙を散らしながら、感極まったように言った。

「大した奴だ！ 貴様の弟子入りを認める……！」

「今まで認めてなかったのか！ じゃあ、あれはただの労働か！」

「雷真！ 無茶しないで！」

思わず突っかかる雷真を、小紫がしがみついて止める。

グリゼルダは涙をぬぐい、偉そうに腕組みをして、雷真の両手を見下ろした。

「最後の〈糸〉はなかなかだった。私のいびりのおかげだな」

「いびりって言い方やめろ！ 自覚があるなら改めろ！」

「ただのいびりではない。血行を阻害したのだ。あれに長時間耐えられるようになったのはつまり、貴様が無意識に血流を維持していたということだ」

「血流だって……？ ああのクソ繊細な血の流れを……俺が？」

「うむ。魔力循環系を外部の干渉から保護し、歪んだ部分を整えたのだ。体が痛むとき、

人間は無意識に「痛くない」姿勢を選ぶだろう。それと同じことだ」

「じゃ、魔力の制御が……上手くなったのか？ あんないびりで？」

「言っただろう。体で教えてやると」

笑って肯定する。雷真は思わず自分の両手を見た。

「いつの間に、こんなに上手くなったの？」

小紫もそう言っていた。(八重蔵)を高度に運用できたのも、そのおかげか。

「……ありがとう、お師匠さま」

「ま——慢心するな、バカが——」

グリゼルダは真つ赤になって怒った。

「あの程度で何を満足している。私が本気を出せば、貴様など一瞬で心停止だ——」

「そいつはごめんこうむりたいな……」

よほど情けない顔をしたのだろう。グリゼルダが噴き出した。

それから、真面目な顔をして、雷真と小紫を交互に見た。

「札を言わせてくれ。貴様たちのおかげで、胸がすつとしたよ」

グリゼルダは雷真の右手をつかみ、ぎゅっと握った。

「思えば、奇妙な巡り合わせだな。我がウェストン家と貴様の一族のあいだには、遠い昔、何かつながりがあったのかも知れん」

「だとしたら、相当古い話だぜ？　赤羽アカハネ一門の逸話は千年前から残ってるんだ」

「（アリアドネの糸）も、源流はそのくらい昔だという」

「面白い話だな。それが今、千年という時を超えて」

「ああ。こうして、男と女——」

「師匠と弟子になるっていうんだから」

ずひゅんつ、とグリゼルダの剣が一闪した。

雷真ライマコの前髪が二本、はらりと落ちて、風に舞う。

「……貴様、死にたいのか？」

「何で殺そうとする!?　今、俺に何か落ち度があつたか!？」

「黙れ！　覚悟しろー　これから毎日、どんどん魔力を高めていくからな」

「げっ……あの訓練、まだ続けるのかよ……?」

「無論だ。上手くすれば、貴様も（糸）の本質をつかめるかも知れん」

そう言われてしまつては、黙るしかない。（紅翼陣ベニトビジン）を習得しなければ、どのみちマグ

ナスには勝てないのだ。

「夜会の開催に——いや、マグナスとやるまでに、間に合うかな……?」

「案ずるな。寝ないで修行すれば、基本くらいはつかめる」

「いや無理だろ。寝ないのが無理だろ」

「つきつきりで指導してやる。死ぬまで忘れられんほどになー」

「トラウマにはするなよ!? つか俺、生きて学院に帰れるんだろ? な!?」

小紫がくすくす笑っている。その笑顔を見て、雷真は少しだけ、ほっとした。

「ミス・ウェストンー」「私たちの領主さまー」「万歳ー」

建物の下の通りに、いつしか市民たちが集まっていた。

地下や遠くに身を潜めていた人々も、息を吹き返したように騒ぎ出している。

グリゼルダが歓声に応え、屋上から飛び降りる。人々にもみくちゃにされるグリゼルダは、照れくさそうに、そしてほがらかに笑っていた。

「なあ、小紫」

「うん。なに?」

小紫も同じことを考えていたのだろうか、雷真がこれから言おうとしていることを予感しているような顔で、小紫は微笑んだ。

「早く城に戻って、あいつを埋めてやろうぜ」

「うんー」

吹き抜ける風が二人の髪を撫でていく。

沸き立つような歓声は涼やかな風に乗り、はるかな大空に溶けていった。



Epilogue

そして、夏が終わり——



九月第三週——新学期が始まる、その前日のこと。

学院にはすっかり秋の気配が漂い、気の早い広葉樹は黄色く色づいていた。

学院は二期制をとっているが、伝統的に『新年度』の開始は春だ。卒業やら入学やらもその時期なので、新学期と言っても、学内にそうした華やかさはない。

代わって学院を満たしているのは、夜会再開への期待感だった。

既に夕刻。日が短くなっているので、空はオレンジ色に染まっている。

カッと照明が輝き、新たな交戦フィールドを照らし出した。

森の外れの〈コロセウム〉には、既に大勢の見物客が詰めかけている。

以前、ロキとフレイが〈十字架の騎士団〉と戦った場所だ。学院の中心部からは遠く、不便な立地だが、夏期休暇のあいだに整備されていた。

「まさか、ここが夜会に使われようとはね」

客席の最上段、屋根が設けられた〈特別席〉で、ひとりの乙女がつぶやいた。

蜂蜜色の金髪が美しい、純爛たる美貌。優雅に足を組み、頰杖をついて、フィールドを見下ろしている。肩にかけた重厚な礼服が、威厳すら感じさせた。

彼女こそ学生総代——《金色のオルガ》ことオルガ・サラディーン。

「ならず者の溜まり場だったっていうのに、実に節操がない。そう思うだろ？」

ちらりと目をやる。オルガの背後には長身の執事が控えていた。黒眼鏡をかけた男で、刃物のような、ザラついた雰囲気を出している。

「私はよい場所だと思いますが。客席もありますし。何より、ここならば、二二人全員が一度に戦えましょう」

そう——夜会の開催場所を移した、最大の理由がそれだった。

皇太子エドマンドが引き起こした事件で、自動人形を失い、棄権に追い込まれる者が相次いだ。その救済措置として、特例により、棄権者の大半が復活している。

結果として、大人数が一度に交戦する可能性があった。もともとのフィールドでは手狭になるため、こちらを正規の開催場所としたのだ。

今宵は雷真、ロキ、フレイを含め、実に二二人の《手袋持ち》に参加義務がある。

オルガは高揚した様子で、特別席の窓からフィールドを見下ろした。

「いよいよ五十番目の夜か。夜会も折り返し地点だね」

「残り七十人もいるのでは、折り返しとは言えませんが」

「いや。折り返すよ、今夜」

悪戯っぽく笑う。執事は少々警戒の色を見せ、控えめに言った。

「ずいぶん楽しそうでいらつしやいますね、お嬢さま」

「わかるかい？」

「また何か、精神の歪みを感じさせるような、クソ意地の悪いことをお考えで？」

「OK、シン。君がDMの変態なのはわかったけど、お仕置きは後回しだ」

甘い毒を含んだような、艶っぽい微笑を浮かべる。

「まずは見せてもらおうじゃないか。僕のライシンがどこまで強くなったのか」

「……私はあの男を八つ裂きにしたいと思いますが」

「おや、前回の無様な敗北を気に病んでいるのかい？ それとも嫉妬かな？」

なぶるような眼を向け、嫌みを並べ立てようとしたとき、

「総代！ 開幕の宣言をお願いしますー」

執行部の学生が呼びにきた。オルガは手を挙げて応え、貴族的な所作で立ち上がった。

礼服のすそをばさりとはためかせ、そつと執事にささやく。

「おまえはここで待て。ちよつとオルガの役をやってくるからさ」

「御意に。アリス、お嬢さま」

金髪をなびかせて出て行くオルガは、実に楽しそうだった。

新たな交戦フィールドは、サッカー場が楽に収まるくらいの広さがあった。

客席の下、参戦者のための入場ゲートで、シャルが行ったりきたりしている。そわそわと落ち着きがない。察するに、雷真（らいしん）を待っているのだろう。そのいじらしい姿を、硝子（しやうし）は客席から眺めていた。

硝子（しやうし）がいるのは〈来賓席〉。新たな会場を整備するにあたって、学院長が作らせたものだ。機巧都市の名士や、学生の後援者などが招かれている。

硝子（しやうし）の側（そば）には、いろりと小紫（こむらさき）が控えていた。

三人の艶（えん）やかな美しさは周囲の感嘆を誘っている。視線を感じるのか、いろりは居心地が悪そうに、もじもじと膝（ひざ）をすり合わせた。

「落ち着かないわね、いろり」

「すみません、主（ま）。人の多いところは苦手で……」

いろりは羞恥（しゆうし）に頬（ほ）を染め、消え入りそうな声で言った。

「どういった風の吹き回しなのです？ 主が夜会を観戦されるなんて」

「今夜は特別面白いものが観られるの。これを見逃す手はないわ」

「……雷真殿は大丈夫でしょうか。聞けば、今宵（こんしやう）はひどい乱戦になると」

いろりの言葉通り、既に二十人近い学生がフィールドに立っていた。もちろん、同じ数の自動人形（じゆうじんぎやう）も待機している。

「いいえ。どうやら乱戦にはならないわ」

フィールドの学生たちは談笑している。ずいぶん、仲がよさそうだ。

いろりはぴんときた様子で、あわてて腰を浮かせた。

「まさか、彼らは一味同心——!?」

「坊やもずいぶん認められたものね。(剣帝)がついているとは言え、榮えある機巧学院の生徒さんたちが、あんなに坊やを恐れるなんて」

「ですが、主——あれでは数的不利が……—」

「座りなさい。おまえも夜々の暗れ姿が見たいでしょう——いえ、坊やのかしら？」

「なな何をおっしゃるのです！ そそそのような邪心、私は微塵も……っ—」

いろりは見る間に頬を染め、うつむいてしまった。姉の態度を見て、小紫がくすりと笑う。それから少し切なげに、眼下に視線をやった。

そちらでは、ちょうど、今夜の「主賓」が現れたところだった。

「あ、フレイ——ロキ——やっときたわね——」

シャルはびよこんと跳ねて、顔なじみに駆け寄った。

ゲートをくぐって現れたのは、フレイとロキの姉弟。

ひと目見て、二人の雰囲気が違うことに気付く。

フレイはガラム全員、十三頭を連れていた。フレイも夫たちも、きりつと凛々しい顔を

している。見たところは何も変わらないが――

「シャルよ」

帽子の上でシグムントがささやく。シャルも「ええ……」とうなずいた。

シャルの第六感がとらえている。かつてはふらふらと定まらなかつたフレイの魔力が、今はどつしりと落ち着いている。相当、自信をつけたようだ。

フレイは堂々とシャルの方に歩いてきて、階段に蹴つまずいてコケそうになった。

シャルは何となくほっとした。ドジはそのままだった。

一方、ロキはいつものように無愛想で、シャルには一瞥をくれただけだった。こちらはもともと実力者なので、大きな変化は感じない。

変化したのはむしろ、自動人形オートマタケルビムの方だ。

全体がキラキラと輝いている。金属が磨き上げられ、美術刀剣のようにくもりがない。

装甲はかつての銀一色ではなく、あちこちに金色のパーツが組み込まれていた。

――いや、変わったのは外見ではない。

（全然、機械音がしないわ。動きもなめらかで……生き物みたい）

単純な調整だけで、こうはなるまい。かなりチューンを――ひょっとしたら、基本設計からやり直したのかもしれない。こちらにも明らかに別物だった。

フレイが背伸びして、フィールドを見渡した。

「う……シヤル、ライシンは？」

「まだよ——つていうか、知らないわよ、あんなやつ——」

別れたときのことを思い出し、むかむかが込み上げる。

「ふん、また遅刻か」

ロキが舌打ちをして、吐き捨てるように言った。

「自覚のない極東バカだ。〈手袋持ち〉が式の開幕に遅れるなど——」

「バカ言うな新大陸バカー。ちゃんと間に合っただろ！」

ゲートの奥から怒鳴り声が飛んでくる。

忘れるはずもないその声に、シヤルの心臓が大きく跳ねた。

暗いゲートを通って、二人ぶんの足音が近づいてくる。

ロキが小馬鹿にしたように——しかし笑って、真っ先に口を開いた。

「きたか。尻尾を巻いて棄権すればよかったものを——」

「ぬかせ。おまえこそ棄権しろ。姉ちゃんの前で恥かかないうちに」

「黙れ。殺すぞ——」

「やってみろ——」

「ケンカは、めっ——」

キスしそうな距離でにらみ合う二人を、フレイが必死に引き離す。

現れたのは、やはり雷真だった。夜々を連れ、当たり前という顔で立っている。

シャルはあわててそつぽを向いた。別れ際の口論がまだ尾を曳いている。雷真から謝ってくるまで、絶対に口をきかないつもりだった。

だが、ちらりと横目で盗み見た瞬間、その決意はもろくも崩れ去った。

「ちよつと……どうしたのよ、それ―」

雷真は右腕に布を巻いていた。包帯ではない。もつとかさばる、シーツのようなもの。ぐるぐる巻きにして、ベルトで留めている。

「よう、シャル。久しぶりだな」

「バカねー そんなことより、それよー」

「ああ……ちよつとな。ひとさまにお見せするのが忍びない状態なんだ」

「……怪我したの？」

「まあ、似たようなもんだな」

不安な気持ちで夜々の顔を見る。夜々は「心配ないですよ」という顔をしたが、それがえつて、シャルの不安をかき立てた。フレイも同じ気持ちなのか、無言で雷真を見つめている。ただひとり、口きだけが違う反応で、せせら笑った。

「やはり貴様は救いようのないバカだな。人形使いが利き腕を痛めるとは」

「夏休み明け早々、早速ケンカを売るな（ねじれの関係）バカ―」

「……初等教育で習う単語を、バカが唐突に持ち出したな。何が言いたい？」

「俺とおまえはどこまでいっても交わらないって意味だよー」

「……望むところだが、悪口なのか、それは？」

「気まずい沈黙。引っ込みがなくなったらしく、男子二人がにらみ合う。仕方なく、シャルが仲裁に入った。」

「そんなこと言っちゃって、本当はふたりともショックなのよね？ きゃー♡」

「妙な誤解をするなー 何で急に興奮してんだー」

「雷真……夜々というものがあいながら……そっちの道に……!?」(うしろ)。

「相変わらず、騒がしいことだね」

突然、挑発的な声が飛んできて、一同に緊張が走った。

シャルの背後に、礼服を羽織って立つ、ひとりの男子学生がいた。

眼鏡のブリッジを押さえ、知性的な双眸(まなこ)を向けている。(黒鉄結晶)アーバイン。金属

製の見事なゴーレムを従えている。

既に顔見知りなのか、雷真は気安く笑いかけた。

「よう、(黒鉄結晶)先輩。舞台の上ではよろしく頼むぜ」

「余裕だね。少しは力をつけたの——」

「で、ロキ。そういうおまえは、足を治したんだろうな？」

「いつの話をしている。オレもフレイも万全の状態だ。自分の心配をしろ」

「そうよー 貴方は毎回死にかけのバカキングなんだからー」

「そんな王位はいらねえー」

「また怪我して、肝心の修行とかいうのはどうだったのよー」

「ああ、それは失敗した」

即答する。シャルとフレイ、おまけにロキも言葉を失った。

しゃべるタイミングがきたと思ったのか、アーバインは余裕ぶって、

「そちらは三名か。こちらは僕を含めて一九人がお相手しよー」

「今の俺に（紅翼陣）は無理だ。体得するには、あと二十年ってとこだな」

「え、じゃあ、何よ。その腕はひょっとして……？」

「失敗の代償だ。だが、成果がまったくなかったわけじゃないぜ。俺なりに――」

「他人の話は最後まで聞けー 無礼者がー」

無視されて逆上したようだ。アーバインの腕から強烈な魔力がほとばしった。

そのときにはもう、ゴーレムが飛び出している。魔力の供給を待たずに動き出すとは、

実に無駄がない。間違ひなく凄腕だ。

移動しながら魔力を受け、ゴーレムの右腕がぐにやりと変形した。それは一瞬で膨れ上がり、巨大な戦斧に姿を変える。

斧はそのまま、まっすぐ雷真に振り下ろされた。

居合わせた誰もが、雷真は「夜々で受ける」と考えた。アーバインもそのつもりだったはずだ。だからこそ、雷真を直接狙ったのだ。

しかし、夜々はちらつと雷真を見ただけで、動かなかった。

シャルは仰天した。シグムントも驚いたのか、帽子に爪を立てた。だが、戦斧はとつくとトップスピード。今さら、どうしようもない。

戦斧が雷真に直撃し、足もとの床に亀裂が生じた。

雷真の体がわずかに沈んだ……が、それだけだ。

二百キロはあろうかという戦斧を、雷真は左手一本で受け止めていた。

客席に動揺が走った。対面の席からは、この一幕が見えている。

「他人が話してるときに、横から割り込んでくるのは無礼じゃないのか？」

雷真が戦斧を握りしめると、金属の刃が欠け落ちた。

アーバインのひたいが青ざめる。だが、表情は変えない。アーバインは眼鏡のブリッジを指で持ち上げ、きびすを返した。

「ふん……今夜の戦いを楽しみにしているよ」

悠然と引き下がる。だが、彼の腰が引けていることを、シャルは見抜いていた。なぜなら、シャルもまた、同じ気持ちだったから。



（何をしたの……？　今のは、どうやって……!?）

その光景を見て、いろりは一瞬、呼吸を忘れた。

「主——あれは……!?」

「何を驚いているの。坊やは（金剛力）を使っただけ——本来の用途でね」

いろりは思わず小紫を振り向く。そう、小紫の（八重霞）と同じく（金剛力）も周囲に効果を及ぼせるのだ。だからこそ、要人警護に適している——

ただし、制御が極めて難しい。雷真の技量では、到底不可能だったはずだ。

「これでようやく、坊やも夜々と並んだわね」

硝子は満足げに笑っている。

「この先、坊やに手傷を負わせるのは容易ではない。夜々が近くにいる限り、坊やもまた、金剛力を持つのだから」

「夜々と同じ力を持つ戦士が……二人になると？」

「そう上手くはいかないわ。でも、少なくとも怪我は減る——と信じたいわね」

会心の笑みが苦笑いに変わる。硝子の苦笑の意味は、いろりにもよくわかっていた。

雷真の無鉄砲は折紙つきだ。それに、（金剛力）が効かない相手もいる。

ふと、となりの小紫がため息をついた。

「やっぱり雷真のとなりには、夜々姉さまが一番似合うね」
さみしげな横顔。いろりは微笑み、小紫を抱き寄せた。

「……姉さま？」

「その結論は早計だ。雷真殿をあままで磨いたのはおまえだぞ」

――

「そして、それがわからぬ雷真殿ではない」

小紫の目尻に涙がにじむ。それから一転、にこっと微笑んだ。

「じゃあ、いろり姉さまにもチャンスがあるかもねー」

「ばば馬鹿を申すなー わわ私にはこそ、そのような私心などかけらもっ！」

学院長、学生総代の激励が終わると、すぐに「五十番目の夜」が始まった。

敵も戦力の出し惜しみをするつもりはないようだ。アーバインを筆頭に、一九人全員がフィールド内に留まり、陣を張った。

アーバインのメタルゴーレムを含め、重量級の自動人形五体が（壁）を形成する。その後列には軽量級——こちらは遊撃を担うタイプか。そのさらに後方に、精霊や魔神をかたどった、いかにもな「遠距離攻撃タイプ」が控えている。

まさに軍隊。どこかで見たような意匠が多く、変な統一感があつて、余計にその印象を

強めている。彼らの自動人形は、一度はエドマンドによって奪われている。再調達する際、仲間内で示し合わせたのかもしれない。

フレイとロキは固まって、フィールドの反対側に立っている。

(……この中で一番厄介なのはロキだな)

すぐに雷真は方針を決めた。ロキに集中するため、まずは邪魔な連中を排除する！

ロキから視線を外し、アーバイン軍の方に向き直る。

「さーて、夜々。まずは肩慣らしと行こうぜ」

「お供します雷真。妻としてっ！」

「いや違うだろ!? 大観衆の前で妙なこと叫ぶなー」

どつと笑い声上がる。雷真は赤面しつつ、やけくそ気味に魔力を練り込んだ。

「光焰八結——魔敵らすぞー」

「はいー」

魔力を受け、夜々が地を蹴る。地表をすべるような、なめらかな疾走。進行方向から、火炎や土塊など、派手な攻撃魔術が飛んできた。狙いの甘い、大げさな魔術ばかりだ。夜々の足を止める狙いだろう。

相手の思い通りになる必要はない。雷真はますます夜々を加速させた。

夜々が正面の巨人に体当たりする。力と力がぶつかり合い、拮抗した瞬間、

「そら……よっ」

雷真の蹴りが巨人の頭部にめり込んだ。

一回転して振り下ろす蹴り。かかどが巨人のひたいを割り、粉砕した。

夜々を陽動に使う、以前とは逆のコンビネーション。使いどころが難しいが、これこそ
 〈金剛力〉の真骨頂だ。

着地を狙って襲いくるゴーレムを、今度は夜々の蹴りがはね飛ばした。

そこから、二人がかりで格闘戦にもつれ込む。激しく動いて敵陣をかき回し、手当たり次第に自動人形を蹴散らしていく。

予想外の展開に、敵は早くも浮き足立った。夜会の規約では「術者を魔術で狙う」行為は反則になる。術者の雷真が突っ込んでくるので、対応に苦慮しているらしい。

押し切れる――わずかに気がゆるんだ瞬間、背後に黒い影がかかった。

怪鳥、とでも言うのか。鳥型自動人形に頭上を取られた。

とがったくちばしの奥で、銀色の液体が渦を巻く。

（毒液――酸か!?）

吐き出すつもりだ。射線上には雷真と夜々がいる。この角度なら、雷真に重傷を負わせたとしても、夜々を狙ったと言いつたが立つだろう。

だが、怪鳥は液体を吐き出す前に、真つ二つになった。

左右に分断され、別々に落ちていく。怪鳥を削ったのは、回転する大剣だった。以前とは次元の違う高速回転、そして高機動。推力に余裕を感じさせる優雅な動きで、大剣はくると反転し、空中で《機械の天使》へと姿を変えた。

「背中がガラ空きだ、猪突猛進バカが」

ロキが嫌みを言う。敵に回ってもおかしくないと思っていたのに——どうやら、今夜は味方らしい。雷真は嬉しくなつて、大声で叫んだ。

「うるせー後方待機バカー 臆病者ー」

「ケルビム、あの直情径行バカに目にもものを見せろ」

「[Im ready]」

金色の軌跡を残し、ケルビムが敵陣に突っ込んでいく。それは夜々の頭上をかすめ、敵をなぎ払った。超高熱の火炎に焼かれ、自動人形がバラバラになる。

「他人の獲物を横取りするな！ 夜々が引きつけたのにー」

「引きつけた？ 囲まれたの間違いだろう？」

ふん、と勝ち誇つたようなロキ。少年二人はにらみ合い、やがて張り合うように、二人そろつて敵集団に突撃した。

「何やってるのよー 考えなしー」

二人の無謀な突撃を見て、シャルは客席の最前列で飛び上がった。だが、二人は止まらない。竜巻のように暴れ回る。十数体の自動人形が翻弄され、たちまち陣形が乱れた。

敵の自動人形が一体、接近戦を嫌って距離を取ろうとした——刹那、がおんつ、と轟音が響き渡り、《音の砲弾》が直撃した。

螺旋を描く空気の刃が、自動人形を粉々にする。もちろん、フレイの攻撃だ。

まさに固定砲台。飛び出してきた相手を、精確に狙撃し、始末していく。かつての大雑把な《砲撃》とは違う、コントロールされた精密射撃だった。

「何なんだ、これは……圧倒的じゃないか……」

あちら方の自動人形がスクラップになる頃、アーバインのつぶやきが、風に乗ってシャルの耳にも届いた。

アーバインは信じられない様子で、戦場の惨状を呆然と眺めている。

「俺たちとて、《手袋持ち》だぞ？　それが、こんな一方的に……」

アーバインは憤怒の形相で、ありつただけの魔力を練り上げた。

彼のメタルゴーレムが、スライムのような流体に変化する。

そのまま、雷真にのしかかる。雷真は人間離れした脚力で飛び退いた——が、スライムの一部が鋼線のように伸びて、雷真を追撃した。

きわどくかわす。近くにいた自動人形オートマタンが巻き添えを食って、頭部を切断された。恐るべき強度。そして切れ味――

着地した雷真ライマの頬に切り傷ができています。シャルの血圧が急激に下がる。だが、雷真はさらに、シャルを貧血に追い込むような行動に出た。

真正面から、スライムに向かって駆け出したのだ――

「接近しすぎよ！ 死ぬ気!?」

思わず悲鳴をあげてしまう。だが、雷真は止まらない。

「無駄だ！ 接近したところで、打撃など効かん――」

アーバインが笑う。だが、雷真は意にも介さず、布を巻いた方の腕で、メタルゴーレムの表面に触れた。

びくんつ、とスライムが盛り上がり、全体が巨大な球のようになった。

不自然な変化。観衆が現象を理解する前に、夜々ヤヤが雷真のとなりに立っていた。

「このネタはもう、夜会が始まる前に割れてんだよ」

大きな水玉に、夜々がびたりとこぶしを当ててる。

「天喰絶術――（破却水月）」

ずどんつ、と迫撃砲のような音とともに、夜々のこぶしが撃ち込まれた。

シャルの脳裏に、雷真がシャルを助けてくれた、あの夜のことが甦る。

ぶしゃあ、と水音を立てて、金属の水玉は破れた。

シャルの帽子の上で、シグムントが低い声を出した。

「シャルよ、見えたか？　今、ダークマテリアル『黒鉄結晶』の魔術が制御を失った」

「どういうこと？」

「流体を維持できず、一時的に——あるいは部分的に——固体になった。雷真はどうやら、相手の魔術に干渉する術を身につけたようだ」

「干渉……って、魔術回路なしで？」

相手の魔術を妨害した？

そんなことができるなら、ラストアカノンの優位性が崩れてしまう。

「無闇に恐れることはない。君やロキの支配力を上回るとは限らん。だが、隙を突かれることがあれば……そして彼は、そうした知略に長けた男だ」

「……そうね。あいつ、変なところで機転が利くもの」

何度も彼の戦いを見てきたからわかる。雷真は、一筋縄ではいかない相手だ。

フィールドではもう、完全に決着がついていた。

雷真とロキが、例によって子供じみた言い争いをしている。

「ケルビムの動き、見違えたわね」

「パーツを変えたようだな。もともとケルビムは無機物の塊——ロキが扱うには少々もの

足りない自動人形オートマトンだった。魔力への親和性という面で」

「ケルビムの性能が、やっとロキに吊り合うようになった……ってこと？」

「吊り合いとは言いで妙だな。その通りだが、私が真に恐ろしいと思うのは――」

「わかってる。奥の手を隠してゐるってことね」

あれだけの力を見せつけておいて、ロキは切り札を残している。いや、ひょっとしたら雷真ライマコも。シャルはたまらない気持ちになった。

「……何か、ずるいわ。男の子って、どんどん強くなっていくんだもの」

「珍しいな。君が弱音を吐くとは」

「よ、弱音じゃないわよ―― 私は女王陛下から一角獣の紋章と北の領地を賜ったプリュー伯爵家のシャルロットよ？ あんなバカな連中――」

言葉に詰まる。シャルは数秒、言葉を探し、結局はこう言った。

「何とかしてやるわ！ 何とか！――」

やはり弱気だ。シグムントは苦笑を浮かべ、いずれ脅威になるであろう、少年二人を眺めた。彼らが発散する「若さ」が、今は無性にまぶしく見えた。

最初から最後まで、実にあっけない戦いだった。

「……まあ当然だな。あの程度の連中に苦戦するようなら、私が殺してやる」

はそつとつぶやく。となりの紳士がびくつとして、あわてて席を離れていった。

物騒な発言をしたのは、二十歳そこそこの、若い女性だった。

コルセットで締め上げた、民族衣装ふうの可愛らしいドレスを着ている。短いスカートから組んだ足が大きく露出していて、一見したところは扇情的なのだが、かたわらに置いた大ぶりの剣と、剣呑なオーラが、色気を完全に殺していた。

「（下から二番目）はずいぶん腕を上げたようだな」

空いた席に断りもなく腰を下ろし、赤毛の美女がそう言った。

「よほど腕の立つ指導者に恵まれたと見える」

親しげに笑いかけてくる。グリゼルダは無表情で応えた。

「久しいな、キンバリー講師——いや、教授に出世されたのだったな」

「四年ぶりだな、ゼルダ——いや、（迷宮の）陛下とお呼びすべきでしようか？」

「ゼルダでいい。言葉も普通で。貴女に敬語を使われるのはむずがゆい」

「そうさせてもらおう。今後は学院の研究者に？」

「ああ。魔王フレイマンならば教授待遇で迎え入れてもらえる。四年粘って、ついに私を口説き落と

した男がいてね」

キンバリーの眼が光る。その男とはもちろん――

「学院長エドワード・ラザフォードか」

「……あの男が（アリアドネの糸）を狙っているのは間違いない。だが、ここが一番安全だということもまた事実だ。古巣は居心地もいいしな。それに」

ふう、と切なげに嘆息する。

「私が土地に残れば、市民たちに迷惑がかかる」

「だろうな。……では早速、プレゼントをいただこう」

グリゼルダは座席の下からトランクを引っ張り出し、ロックを外した。

ごそつと紙の束をつかみ上げ、キンバリーに差し出す。

キンバリーは丁寧に受け取り、慎重な手つきで紙をめくった。

「ほう、見事にバラバラだ。いかにも解説できそうに見えるが……無理だな？」

苦々しげに笑う。それから、交戦フィールドに視線をやった。

「これも、あいつの入れ知恵かね？」

ロキと口論中の重真を示す。グリゼルダはうなずいた。

「ああ。妙な頓知を思いつく。チェスの終盤みたいな奴だよ」

「こちらに半分、残りの半分はラザフォードのもと……か」

「魔術師協会と学院が仲良く手を取り合えば、秘術を得られるかもしれんぞ？」

「タチの悪い冗談だ」

「……だが、いつか遠い未来、そんな時代が訪れたなら——アリアドネの秘密が漏れても」

大丈夫だと、私は思う」

「意外とロマンチストだな」

バカにしたような口ぶりとは裏腹に、キンバリーの目は笑っていないかった。

「よく決心したな。数百年の水きに渡り、ずっと守ってきたものだろう？」

「時代は変わる。よくも悪くも。二十世紀はそういう時代だ。そんな時代に、私の一族だけが昔のまま——というわけにはいかんさ」

「……君の安全は保障しよう。学院も同じことを言っただろうがね」

「ああ、頼む」

キンバリーは紙の束をまとめ、持参したケースに収めた。

魔術で封を施し、深呼吸。それから、からかうような調子で言った。

「物好きな女だよ。自ら進んで魔窟に足を踏み入れるとは。君は生きた実験材料、どんな狡猾な手段で、解剖に追い込まれるかわからんよ？」

「ああ、確かに無謀だな。だが……」

グリゼルダの頬がほんのり色づき、黒い瞳が湿り気を帯びた。

「護ってくれる者もいる」

彼女の視線の先には、しつこく口舌を言い争う、雷真の姿があった。

キンバリーはぼかんとした。

それから半眼になって、おそろおそろといったふうには、

「……ゼルダ。世間知らずの君に忠告するが、あのバカのことを言っているのなら、あまり期待しない方がいい」

「む？ それはどういう意味だ？ キンバリー女史と言えど、私の弟子を愚弄するのは許さんぞ。あいつは確かに護ってやると言ったのだ——いや、正確にはその、護ってやって何が悪い、というようなことなのだがっ」

「あれは女と見ると、誰にでもそういうことを言うんだよ。見てみろ」
ため息を漏らしながら、フィールドを示す。

口げんかは終わったらしい。ロキは不機嫌そうに、ケルビムを連れてフィールドの外に出て行く。一方、雷真は夜々に飛びつかれ、必死に引きはがそうとしていた。

グリゼルダは鼻で笑った。

「見くびるな。私は自動人形に嫉妬するほど子どもではない」

「違う違う。ほら」

まだ多くの観客が残っているというのに、夜々が服を脱ごうとする。シャルとフレイ、今日に限ってはアンリまでもが、それをやめせようと乱入してきた。

帰路につく人々で、あたりは騒がしい。だが残念なことに、優れた魔術師であるグリゼルダの感覚は、雷真にひけを取らないほど鋭敏だった。

耳を澄ますと、彼らのやり取りが聞こえてくる――

「邪魔しないでくださいー 雷真は夜々に相応しい男になるって言ったんですー」

「私には、いくらでも足を引っ張れって言ったのよー」

「ライシンさんは、私のこと他人じゃないって言いましたー」

「う……ライシン……家族……」

少女たちの主張を聞いているうちに、びきびきつ、とグリゼルダの血管が鳴った。

「あ・い・つ・めー」

客席を蹴って跳躍。グリゼルダは投石器で打ち出されたように天を舞い、フィールドへと突っ込んだ。

空中で剣を抜き、殺気を隠さず振りかぶる。

「げっ、お師匠……」

さんざん恐怖を叩き込まれているだけあって、雷真は即座に気付く。素早く夜々に魔力を渡し、〈金剛力〉を発動した。

左腕で斬撃をブロック。ずどんっ、と石畳の足場が沈む。

衝撃波が生じて、少女たちが一斉に弾き飛ばされた。シャルもフレイもアンリも、犬のガルムたちも、目をまん丸にして、降ってきた者を見上げる。

フェミニンな衣装に幅広の剣。まとう魔力は桁違い。初めて見る彼女たちからすると、

それは何と云うか、謎の怪物だった。

グリゼルダは彼女たちの視線などものともせず、雷真に剣を突きつけた。

「貴様、そこへ直れ―斬り落としてやる―」

「何をだ―つか、いきなり何だ!?」

「黙れ!―戦場では貴様のような奴から死んでいくのだ!―」

「あんたに殺されてな!―」

逃げ惑う雷真を追い回す。その傍若無人、かつ滅茶苦茶な展開に、キンバリーは心からあきれ、そして、腹を抱えて笑ったのだった。

かくして夏は終わり――

再び、夜会の幕が上がる。

あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

おかげさまで、機巧少女も6までできました！

前回のあとがきで「6は第一部完つばくなる」とか言いましたが、実際書いてみると、そうでもなく——むしろ「夏休み」っぽいお話になりました。

さすが海冬レイジ——期待を裏切らないグダグダな生き様——

でも、ご安心ください。小説本編の内容は作者の生き様ほどグダグダじゃない……はずです。実際のところはぜひ、貴方のその目でお確かめくださいね——

そんなわけで、いよいよ夜会も折り返し地点です。

ストーリーも中盤に……って言うか、やっと本筋に入りそう……って言うか。

夜会もいよいよ本格化し、雷真は色んなアレコレの核心に迫っていく——ことになると思います。学院のアレだったり、雪月花のコレだったり、協会のソレだったりに肉迫していく予定ですので、今後とも機巧少女と海冬レイジをよろしくお願いします。

今回も、るろおさんには大変お世話になりました。

イブシロンの設定画が最高にポンコツ可愛くて俺大歓喜！

本編に関しましてもアドバイスをたくさんいただきました。確実に品質向上が見込めるので毎回頼ってしまいます。すみません、ありがとうございます……！

そしてそして、お忙しい中、るろおさんが毎月描いてくださっている――

とらのあなさん広報誌「とらだよ。」連載中のまんががすごい！

機巧少女のヒロインたちが、MF文庫Jの他作品からコスチュームをお借りして、コスプレしちゃうという素敵すぎる企画です。

ほかではまず見られない激レアな舞姿、ぜひチェックしてみてくださいね。

担当庄司さんをはじめ、文庫・コミック編集部の皆さま方には大変お世話になっております。特に去年の後半からこっちがダイナミックにダイナマイト。海冬レイジの情熱が熱暴走で大変なことに……！

おかげさまでギアが噛み合ってきました……って、乱れてたの僕だけだけど！ もっと頑張ります……！

高城計さんが描いてくださるコミック版機巧少女は、ついに文庫1巻のクライマックス

を迎えています。シャルの心理描写とか最高に素敵なビジュアライズ！あの場面を読むと、シャルをすごく大事にしたいくなります……！

月刊コミックアライブで連載中ですので、こちらもチェックよろしくです。

私事ですが、8月には海冬レイジ関連のコミックが出ます。

飯田のぎさんが描いてくださる「未来少女エモモーション」。こちら海冬レイジが原作やっております。こちらもぜひ応援してくださいブリーズ！

このエモモなんですが——単行本発売に向けて、担当中村さんがすごい仕掛けを打ってくださいって……ああバラしたいーバラしたいけどバラせないー

発売日が近づきましたら情報公開されると思いますので、どうぞお楽しみに。

ではまた次回、機巧少女7でお会いできますように！

2011年6月 海冬レイジ

こんにちは、絵の人です。
6巻ですぜ。

暑くて暑くて、なんだかへたれ気味なので
過去の夜々さんやイブシロンさんに
ガッツリと罵られたり罵倒されたりして
気合い入れたい今日この頃です。
あ。グリゼルダさんのガチ罵倒とか想像すると
ちょっとだけ涼しくなるかも。





マシンドール
機巧少女は傷つかない6
Facing "Crimson Red"

発行	2011年7月31日 初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
発行人	三坂崇二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒104-0061 東京都中央区新富 8-4-17
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2011 Reiji Kaito

Printed in Japan ISBN 978-4-8401-5973-1 C0195

※本書の内容を無断で複製・転写・盗送・データ配信などを行うことは、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示しております。

※乱丁本・落丁本はお取替いたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話：03-70-002-001

受付時間 10:00～18:00(土日、祝日除く)

【ファンレター、作品のご感想をお持ちしています】

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト 株式会社メディアファクトリー

MF文庫J編集部宛付「海冬レイジ先生」係 「るるお先生」係



左記より本書に
関するアンケートに
ご協力ください

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用する画像の無料
権利を受けプレゼント! ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送
信時にかかる通信費はご負担ください。 ★中学生以下の方は、保
護者の方の了承を得てから回答してください。

